

西御門遺跡 (No.325)

西御門一丁目 55 番 5

例 言

1. 本報は、鎌倉市西御門一丁目55番5における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
調査期間は平成18年4月4日～同年5月29日にかけて実施され、調査対象面積は30㎡である。出土遺物に関しては鎌倉市教育委員会がこれを保管している。
3. 調査団編成は以下のとおりである。
調査の主体 鎌倉市教育委員会
調査担当 森孝子
調査員 渡辺美佐子 下江秀信
調査協力者 倉沢六郎 片山直文 牛島道夫（以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。
遺構図 1 / 80・1 / 60・1 / 40（遺構図の水糸高は海拔高を示す。）
遺物実測図 1 / 3・1 / 6・1 / 1（銭）
5. 遺物実測図には次の記号が使用されている。
釉の限界線—・—・—・— 使用痕の範囲<————>
調整の変化点— — — 加工痕の範囲<— — —>
6. 本書の執筆は森が行なった。
7. 本書の図版作成及び写真撮影は次の者が分担した。
遺構図版 赤堀祐子 森孝子
遺物図版 松原康子 岩崎卓治 岡田慶子 森孝子
遺構写真 森孝子
遺物写真 赤堀祐子
写真図版 赤堀祐子
8. 現地調査及び資料整理においては、以下の方々からご助言、ご協力を賜った。お名前を記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）
福田誠 馬淵和雄 原廣志 汐見一夫 松尾宣方 沖元道

目次

本文目次

第一章 本調査地点の位置と歴史的環境	181
第二章 調査の概要	184
第1節 調査の経過	
第2節 グリッドの設定・国土座標との合成	
第3節 基本層序	
第三章 検出遺構と出土遺物	188
第1節 中世第1面	
第2節 中世第2面	
第3節 中世第3面	
第四章 まとめ	209

表目次

遺物観察表	211	出土遺物点数表	218
-------------	-----	---------------	-----

挿図目次

図1 本調査地点と周辺遺跡	183	図16 井戸2出土遺物	194
図2 遺跡位置図	185	図17 土坑2・3	195
図3 グリッド配置図	186	図18 土坑3出土遺物	195
図4 基本層序	187	図19 2面出土遺物	196
図5 1面遺構配置図	188	図20 3面遺構配置図	197
図6 溝4	189	図21 溝2・3	199
図7 土坑1	189	図22 溝2出土遺物(1)	202
図8 土坑1出土遺物	189	図23 溝2・溝2裏込め出土遺物(2)	203
図9 1面・表採出土遺物	191	図24 溝3出土遺物(1)	204
図10 2面遺構配置図	192	図25 溝3出土遺物(2)	205
図11 溝1	192	図26 溝5	206
図12 溝1出土遺物	193	図27 溝5出土遺物	206
図13 井戸1	194	図28 方形土坑1	207
図14 井戸1出土遺物	194	図29 3面出土遺物	208
図15 井戸2	194	図30 最終面まで出土遺物	208

図版目次

図版1	219	図版5	223
A. 北方より調査地点を望む		A. 3面溝2・3南岸東側木組み護岸施設 (北から)	
B. 表土掘削前(北西から)		B. 同上近景(北から)	
C. 表土掘削後の調査区(南から)			
図版2	220	図版6	224
A. 1面東半(北から)		A. 3面溝2・3南岸西側木組み護岸施設 (北から)	
B. 1面西半(南から)		B. 同上近景(北から)	
C. 1面P9出土埋納かわらけ(南から)			
D. 1面覆土出土瓦質風炉(南東から)		図版7	225
図版3	221	A. 3面溝5(東から)	
A. 2面東半(南から)		B. 調査区西壁土層	
B. 2面西半(北から)		図版8	226
C. 2面井戸1・2(南から)		出土遺物(1)	
図版4	222	図版9	227
A. 3面東半(北から)		出土遺物(2)	
B. 3面西半(南から)		図版10	228
C. 3面溝2・3(西から)		出土遺物(3)	
D. 3面溝2・3近景(西から)			

第一章 本調査地点の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉市西御門一丁目55番5に所在する。鎌倉市の東方、南側に開口する谷戸の東山麓に位置している。

現在、鎌倉市街地の中心には鎌倉幕府を開幕した源頼朝が由比郷元八幡より勧請した源氏の鎮守である鶴岡八幡宮が鎮座している。その八幡宮から西方200mあたりが源家三代の御所と伝承される「大倉幕府跡」といわれる遺跡地である。この遺跡地の範囲は現在の清泉小学校を中心とした260×210m四方の地域で、現在までに14地点の発掘調査が実施されており僅かではあるが様相が解明しつつある。この遺跡地の本丸とみられる清泉小学校の発掘調査は過去に1例実施された¹。エレベーター設置に伴う事前調査で、その結果14世紀前半を中心とする遺構群が検出されたが、該期の遺構群は検出されておらず御所内の様相は依然として不明のままである。しかし、平成19年の調査において東限と推定される薬研堀の一部が検出²され、御所の範囲が僅かなりとも理解されつつある。また、「大倉幕府跡」の遺跡地の北側には「法華堂跡(源頼朝墓)」、「北条義時法華堂推定地」等の存在が確認³されており、この辺り一帯は鎌倉幕府と直結する遺跡地となっている。本調査地点は法華堂跡より430m北側(図1-①)に存在する。また、当調査地点を囲むように大倉山やぐら群、回春院奥やぐら群、千歳やぐら群、西御門やぐら群、西御門東やぐら群、大倉山北やぐら群、大倉山北やぐら群という鎌倉時代から南北朝時代の墓域が存在する。また、太平寺、報恩寺、保寿院があったと伝承されている寺域でもある。

太平寺は本遺跡地の東側が伝承地である。禅宗の尼寺で、梵宇建立は妙法尼であると大休正念の語録「念大休正念禪師語録」にある。妙法尼の寂年は徳治元年(1306)と考証されており14世紀以前、少なくとも鎌倉時代後期にはすでに太平寺は存在していたことが確認されている。

報恩寺は応安四年(1371)に創建された禅宗寺院で、開山義堂周信、開基上杉能憲である。「報恩寺跡」として西御門一丁目91番3他地点(市立第2中学校体育館建設用地、図1-④)で昭和51年1月28日～2月10日に発掘調査が実施された⁴。検出遺構は2時期の石列遺構、井戸址、近年の道路遺構である。出土遺物は南北朝後半期以降のもので創建当時に比定されるものである。検出された石列は方丈の基壇の一部、またもう1列の鍵型に屈曲する部分を石垣と推定している。道路遺構は近年のものではあるが、創建当時の旧地形の参道を利用したものであると考察している。

保寿院は足利尊氏室、基氏の生母、清江禅尼の菩提寺として建立されたものであるが、その後、瑞泉寺の塔頭になり廃年は未詳である。「保寿院跡」の遺跡地内である西御門一丁目992番4地点(図1-⑦)は平成16年1月9日～同年2月25日にかけて発掘調査が実施された⁵。調査の結果13世紀初頭～15世紀前半に渡る10面の生活面が確認された。礎石建物とそれに付随する付属物の遺構を検出している。保寿院であることが実証されたわけではないが各時期における明瞭な地形、および礎石建物とそれに付随する

1 宮田真 平成2年

2 熊谷満 平成19年「大倉幕府跡の調査」『第17回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会

3 福田誠 松尾宣方他 平成17年『法華堂跡』確認調査報告書 鎌倉市教育委員会

4 大三輪龍彦他 昭和58年「報恩寺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』 鎌倉市教育委員会

5 宮田真 滝澤晶子 平成19年「保寿院跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23-2』 鎌倉市教育委員会

付属物の遺構は十分に寺院址になりうる可能性がある」と捉え、今後の研究の礎になると述べている。

また、墓域である西御門東やぐら群の図1-⑤地点では平成13年、14年度に発掘調査が実施され、9基の大型やぐらが検出され、13世紀末～15世紀にかけての豊富な遺物が出土している。⁶図1-⑥地点西御門東やぐら群の延長部分で新たに1基が検出されたため合計10基となった。図1-⑥地点のやぐら群は14世紀～15世紀代に機能し、開削年代は14世紀前半、もしくはそれより遡るという調査結果を得ている⁷。

図1-⑧、⑨、⑩は「大倉幕府北遺跡」といわれる遺跡地である。⑧地点(西御門二丁目816番ほか1筆)からはやぐらが2基検出された。⁸1号やぐらは奥壁幅4.25m、奥行き4.5m、2号やぐらの奥壁4.2m奥行き4.5mで羨道を持つ。羨道床面に半月の蓮華中房状の陰刻を有する。玄門部には扉等の閉塞施設があった可能性を示す柱穴4口があった。開削年代は不明であるが14世紀後葉～15世紀前半頃にはやぐらとしての機能を失ったことが分かっている。⑨地点(西御門二丁目796番1外2筆)からは14世紀後半～15世紀初頭にかけての寺院址、13世紀後半～14世紀前半の溝とそれに伴う道路遺構が検出されている。溝は所謂都市型の箱型のものであり財力の基に造成したことを感じさせる。また、出土遺物に「三つ鱗」文様の鉾があったことも注目すべきである⁹。調査対象外の東側に相当する谷戸奥は40cm足らずで岩盤を削平した平場が検出されており、大規模遺構群が展開している可能性も想像される。

⑩地点からは1基の横穴墓と5基のやぐらが検出された。13世紀後半～14世紀前半に機能したやぐら群で、1号やぐらには階段構造の羨道が付き、3号やぐらは床面に玉石敷き、切石敷き、5号やぐらからは2基の五輪塔が検出されている。¹⁰

本遺跡地周辺部の谷戸の様相は以上のような発掘成果から僅かながらも理解出来るようになってきている。13世紀後半～14世紀前半ごろにやぐらが開削され、それが15世紀頃まで機能したであろうこと、また15世紀初頭には寺院が存在したことも想定されている。同時期に都市型といわれる箱型溝を造成するような都市的要素が波及していたのである。このようにこのような谷戸奥にもかなり進んだ文化的要素が浸透していたのである。

参考文献

貫達人 川副武胤 昭和55年『鎌倉廃寺事典』 有隣堂

⁶ 鈴木庸一郎 岩田直樹 根本志保 平成17年『西御門東やぐら群』かながわ考古学財団調査報告181 財団法人かながわ考古学財団

⁷ 鈴木庸一郎 栗原伸好 平成17年『西御門東やぐら群』かながわ考古学財団調査報告187 財団法人かながわ考古学財団

⁸ 高野昌巳 森孝子 宮田眞 平成12年『大倉幕府北遺跡発掘調査報告書』大倉幕府北遺跡発掘調査団・宮田事務所

⁹ 森孝子 宮田眞 平成14年『大倉幕府北遺跡発掘調査報告書』大倉幕府北遺跡発掘調査団・有限会社博通

¹⁰ 鈴木庸一郎 岩田直樹 根本志保 平成16年『大倉幕府北やぐら群』かながわ考古学財団調査報告162 財団法人かながわ考古学財団



図1 本調査地点と周辺遺跡

第二章 調査の概要

第1節 調査の経過

本調査地点における個人の専用住宅建設計画が申請され、その内容が地盤の柱状改良の工事を伴うものであったため埋蔵文化財に影響を及ぼすと判断され、鎌倉市教育委員会が遺構の有無を確認するための試掘調査を実施した。その結果、現代の客土を取り除いた現地表下86cmにおいて地形面が検出された。以下200cmまで掘り下げた結果、現地表下120cmにおいて更に中世遺構面が確認された。また、かわらけ、瀬戸等の中世期の遺物が出土したため本調査を実施することが決定された。調査対象面積は30㎡である。

本調査は平成18年4月4日～同年5月29日まで実施された。前日の4月3日に試掘調査の資料に基づき重機により表土を85cm前後除いた。また、残土処理の都合上、調査区を東西2区に分け東側をⅠ区、西側をⅡ区として東側Ⅰ区より発掘調査を実施した。

以下、作業内容の概略を記す。

- 4月 3日 調査区を設定し重機によるⅠ区の表土掘削。
器材搬入。仮設電気工事。
- 4月 4日 **Ⅰ区の調査開始**。調査員3名、作業員2名の計5人体制で実施。
1面検出作業。1面覆土より瓦質風炉出土。
- 4月 5日 測量のためのグリッド設定
- 4月 7日 1面全景撮影及び測量
- 4月10日 2面への調査開始
- 4月14日 2面全景撮影及び測量
- 4月17日 3面調査開始
- 4月21日 3面全景撮影及び測量
調査区東壁、西壁の土層を記録
- 4月24日 Ⅰ区調査終了
- 4月25日 鎌倉市三級基準点53208(標高10.305)より調査区内に海拔高を移動
本調査地点の標高は25.505mである
- 4月26日 Ⅱ区の重機による表土掘削
- 4月28日 **Ⅱ区の調査開始**。1面検出作業
- 5月 8日 1面全景撮影及び測量
- 5月 9日 2面への調査開始
- 5月12日 2面全景撮影及び測量
- 5月19日 3面調査開始
- 5月22日 3面全景撮影及び測量
- 5月24日 溝2・3東壁・西壁および調査区北壁の土層を記録
標識番号DO1E029、DO1E030から国土座標の移動
地山確認(黒色土)のためのトレンチ調査
- 5月29日 器材撤収 調査終了

第2節 グリッドの設定・国土座標との合成

地図上に調査地点を合成できるように国土座標を用いた。使用したのは標識番号DO1E029 (x - 75078.852 y - 24539.722)、DO1E030 (x - 75103.945 y - 24548.708)である。

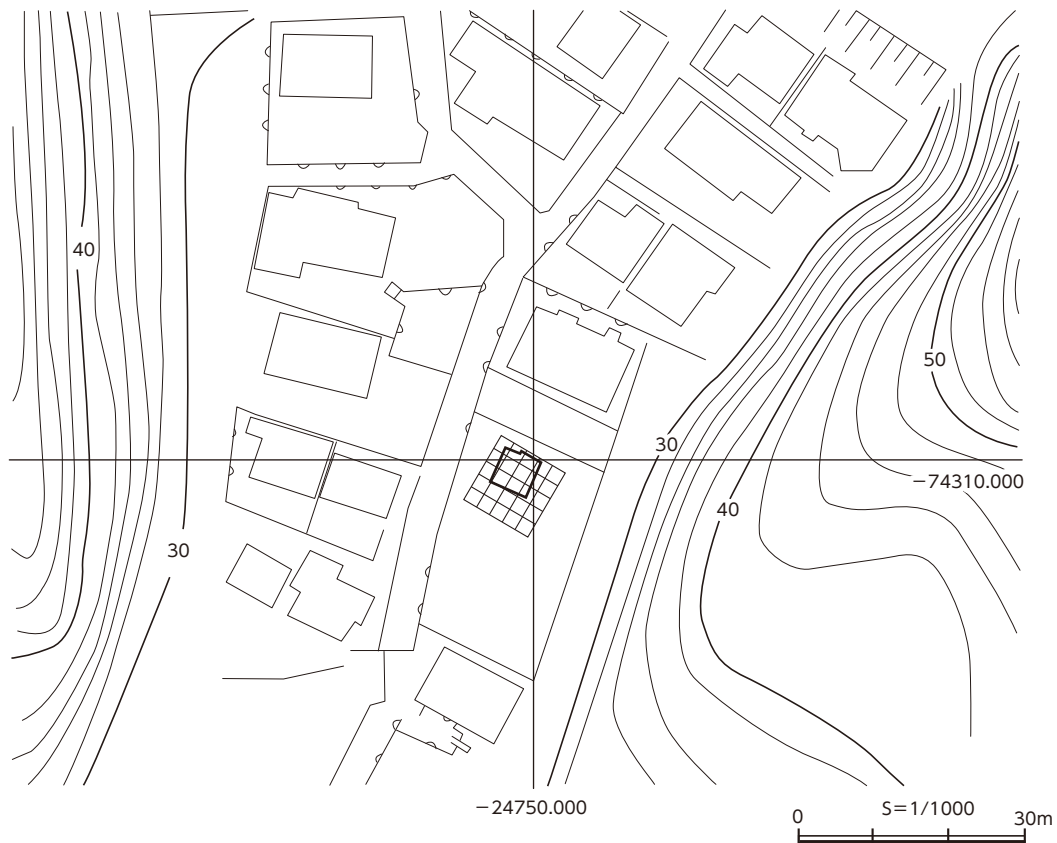


図2 遺跡位置図

グリッドの設定(図2)

調査区北側に任意の点A、Cを設定して測定の基準とした。A点を $x_0 \cdot y_0$ 、C点を $x_{6.496} \cdot y_0$ とし、B点 $x_{0.671} \cdot y_{8.335}$ となる。西から東に1mごとに $x_1, x_2, x_3 \dots$ 、北から南に1mごとに $y_1, y_2, y_3 \dots$ とする。X軸は北から西方向に $28^\circ 25' 46''$ 傾く。A点、B点、C点を国土座標に変換するとA点(x - 74663.204 y - 24460.430)、B点(x - 74670.859 y - 24463.811)、C点(x - 75078.852 y - 24539.722)である。

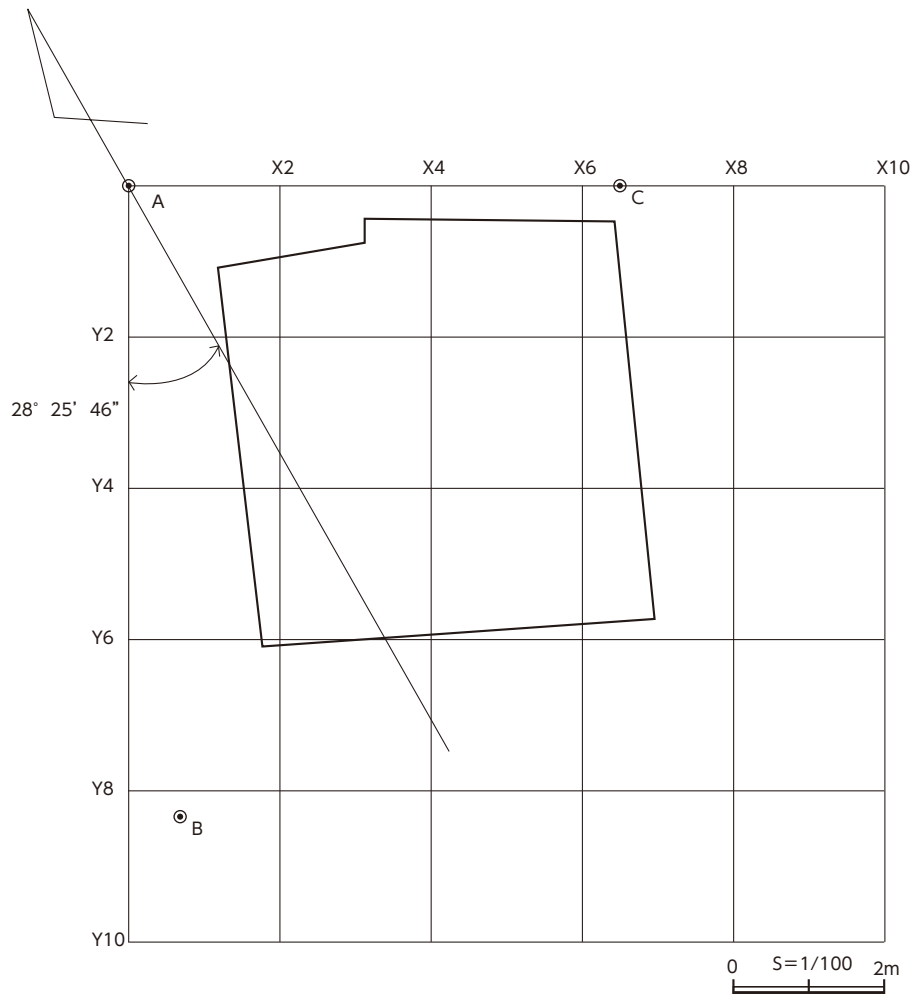


図3 グリッド配置図

第3節 基本層序 (図4)

本調査地点の海拔は25.505mである。表土層は90cm前後の客土である。

中世第1面は遺物包含層の層位が削平されており、表土直下に、海拔24.5m前後で検出された。土丹地形層である。

中世第2面は1面の地形層とその下の茶褐色粘質土を除いた30cmの堆積を除いた海拔24.2m前後に検出された。土丹地形層である。2面の地形層は70cmを超える堆積である。

中世第3面はその2面の厚い土丹層を除いて、海拔23.5m前後に検出された。この地形層は谷戸開発時の造成である。

地山層(黒色土)は第3面から110cm下海拔22.4m前後で検出された。

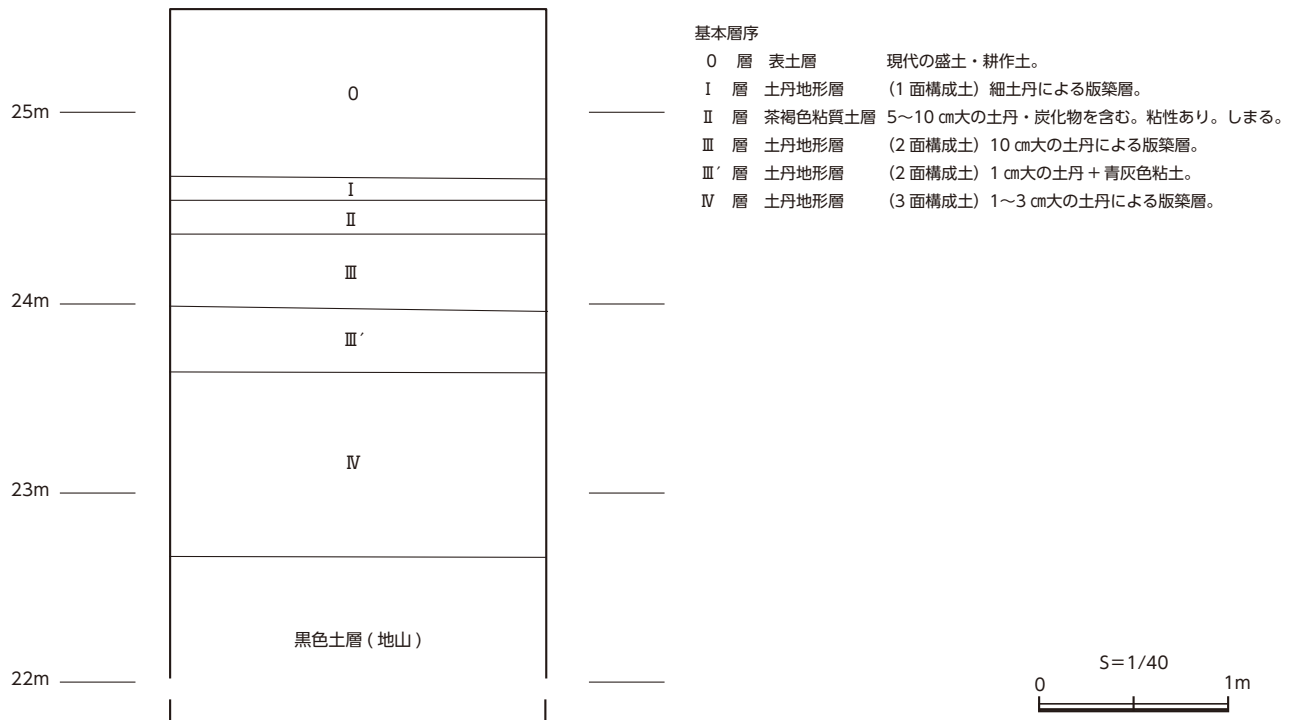


図4 基本層序

第三章 検出遺構と出土遺物

重機により表土層及び田圃の床土(青灰色粘土層)を凡そ85cm取り除き中世第1面が検出された。中世の遺構面は3面検出され、各面ともに強固な土丹地形がなされていた。検出遺構は溝5条、土坑3基、方形土坑1基、柱穴群である。今回の遺構の名称は検出順であり、遺構の新旧関係は無い。

第1節 中世第1面(図5)

中世1面は海拔24.47～24.69mで検出された。遺構面は細土丹で版築されており北から南に緩やかに傾斜している。その比高差は22cmを測る。検出されたのは溝1条、土坑1基、柱穴31口である。

溝は調査区西壁際に検出された。この溝は現在、調査地点の西側を南北に走る南北道路と平行関係にある。今回検出された溝の西側に現在の道路の道筋を踏襲して道路が存在する可能性も考慮され、溝が道路側溝としての機能を有するものであることも考えられる。

土坑は1基検出された。溝4に切られた状態で検出されており、土坑は溝より旧く、1面は少なくとも2時期あることが理解された。

図5で示した通り柱穴群は溝の東側、調査区中央部から調査区外東側に広がる様相を呈して検出された。本遺跡地の主体となる地域は調査区外東にあると予想される。また、P10には鎌倉石切石の礎石が据えられていたが、これに対応する柱穴群は発見できず建物を構築することは出来なかった。さらに、P9からは地鎮のために埋納されたと想定されるかわらけが発見されている。今回、算用数字を付した柱穴は遺物が出土したもの、アルファベットの名称の柱穴は出土のないものとして分けて掲載した。

出土遺物はかわらけを主体に、常滑窯、瀬戸窯の製品等である。また1面覆土から茶道具である瓦質の風炉が出土している。喫茶は当時、寺院等の特殊な空間で行われるものであり、本遺跡地がその一角であったことも考えられる。出土遺物の様相から15世紀前半代を中心とした遺構群である。以下、遺構別に詳細を述べる。

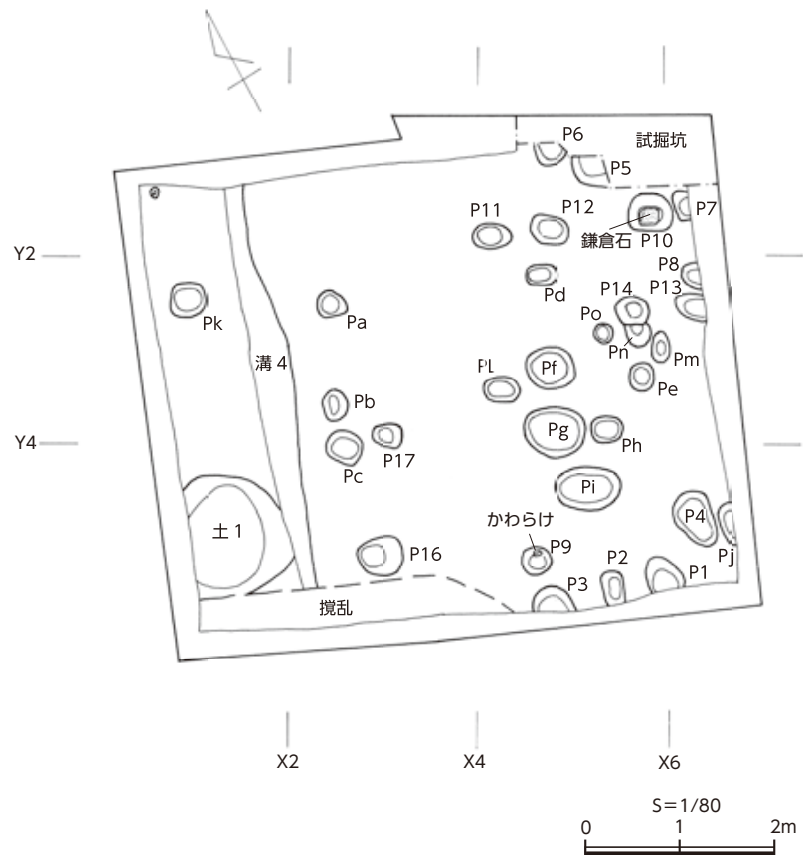


図5 1面遺構配置図

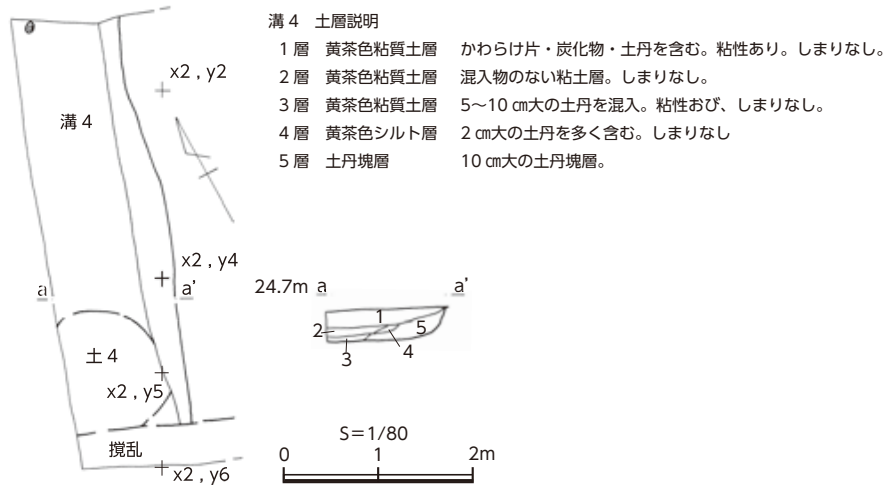


図6 溝4

溝4(図6)

調査区西壁際、X2・Y2～4グリッドにおいて海拔24.47～24.63mで検出された南北方向に走る真直ぐな溝である。検出された掘り方規模は南北444cm、幅は126～135cm、深さは確認面より27.6～33.7cmを測る。溝の断面形はU字型を呈し、底部は中央部が最も低く海拔は24.18mを測る。当址は北から南に緩やかな傾斜を持ち、その比高差は20cmを測る。軸方向はN-19°-Eである。

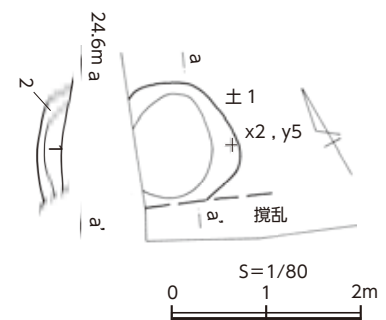
この溝はまず下方を大型土丹塊で一気に埋めて、以後、黄茶色粘土が堆積し徐々に埋まりその機能を失った様相である。

出土遺物はかわらけ、常滑、伊勢系土鍋、硯、瀬戸、磁器等の小片であり図示して掲載できるものはなかった。

土坑1(図7)

調査区南西角、X1・Y4～5グリッド内に海拔24.56mで検出された。上方は溝4に削平され、また南側を現代の攪乱に壊されている。

検出された掘り方規模は104×128cm、深さは確認面より48.1cmを測る。覆土は暗褐色シルトで大型土丹塊を多く含む。



土坑1 土層説明

- | | | |
|----|---------|---------------|
| 1層 | 暗茶色シルト層 | 大型土丹塊を混入。しまる。 |
| 2層 | 暗茶色シルト層 | 混入物なし。しまる。 |

図7 土坑1

土坑1出土遺物(図8 - 1)

1は瀬戸窯の灰釉卸皿の底部の小片である。胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を若干含む軟質土である。

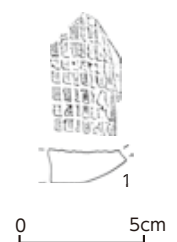


図8 土坑1出土遺物

柱穴群

柱穴は31口検出された。溝4東側にランダムに広がりを見せていた。算用数字を付した柱穴群P1～14・16・17は遺物が出土しており、アルファベットを付したPa～Poからは遺物の出土がなかった。遺物の出土の有無を区別するためにこの名称を採用した。以下、柱穴掘り方を表にまとめる。

柱穴名	規模	深さ	底部の 海拔	平面形	備考	柱穴名	規模	深さ	底部の 海拔	平面形	備考
P 1	37×39以上	20.9	24.4		南壁は調査区外	Pa	30×27	21.5	24.4	楕円形	
P 2	38×20以上	13.2	24.5		南壁は調査区外	Pb	33×24	17.6	24.4	楕円形	
P 3	45×34以上	10.2	24.5		南壁は調査区外	Pc	35×38	16.9	24.4	隅丸方形	
P 4	63×37	26.2	24.4	楕円形		Pd	22×33	32.8	24.4	楕円形	
P 5	33以上×34以上	30.6	24.4		試掘坑に切られる	Pe	30×28	12	24.6	楕円形	
P 6	33以上×25以上	31.3	24.4		試掘坑に切られる	Pf	47×52	13.7	24.6	円形	
P 7	30×20以上	35.4	24.3		東壁調査区外	Pg	65×51	3.7	24.6	円形	
P 8	32×19以上	26.6	24.4		東壁調査区外	Ph	35×28	3.6	24.6	楕円形	
P 9	30×33	20.7	24.5	円形	埋納かわらけあり	Pi	70×47	10.5	24.6	楕円形	
P 1 0	47×40	39.5	24.3	隅丸方形	鎌倉石礎石あり	Pj	70×18以上	8.5	24.6		東壁は調査区外
P 1 1	53×30	13.7	24.6	楕円形		Pk	38×35	30.1	24.3	隅丸方形	
P 1 2	41×31	20.4	24.5	楕円形		Pl	70×50	10.5	24.6	楕円形	
P 1 3	30×32以上	34.8	24.3		東壁は調査区外	Pm	40×23	6.8	24.6	楕円形	
P 1 4	33×35	31.8	24.4	楕円形		Pn	27×25以上	16.3	24.5		P14に切られる
P 1 6	47×40	51.3	24.1	楕円形		Po	21×21	7.7	24.6	円形	
P 1 7	25×31	7.7	24.6	楕円形							

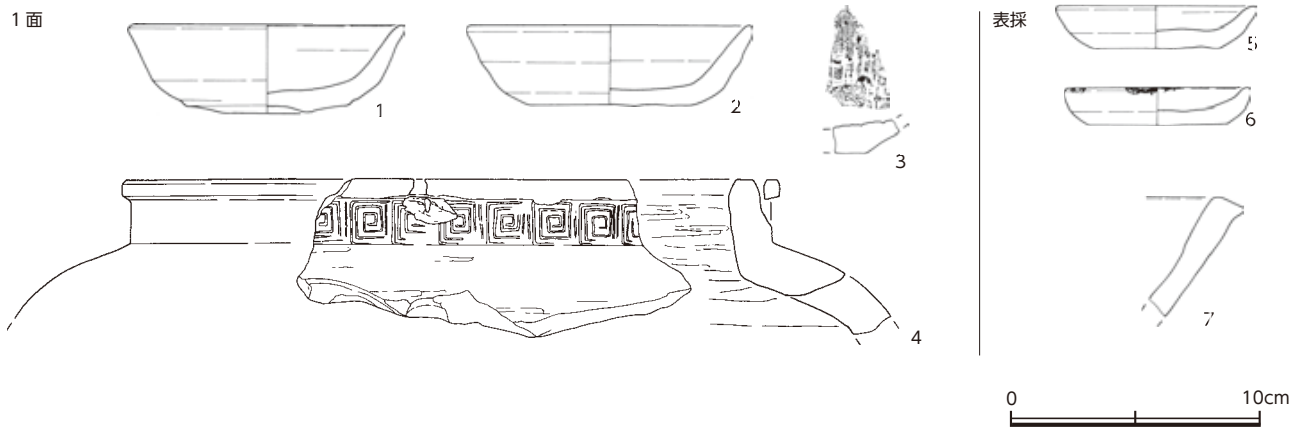


図9 1面・表採出土遺物

1面の基本軸線になるのは溝4の南北の軸線が想定出来る。その軸線を目安に柱穴の並びを考えると、Pa—P b—P c、P f—P g—P i、P 1—P 2—P 3が同一軸であるが、共に3口の並びで有り、建築物を構築させるのにはやや不安が残る。また、調査区南壁際に検出されたP 1—P 2—P 3の並びは調査区外に広がる様相を示し、また西側は大きく攪乱されているため以後の展開を判断する手掛かりはないが、更に西、及び南に広がる可能性はある。しかし、P1の底部の海拔が他の2口より15cm高く、また3口ということで今回は建物とはしない。また、溝4とは軸線が異なっているが①P11—P d—P o—P e、②P 6—P 7はそれぞれが同規模であり対応する柱穴群と想定され、2つの構築物になる可能性は考えられるが、その拡がりをつまみきれないのでこれも保留とする。しかしこの状態を見るに、溝から離れるに従い、溝の軸線に捉われない土地の利用をしたのではないかと考えられる。

1面出土遺物(図9 - 1～4)

1、2はロクロ成形のかわらけの中皿である。胎土は明橙色を呈し、赤褐色粒子、泥岩粒を多く含み粉質が強い。体部を開いて引き上げ、口唇端部を外反させる。15世紀前葉に比定される。3は瀬戸窯の灰釉卸皿の底部の小片である。胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含む精良土である。4は瓦質の風炉である。胎土は淡桃色を呈し、砂粒が多い。全体に横方向の磨き調整が行われ、器壁は滑らかである。肩部に窓が開き、頸部に雷文様が巡る。施文後に、口唇部から頸部に穴を穿つ。器表の外面全体に薄く煤が付着している。これらの遺物の出土傾向から15世紀前葉の年代が想定される。

表採遺物(図9 - 5～7)

ここに掲載した3点は出土層位の不明な遺物である。5、6はかわらけの小皿の小片である。胎土は白褐色を呈し泥岩粒を多く含み共に粉質が強い。体部は丸味を持って立ち上げる。6は灯明皿である。7は常滑窯の片口鉢Ⅱ類の注口部位の小片である。胎土は灰褐色を呈し白色粒子を多く含む粗胎である。

第2節 中世第2面(図10)

1面の土丹地形層及び、その下の包含層を合わせて40cm掘り下げ海拔24.06～24.32mで中世2面の遺構面が検出された。10cm大の大型土丹で地形を行なった非常に強固な版築層である。この面は東～西に傾斜しておりその比高差は最大で26.7cmを測る。検出されたのは溝1条、井戸2基、土坑2基、柱穴10口である。溝1はクランク状に途中で屈折している。当址はI区とII区の調査区にまたがり、また屈曲部分は未掘部分に当たり溝の全体像は不明である。

井戸は南北に並んで2基検出された。共に調査区の壁際に掘り方の半分が検出された。その検出状況から井戸1の平面形は方形、井戸2は東西に長軸を持つ楕円形を呈すると推察される。

土坑群は井戸群の西側に接近して調査区南西地域に2基検出された。当地域は生活の場としていた様相が濃厚であるが、中心域ではなく縁辺的要素が強い。

柱穴群は溝の両側に散在した様相で検出された。建物が存在していた痕跡ではあるがそれ以外は不明といわねばならない。P sは柱穴の底部に礎板を有し、またP tは鎌倉石切石の礎石を持つ。

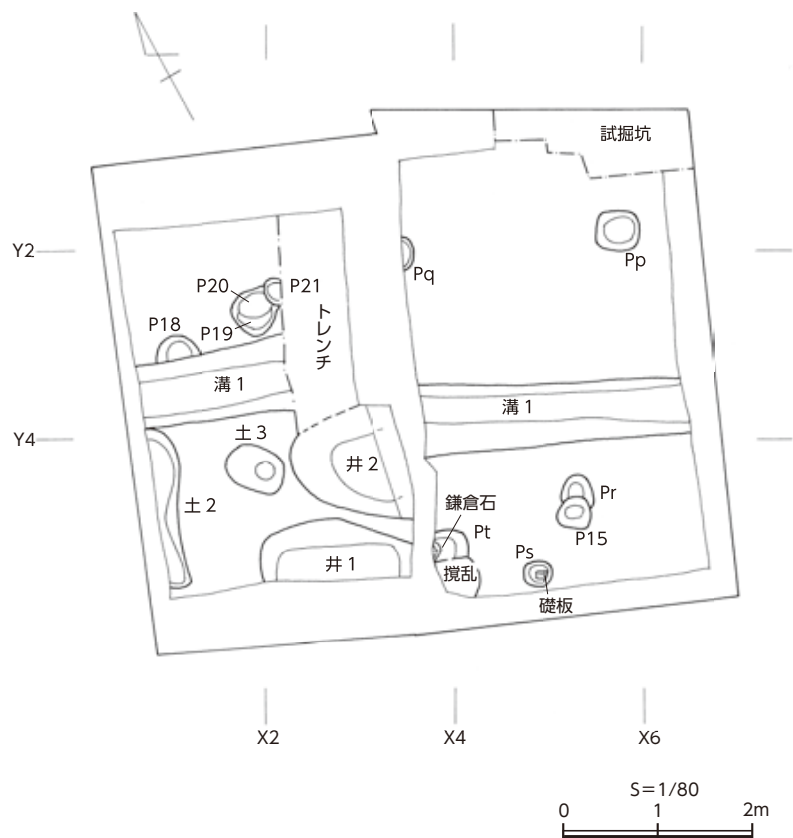


図10 2面遺構配置図

溝1(図11)

調査区中央部、海拔24.08～24.29mにおいて、X1～6・Y2グリッド内に調査区を東西に貫通して検出された溝である。当址は途中でクランク状に屈折している。検出された掘り方規模は東西568cm、幅

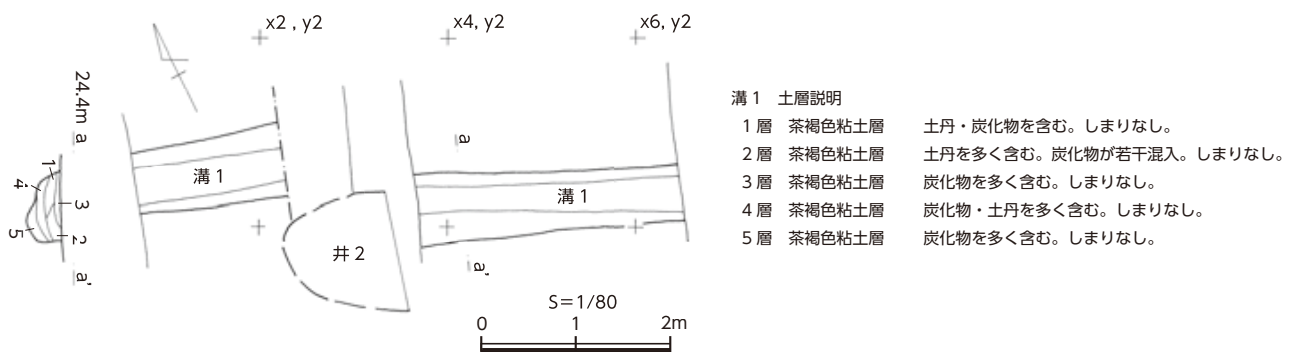


図11 溝1

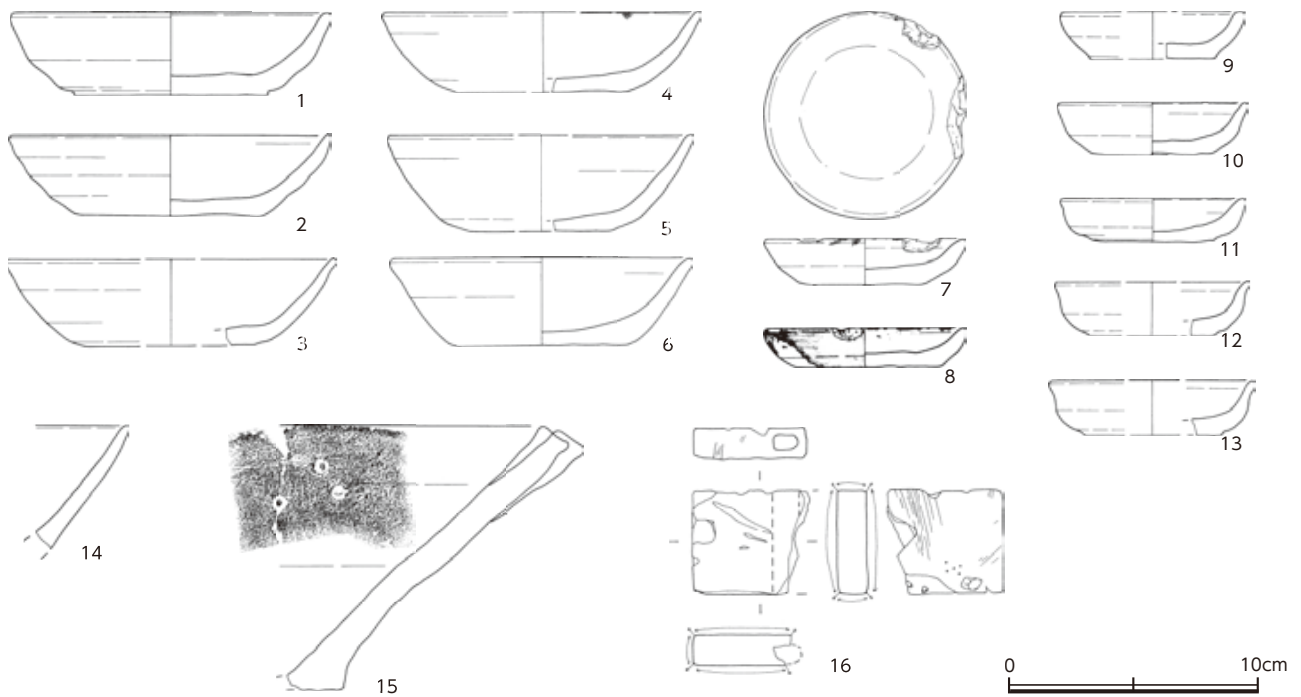


図12 溝1出土遺物

は66～110cm、深さは確認面より37.8～53.4cmを測る。溝は東から西に傾斜しておりその比高差は36.4cmである。溝の断面はU字型で側壁は真直ぐに立ち上がる。土留のための木材等の護岸施設は検出できなかった。

この溝の覆土は茶褐色粘質土で炭化物、土丹を多く含みしまりはない。この溝の東西の軸方向はN-73°-Wである

溝1出土遺物(図12)

1～13はロクロ成形のかわらけで、1～6は大皿、7～13は小皿で凡そ3分類される。口径、底径比の小さく、器肉が厚く安定感のある1、7、8、9、器肉が薄く、胎土が精良な薄手丸深の2～5、器肉が若干厚く口唇端部が外反する6、10～13である。4、7、8は灯明皿である。7、8は共に口縁部を打ち欠いている。14は瀬戸窯の灰釉平碗の口縁から底部あたりまでの破片で、高さ4.9cmが遺存する。胎土は灰黄色を呈し、微砂を交えざっくりしている。釉調は黄緑色、器表には気泡が多い。15は常滑窯の片口鉢Ⅱ類である。7型式である。胎土は橙褐色を呈し、長石粒子を多く含み硬質の粗い胎土である。内面に竹管状押印を有し、また、内面が爆ぜており火鉢に転用した痕跡がある。16は滑石製品のスタンプである。棒の差し込み口と思われる部分が欠損しており、加工途中で破損し破棄した可能性がある。出土遺物の様相から14世紀中葉～後葉に比定される。

井戸1(図13)

X2～3・Y5グリッド内にて海拔24.11mで検出された。当址の大半は調査区東壁内にある。検出された掘り方規模は東西160cm、南北68cm、平面形は方形になると想定される。深さは確認面より120cmを測る。板材、杭等の井枠の検出はない。覆土は黄茶色粘質土で土丹、炭化物を多く含む。出土遺物はかわらけを主体とし、他は銭の出土がある。

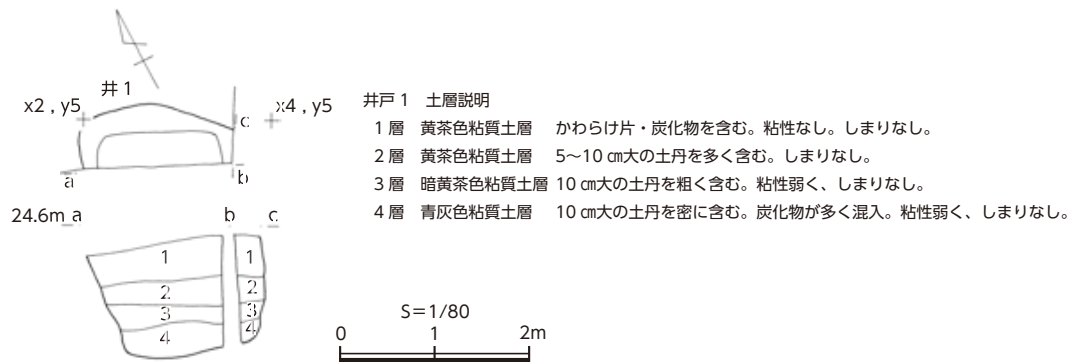


図13 井戸1

井戸1 出土遺物(図14)

1はロクロ成形のかわらけの小皿である。胎土は淡橙色を呈し、直径3mm大の泥岩粒を含み粗い。体部を外反して立ち上げ口唇端部を直口させる。2は北宋銭、天聖元寶である。

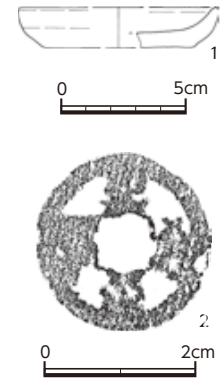


図14井戸1 出土遺物

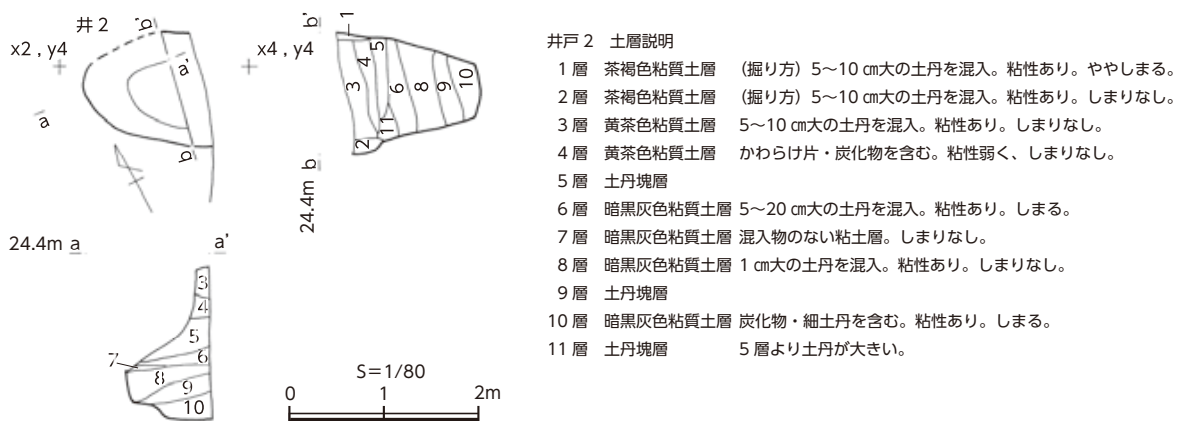


図15 井戸2

井戸2(図15)

X2~3・Y4グリッド内にて海拔24.02mで検出された。当址の大半は調査区東壁内にある。検出された掘り方規模は東西124cm、南北136cm、平面形は楕円形になると想定される。深さは確認面より140cmを測る。木杵等の検出はない。覆土は上層が黄茶色粘質土で土丹、炭化物を多く含む。下層は暗黒灰色粘質土で土丹、炭化物、木片を含む。出土遺物はかわらけ、瀬戸、手焙り、常滑で各々その小片が出土した。

井戸2 出土遺物(図16)

1は瀬戸窯の灰釉鉦皿の口縁部の小片である。胎土は灰色を呈し、若干の白色粒子を含む。釉調は淡黄緑色を呈する。内面に細かい貫入がはいる。

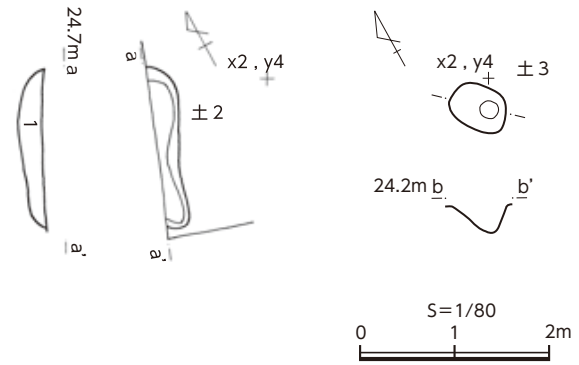


図16 井戸2 出土遺物

土坑2・3(図17)

土坑2は X1・Y4～5グリッド内にて海拔24.06mで検出された。当址の大半は調査区西壁外にある。検出された掘り方規模は東西28cm、南北177cm、平面形は方形になると想定される。深さは確認面より18.7cmを測る。覆土は黄茶色粘質土で土丹を含みしまりはない。

土坑3は X1～2・Y4グリッド内にて海拔24.11mで検出された。検出された掘り方規模は東西64cm、南北48cm、平面形は隅丸方形である。深さは確認面より32.3cmを測る。覆土は黄茶色粘質土で土丹粒を含みしまりはない。



土坑2 土層説明
1層 暗黄茶色粘質土層 1cm大の土丹を含む。しまりなし。

図17 土坑2・3

土坑3出土遺物(図18)

1はロクロ成形のかわらけの小皿である。胎土は橙色を呈し、黒砂を多く含み器表はざらつく。焼成は良好である。体部は丸味をもって立ち上がる。

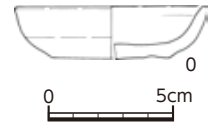


図18 土坑3出土遺物

柱穴群(図10)

柱穴群は溝1を挟んだ両側より検出された。構築物の一部分、及び建て替えの痕跡を検出したに留まり建物を復元することは出来なかった。建物の主体部分は調査区外に広がっていると想定される。以下、柱穴の寸法を下記にまとめた。

検出された柱穴の寸法はまちまちであるが底部の深さは海拔24m前後にまとまり、同一レベルの深さを持つ。柱穴の重複関係もあり、同規模の構築物の建て替えの様相を僅かながらも検出したと思われる。

柱穴名	規模 c m	深 さ c m	底 部 の 海 抜 m	平面形	備考	柱穴名	規模 c m	深 さ c m	底 部 の 海 抜 m	平面形	備考
P 18	50 × 27 以上	12.2	23.99		溝1に切られる	Pp	49 × 42	16.2	24.15	隅丸方形	
P 19	43 × 23 以上	8.8	24.08		P 20に切られる	Pq	33 × 10	15.9	24.14		西壁は調査区外
P 20	30 × 40 以上	16.9	24.02		P 21に切られる	Pr	35 × 24	23.2	23.99		P15に切られる。
P 21	27 × 15 以上	29.1	23.93		トレンチに切られる	Ps	30 × 28	27.7	24.00	隅丸方形	12 × 10 × 3.4cmの礎板有り
						Pt	20 × 40	20.1	24.01		鎌倉石の礎石あり 攪乱に切られる

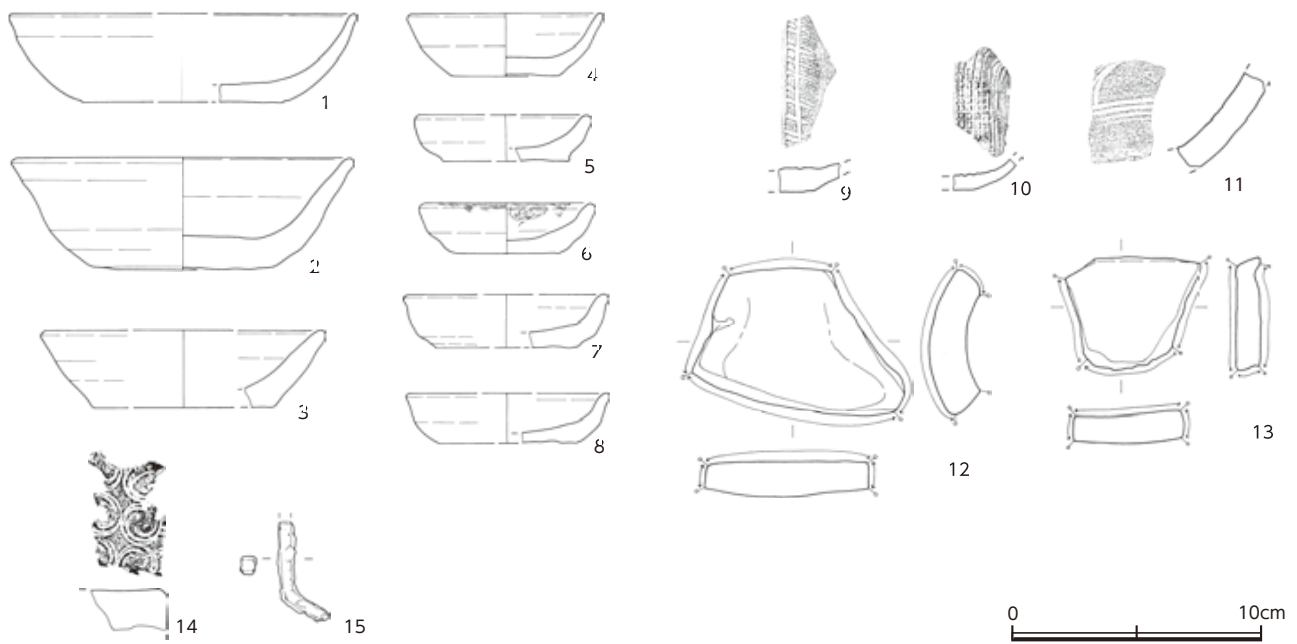


図19 2面出土遺物

2面出土遺物(図19)

1～8はロクロ成形のかわらけである。1、2は大皿、3は中皿、4～8は小皿である。1、4の胎土は橙色を呈する精良土で薄手丸深の器種である。他は概ね胎土が淡橙色を呈し、粉質が強く器肉が厚く、体部が外反して直線的に開く。また、2、7、8は口唇部が外反する。9～11は瀬戸窯の灰釉製品である。9、10は卸皿底部の小片である。9の胎土は淡黄色を呈し、赤褐色粒子を若干含み軟質である。10の胎土は灰色を呈する硬質な胎土である。釉調は淡黄緑色を呈し光沢がある。卸目が非常に細かい。11は折縁深皿の体部片で、胎土は淡黄色を呈し軟質である。釉調は淡い灰緑色を呈する。櫛描により施文する。古瀬戸中期様式である。12、13は研磨痕のある陶片である。共に常滑窯の製品で12は甕片、13は片口鉢片である。14は瓦質鏝付手焙りの鏝部である。胎土は淡桃色を呈し黒砂を多く含む。鏝上面に三つ巴スタンプ文、下面にかえりが付く。15は鉄製品、釘である。2面の出土遺物の様相から14世紀中葉～15世紀初頭の年代に想定される。

第3節 中世第3面(図20)

中世2面からおおよそ80cm下、海拔23.4～23.7mで中世第3面は検出された。遺構面は1～3cm大の土丹により良好な版築がなされていた。遺構面は西から東に傾斜しておりその比高差は30cmを測る。

検出されたのは東西方向の溝2条と南北方向の溝1条の計3条と方形土坑1基、柱穴2口である。

東西溝2条は同位置に改築したもので、新溝は若干、幅を広げて構築されている。新旧共に木組み護岸施設を持った溝である。溝群の木組み護岸施設は南岸は良好な遺存状態であったが、北岸は板材が抜き取られ、僅かに横板と杭が数本遺存しているのみであった。溝群は大規模な護岸施設に比して流路は非常に幅が狭い。土地の区画のための溝というよりは谷戸のしぼり水を流す水路の役割を果たしていたのではないかと推察される。

南北方向の溝5にも木組み護岸が伴っていたがトレンチによる確認調査になったため検出範囲が少なく様相は明確ではない。

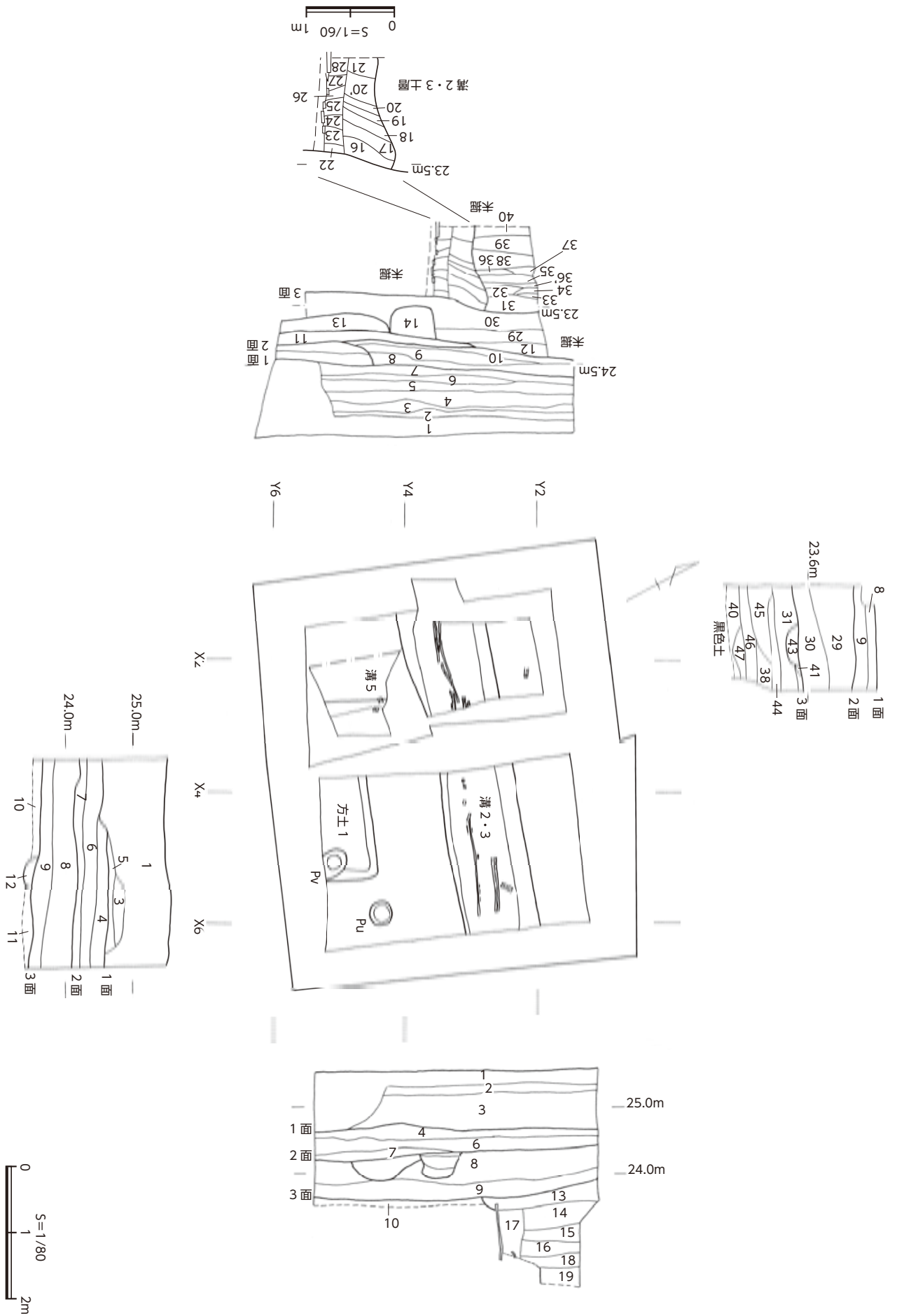


図 20 3面遺構配置図

東壁・南壁土層説明

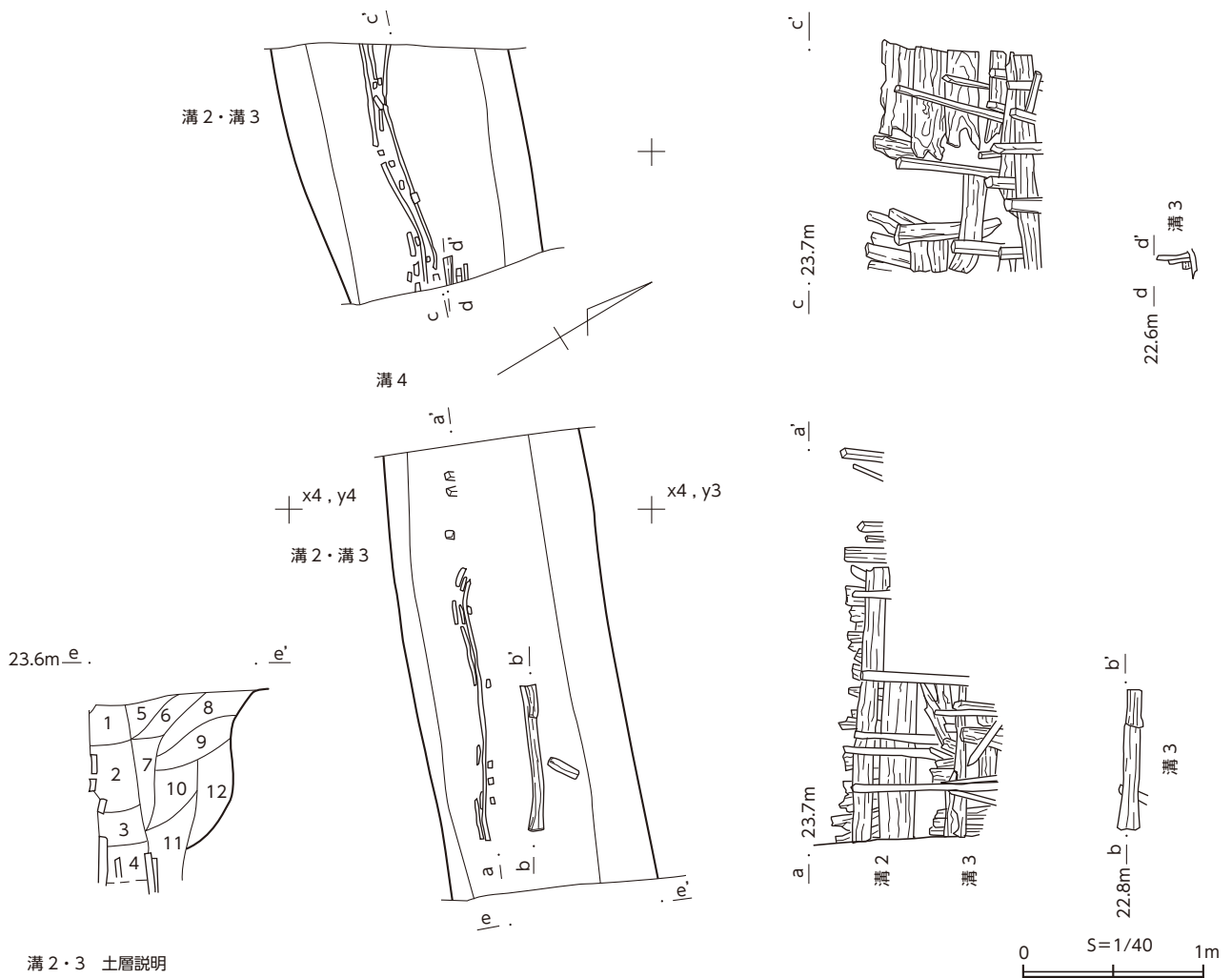
1層	表土・攪乱層	現代の盛り土。
2層	青灰色粘質土層	耕作土。
3層	茶褐色粘質土層	土丹粒子・かわらけ片・現代遺物を含む。
4層	土丹地形層	(1面溝成土) 5cm大の細かい土丹の版築層。
5層	茶褐色粘質土層	遺物包含層。
6層	茶褐色粘質土層	5~10cm大の土丹粒子・炭化物を含む。ややしまる。
7層	茶褐色粘質土層	6層より土丹粒子が細かく、炭化物の混入が若干少ない。
8層	土丹地形層	(2面溝成土) 10cm大の土丹版築層。
9層	土丹地形層	(2面溝成土) 10cm大の土丹版築層に青灰色粘土が混入する。
10層	土丹地形層	(3面溝成土) 1~3cm大の土丹による版築層。
11層	黄褐色粘質土層	(3面方形土坑1覆土) 土丹粒子・炭化物を多く含む。粘性あり、しまりなし。

12層	黄褐色粘質土層	(3面柱穴覆土) 土丹粒子・かわらけ片を多く含む。粘性なく、しまりなし。
13層	黒灰色粘質土層	(3面溝2覆土) 10cm大の土丹、及び黒灰色粘土を混ぜた層。ややしまりをもつ。
14層	黒灰色粘質土層	(3面溝2覆土) 13層より土丹の混入が多い。しまりをもつ。
15層	黒灰色粘質土層	(3面溝2覆土) 3~10cm大の土丹を混入。しまりをもつ。
16層	黒灰色粘質土層	(3面溝2覆土) 土丹塊・木片を多く含む。しまりなし。
17層	黒灰色粘質土層	(3面溝2覆土) 土丹を若干混入するしまりのない粘質土層。
18層	黒灰色粘質土層	(3面溝3覆土) 腐食土を多く含む、若干土丹粒子を混入する。しまりなし。
19層	黒灰色粘質土層	(3面溝3覆土) 細かい土丹粒子を混入する。しまりなし。
20層	茶褐色粘質土層	(2面溝1覆土) 炭化物・土丹粒子を含む。しまりなし。
21層	茶褐色粘質土層	(2面溝1覆土) 炭化物・土丹粒子を多く含む。しまりなし。
22層	茶褐色粘質土層	(2面溝1覆土) 混入物はないが、しまりのない層。
23層	茶褐色粘質土層	(2面土坑覆土) 粉碎土丹で埋めた層。

西壁・北壁土層説明

1層	表土・攪乱層	現代の盛り土。
2層	灰色粘土層	耕作土。
3層	茶色粘質土層	土丹粒子・かわらけ片・炭化物を含む。褐鉄分が強くしまる。
4層	茶色粘質土層	3層と同様であるが、褐鉄分を含まない。
5層	暗茶色粘質土層	炭化物・かわらけ破片を多く含む。ややしまる。
6層	暗茶色粘質土層	5層よりさらに混入物が多い。
7層	暗茶色粘質土層	2~5cm大の土丹・炭化物・かわらけ片を混入。しまりなし。
8層	黄茶色粘質土層	(1面溝4覆土) 炭化物・土丹を含む。しまる。
9層	黄茶色粘質土層	(1面溝4覆土) 10cm大の土丹版築層に青灰色粘土が混入する。
10層	黄茶色粘質土層	(1面溝4覆土) 2~3cm大の土丹・炭化物・かわらけ片を混入。粘性に欠け、しまりなし。
11層	黄茶色シルト層	(2面溝成土) 炭化物・かわらけ片を含む。しまる。
12層	黄茶色粘土層	(2面溝成土) 1~2cm大の土丹粒子・炭化物を含む。粘性あり。しまる。
13層	暗黄茶色粘土層	(2面土坑覆土) 1cm大の土丹粒子を含む。粘性あり。しまりに欠ける。
14層	暗黄茶色粘土層	(1面溝1覆土) 2~15cm大の土丹・炭化物・かわらけ片を含む。しまりなし。
15層	土丹塊層	(3面溝2・3掘り方覆土) 粉碎土丹~20cm大を混入。
16層	土丹塊層	(3面溝2・3掘り方覆土) 20cm大の土丹塊を混入。
17層	土丹塊層	(3面溝2・3掘り方覆土) 10cm大の土丹・炭化物・かわらけ片を混入する。しまりなし。
18層	土丹塊層	(3面溝2・3掘り方覆土) 30cm大の土丹・木片を混入する。しまりなし。
19層	土丹塊層	(3面溝2・3掘り方覆土) 5cm大の土丹を混入する。しまりなし。
20層	土丹塊層	(3面溝2・3掘り方覆土) 玉砂利・土丹・木片を混入する。しまりなし。 20'層は20層から玉砂利を除いた層。

21層	土丹塊層	(3面溝2・3掘り方覆土) 大型土丹層。
22層	暗灰茶色粘質土層	(3面溝2覆土) 0.5~5cm大の土丹・炭化物を含む。しまりなし。
23層	暗灰茶色粘質土層	(3面溝2覆土) 細土丹を多く含む、玉砂利が若干混入する。しまりなし。
24層	暗灰茶色粘質土層	(3面溝2覆土) 細土丹・木片・玉砂利を含む。青灰色粘土を混ぜる。しまりなし。
25層	暗灰茶色粘質土層	(3面溝2覆土) 細土丹・木片を多く含む。しまりなし。
26層	暗灰黒色粘質土層	(3面溝2覆土) 木片を若干混入するしまりのない粘質土層。
27層	暗灰黒色粘質土層	(3面溝3覆土) 2~3cm大の土丹を多く含む。しまりなし。
28層	暗灰黒色粘質土層	(3面溝3覆土) 2~5cm大の土丹・玉砂利を含む。しまりなし。
29層	黄茶色粘質土層	0.5~10cm大の土丹・炭化物・かわらけ片を含む。しまりなし。粘性なし。
30層	黄茶色粘質土層	29層より土丹が大きい。
31層	土丹塊層	
32層	暗黒灰色粘質土層	1cm大の土丹・炭化物を若干含む。粘性をもち、しまりなし。
33層	黒灰色粘質土層	混入物なく、粘性なく、しまりなし。
34層	暗黒灰色粘質土層	土丹粒子を若干含む。粘性強く、しまりなし。
35層	暗黒灰色粘質土層	土丹粒子を若干含む。粘性弱く、しまりなし。
36層	土丹塊層	
37層	黒色粘質土層	5~10cm大の土丹を含む。しまりなし。
38層	土丹塊層	20cm大の土丹塊を混入。
39層	暗茶色粘質土層	3~10cm大の土丹を含む。粘性あり。しまりなし。
40層	粉碎土丹塊層	
41層	黒灰色粘土層	(3面柱穴覆土)
42層	腐食土層	(3面柱穴覆土)
43層	暗黒灰色粘質土層	(3面柱穴覆土) 5~20cm大の土丹・炭化物を含む。しまりなし。
44層	腐食土層	
45層	土丹塊層	若干の腐食土を含む。
46層	腐食土層	
47層	土丹塊層	
48層	暗黄茶色シルト層	(1面土坑1覆土) 大型土丹塊を含む。ややしまる。
49層	暗黄茶色シルト層	(1面土坑1覆土) 混入物なく、しまりなし。



溝2・3 土層説明

- | | | | |
|--------------------|-------------------------------|--------------------------|----------------------------|
| 1層 暗灰色粘質土層 (溝2覆土) | 10 cm大の土丹・炭化物を含む。粘性あり。しまりをもつ。 | 5層 暗灰黒色粘質土層 (溝2・3掘り方覆土) | 5~10 cm大の土丹を含む。粘性あり。しまりあり。 |
| 2層 暗灰黒色粘質土層 (溝2覆土) | 木片・土丹粒子を含む。しまりなし。 | 6層 暗灰黒色粘質土層 (溝2・3掘り方覆土) | 混入物のない粘土層。しまりなし。 |
| 3層 暗灰黒色粘質土層 (溝2覆土) | 木片を多く含む。しまりなし。 | 7層 暗灰黒色粘質土層 (溝2・3掘り方覆土) | 木片・土丹粒子を含む。しまりなし。 |
| 4層 暗灰黒色粘質土層 (溝3覆土) | 10 cm大の土丹を含む。しまりをもつ。 | 8層 土丹塊層 (溝2・3掘り方覆土) | 2 cm大の土丹層。 |
| | | 9層 暗灰黒色粘質土層 (溝2・3掘り方覆土) | 木片を含む。粘性あり。 |
| | | 10層 暗灰黒色粘質土層 (溝2・3掘り方覆土) | 木片・土丹を含む。しまりなし。 |
| | | 11層 土丹塊層 (溝2・3掘り方覆土) | 20 cm大の土丹塊層。 |
| | | 12層 土丹塊層 (溝2・3掘り方覆土) | 20 cm大の土丹塊層。 |

図21 溝2・3

方形土坑1は調査区南壁際に検出された。遺存部分は全体のおおよそ1/4で、その主体部分は調査区外南にある。

柱穴2口は調査区南東隅に検出された。P vは方形土坑1を切っており、建物空間へと土地の活用方法が変化し後世へと続く。

新旧の溝、土地利用の変化の画期等、3面は確実に2時期はあったことが理解された。

溝2、溝3(図21)

これらの溝群はX1~6・Y2~3グリッドにおいて海拔23.4~23.7mで検出された。ほぼ同位置の作り替えで、溝3が旧く溝2は新しい。溝群は東から西に緩く傾斜しており比高差は34.9cmを測る。検出された掘り方規模は長さ11.5m、溝幅60cm、溝の掘り方は116~136cmを測る。東西の軸方向はN-111°-Eである。以下、古い段階の溝3から説明をする。

溝3は海拔23.7mで検出された。検出された掘り方規模は東西の長さ435cm、溝幅は最大で25cmを測る。使用された材木を下記の表にまとめてみた。(表参照) 横板は規格のわかるもので長さ90cm、幅5cm、長さ40cm幅7cm、他は長さ2～120cm、長さ2～120cm以上を示す。杭は6×3を3本、5×3を3本、5×4を2本等、縦板は幅4～13cm、長さ15～31cmの値を示しランダムに使用していることが理解される。護岸材は規格品ではなく、廃材を利用して適材適所に使用したのであらうと想像される。また、今回検出した溝の最上端部分である溝底から30cm当たりの板材、及び杭の先端が一様に焦げており火災に遭ったと思われる。溝2は溝3の改修後の溝と想定されるため、当時の溝3の上端は溝2の上端と同レベルにあると想定される。現在残っている焦げた部分より上の護岸材は火災を受け焼け落ちたか、使用不能で抜き取ってしまったかで遺存しない。

溝2は溝3を破棄した後、溝3の下部部分を再利用して構築したようである。長さ77cmの杭を打ち込み溝2の新横板と旧溝(溝3)の横板を合わせて止めて護岸木組みとしている場所もある。横板は幅20cmを最大とし、17cm、16cm、12cm、13cm、9cm、長さは20～151cmを使用し整然とした様相を示し、ある程度の規格品を使用したように見受けられる。縦板は幅5～10cm、長さ11～40以上のものを使用して、土留めとしている。杭は表に示した寸法の物を打ち込み随時使用して縦板を止めている。これらに使用された杭は再利用品、転用品等を使用しているようである。また、大型土丹塊を投げ入れて裏込めとしている。

溝3木組み護岸板材寸方表 (単位 cm)

南側	名称	長さ	幅	備考	南側	名称	長さ	太さ	備考
	横板	120以上	13			杭	25以上	7×3.5	
	横板	90以上	15			杭	23以上	5×4	
	横板	45以上	9	上端焦げる		杭	30以上	5×3	
	横板	90	5			杭	18以上	5×3	
	横板	40	7			杭	20以上	6×3	
	横板	22以上	9			杭	9以上	6×3	上端焦げる
	横板	11以上	5			杭	10以上	5×4	上端焦げる
	横板	7以上	7			杭	15以上	5×3	
	横板	2以上	6			杭	15以上	6×3	上端焦げる
	縦板	15以上				杭	20以上	3×2	
	縦板	30以上	6	上端焦げる 2枚重ね		杭	30以上	4×3	
	縦板	30以上	5	上端焦げる 2枚重ね					
	縦板	30以上	6	上端焦げる 2枚重ね					
	縦板	30以上	4	上端焦げる 2枚重ね					
	縦板	30以上	9						
	縦板	30以上	13						
	縦板	30以上	7	上端焦げる					
	縦板	31以上	4						
	縦板	20以上	10						

北側		長さ	幅	備考
	横板	58	7	
	横板	20以上	6	
	横板	4以上	9	
	杭	20以上	5×3	
	杭	17以上	3×3	
	杭	25以上	3×2	

溝2木組み護岸板材寸方表 (単位 cm)

南側	名称	長さ	幅	備考	名称	長さ	幅	備考
	横板	52以上	17		杭	60以上	6×3	
	横板	69以上	20		杭	58以上	5×6	
	横板	53以上	16		杭	57以上	10×4	
	横板	20以上	20		杭	25以上	8×2	
	横板	52	12		杭	60以上	5×3	
	横板	151以上	13		杭	19以上	4×2	
	横板	86以上	20		杭	10以上	2×4	
	横板	85以上	9		杭	20以上	3×3	
	縦板	20以上	11		杭	18以上	5×2	
	縦板	25以上	6		杭	25以上	3×6	
	縦板	22以上	5		杭	30以上	4×3	
	縦板	24以上	6		杭	77以上	5×2	
	縦板	20以上	10		杭	30以上	2×2	計2本有り
	縦板	11以上	10					
	縦板	12以上	6					
	縦板	30以上	13					
	縦板	5以上	8	計3枚有り				
	縦板	40以上	5	計6枚有り				
	縦板	40以上	10	計5枚有り				

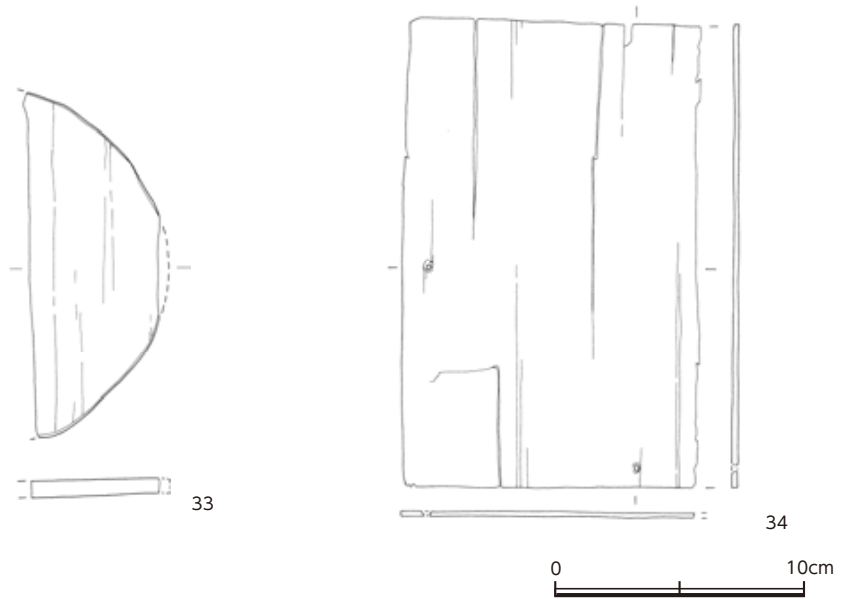
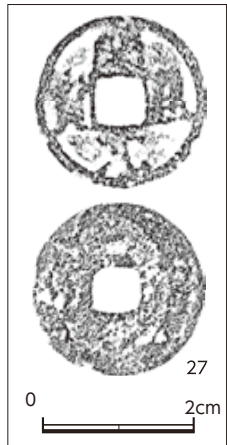
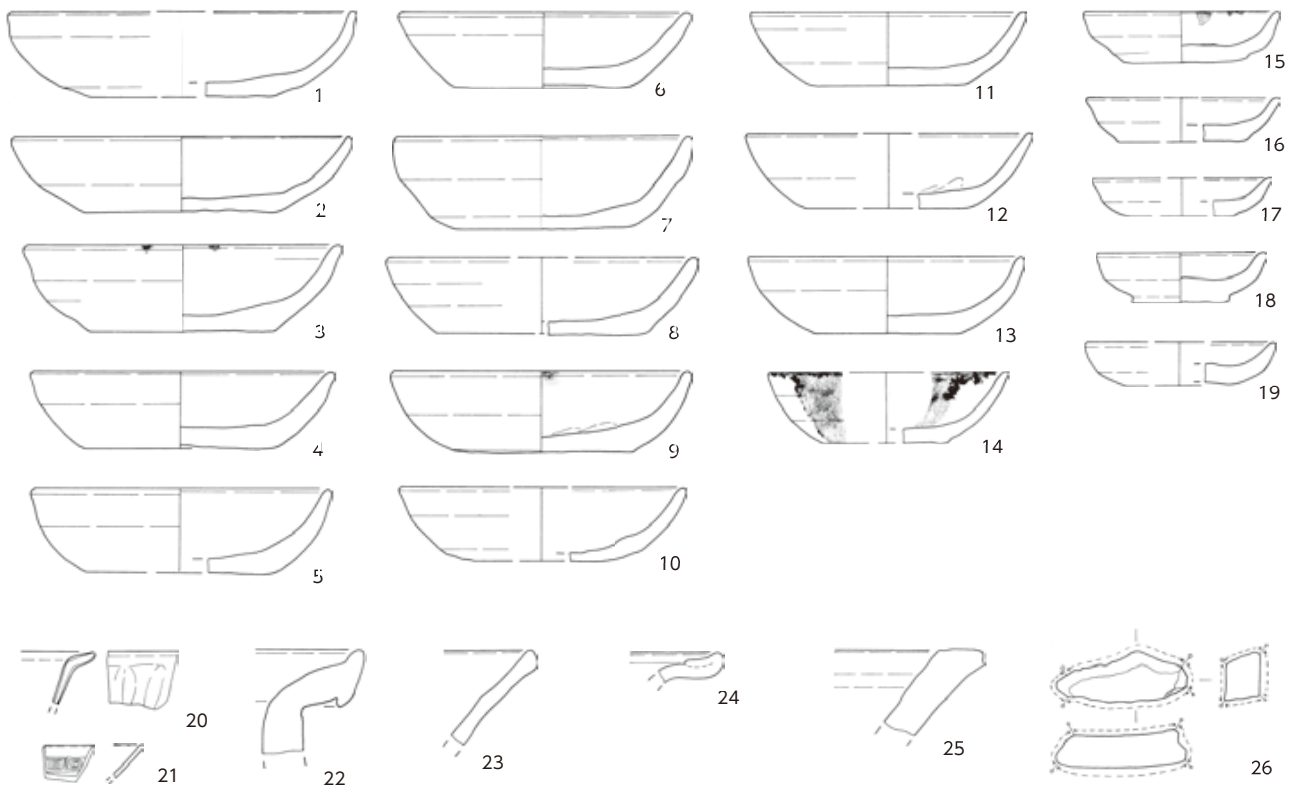


图 22 溝 2 出土遺物 (1)

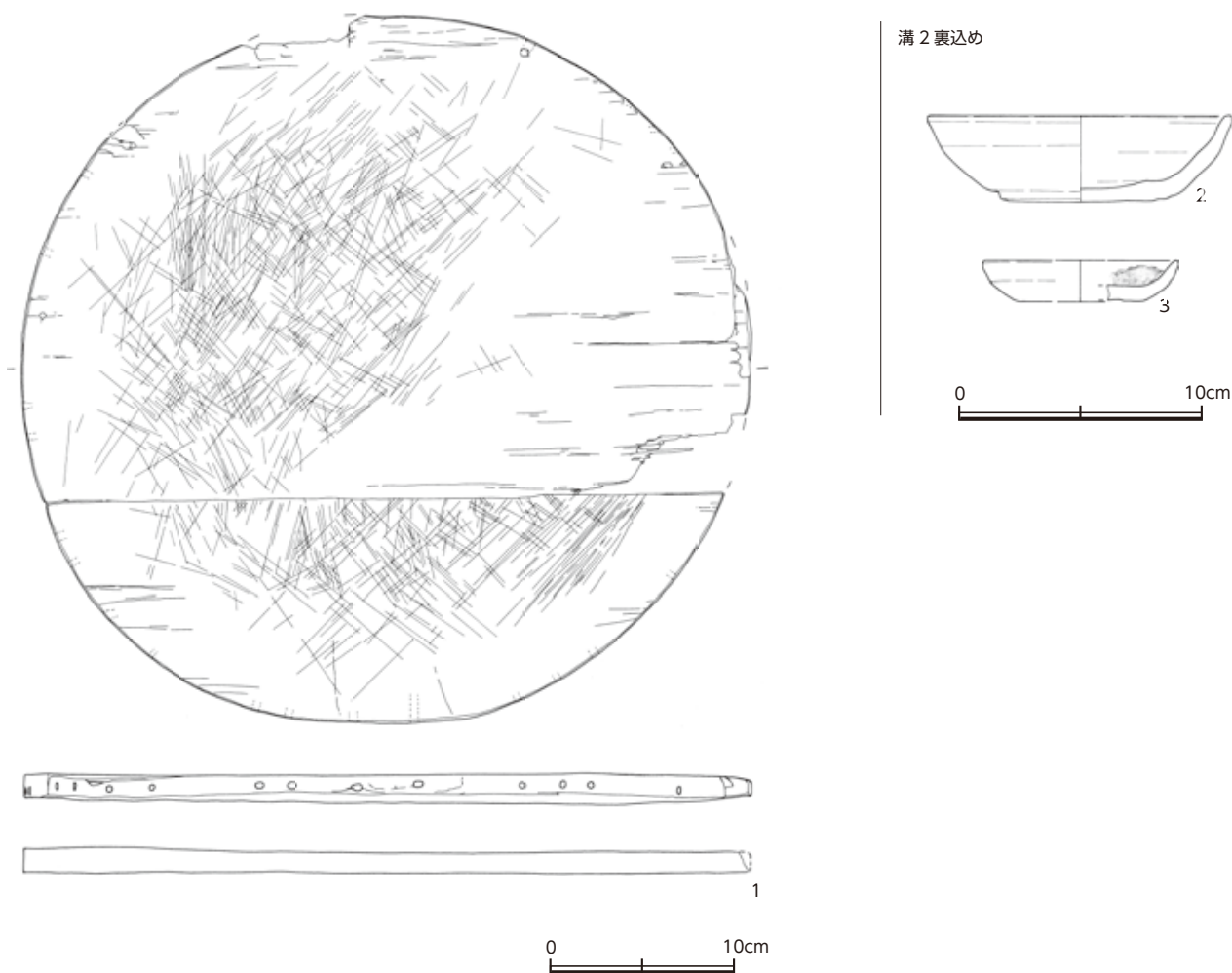


図23 溝2・溝2裏込め出土遺物(2)

溝2出土遺物(図22、23)

図22、図23-1は溝中から、図23-2、3は溝裏込めから出土した遺物群である。図22、1～19はロクロ成形のかわらけである。1～9は大皿、10～14は中皿、15～19は小皿である。1、2の大皿及び10～14の中皿は薄手丸深といわれる器肉が薄く椀状を呈するもので、胎土が非常に精良で、焼成の良好なものである。その他のかわらけは器肉にある程度の厚みを持ち、粉質が強く丁寧に作られている。3、9、14、15は灯明皿である。20、21は磁器である。20は龍泉窯の青磁蓮弁文折縁鉢の口縁部の小片である。胎土は灰色を呈し、黒色粒子を多く含む。釉調は不透明な灰緑色を呈する。器表には無数の貫入が入る。また被災し肌荒れが顕著である。21は白磁印花文小皿である。胎土は白色を呈し、黒色粒子を含み精良である。釉調は透明な白色を呈し、光沢は良好である。内面口縁部に雷文を押す。22、23は常滑窯の製品で22は甕、23は片口鉢の口縁部の小片で共に6a型式である。胎土は黒褐色を呈し、長石粒子を多く含む粗い。24は伊勢系土鍋の口縁部に小片である。黒砂、金雲母を含んだ胎土で、黒褐色の胎芯をのこす。25は土器質浅鉢型の手焙りである。胎土は淡橙色を呈し、白色粒子を多く含む。内面には煤が厚く付着している。26は研磨痕のある滑石鍋の体部の破片である。27は唐銭、開元通寶である。背は上月である。28～34、図23、1は木製品である。28～32は黒漆製品である。28は椀の底部の破片である。28は輪高台である。内面に赤漆で三つ巴文をスタンプで施文している。29、30は平高台の皿である。朱漆で手描きにより施文しており、29は内面に松、笹、波文、外側に波文、30は梅文である。31、32は輪高台

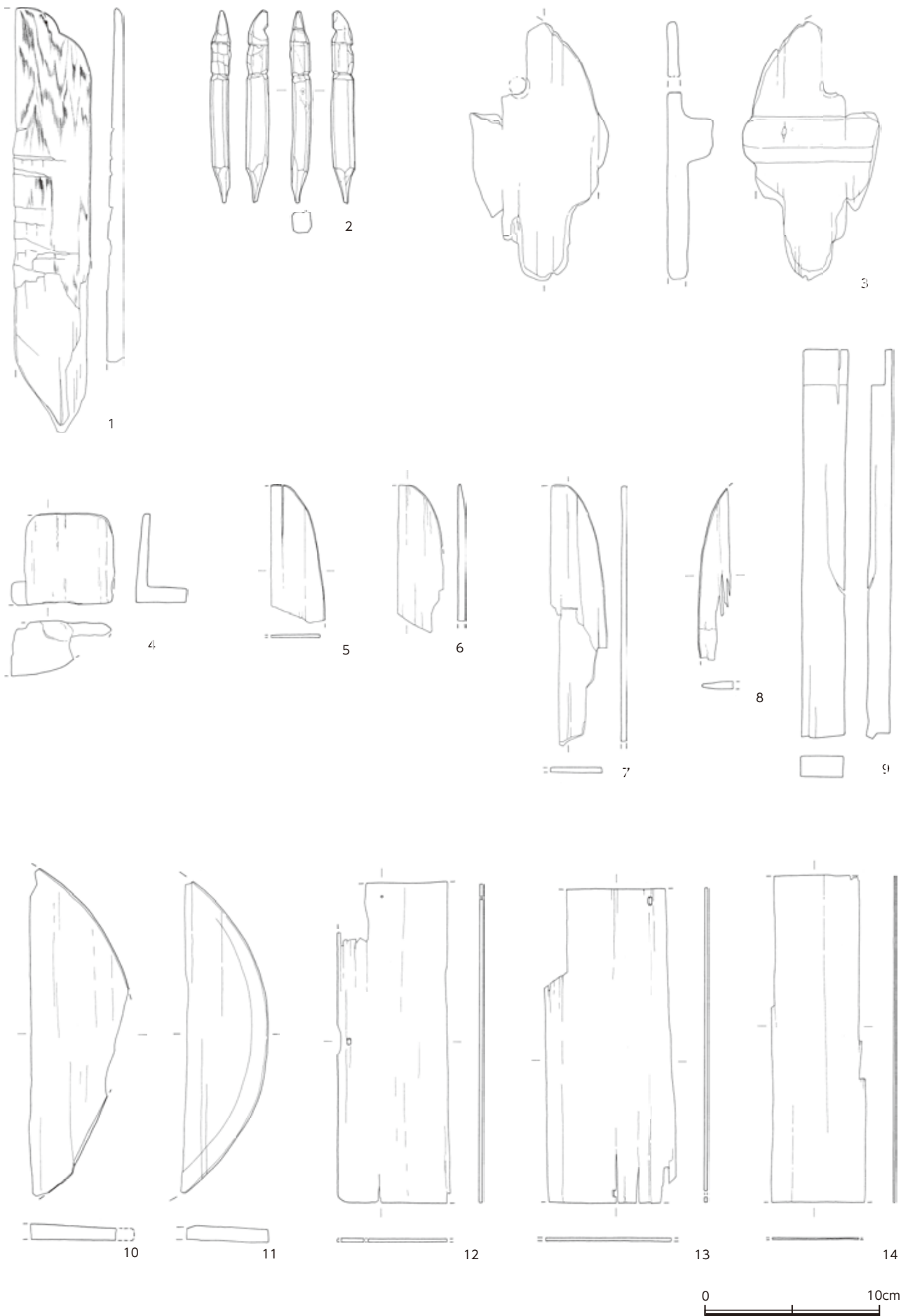


图24 溝3出土遺物(1)

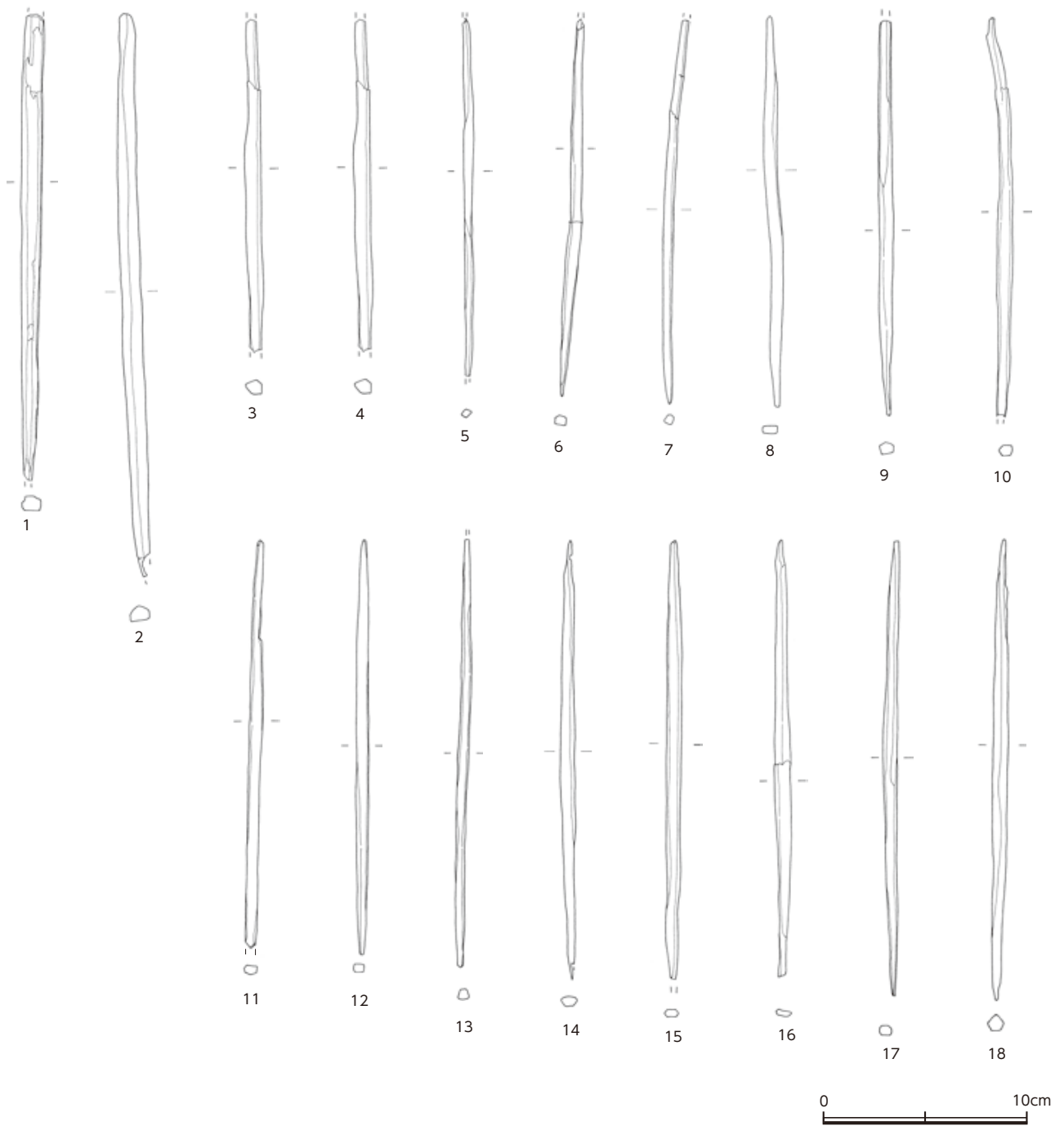


図25 溝3出土遺物(2)

の皿である。31は朱漆で手描きにより笹を施文、32は無文である。33は円板である。蓋、もしくは曲げ物の底板になると思われる。34は経木折敷である。全長19cm、厚さ2mmを測る。2ヶ所に直径3mmの小孔を有する。図23、1は大型の円板である。直径40cmに近く大型品の底板もしくは蓋であったと想定される。上面に3か所貫通孔があり、側面に14個の穴を有す。内10個には木釘が遺存する。片面に隙間なく刃物痕が多く見られ俎板に転用し使用したものと想定される。図23、2、3はロクロ成形のかわらけの大皿と小皿である。胎土は白褐色を呈し粉質の強い精良土である。焼成良好でまた、作りが丁寧である。また、裏込めからは犬の頭骨、及び不明動物の関節が出土している。溝2は出土遺物の様相から14世紀前半の年代に想定される。

溝3出土遺物(図24、25)

図24、25は木製品である。1は調度具と思われる。周縁端部に1か所切り込みがある。恐らく4隅に同様の切り込みが入る隅丸方形の盆になるかと想定される。片面は炭化した部分がある。中心部に向かい厚さが増しており、直径の大きい大型品になると予想される。また端部が切断面になっており転用部材として再使用したと想定される。2は形代で烏帽子を被った人形である。烏帽子、頭部、胴部を削り出し先端は串状に尖る。突き刺して使用されたのであろう。3、4は連歯下駄である。4～8は草履芯の一部分である。9は建具の一部分と想定される。戸板、蔀、格子等の一部分であると想定される。10、11は円板である。厚さは均一で1cmに満たない。蓋、或いは底板になると想定される。11には直径21cmの分まわし状の切り印が残る。12～14は経木折敷である。18.2～18.8cm方形、厚さは0.2cmを測る。図25は箸である。1、2は先端が欠損しており全長は不明であるが、太さ9mmを測り、他とは2倍ほど太くなり菜箸と思われる。

溝5(図26)

X2～3・Y4グリッドにおいて海拔22.8mにおいて検出された南北方向の溝である。上層は井戸2により削平された、東肩は調査区外東にある。検出された掘り方規模は南北の長さ95cm、幅50cmを測る。深さは確認面より25cmを測り、底部の海拔は22.1mである。西肩には護岸施設の板材が遺存していた。縦板を土留めとし、その前面に細い横板材を通して抑え、杭を打ち込んで止めるという、溝2、3と同様な工法で構築されている。縦板は長さ25cm、幅13cm、横板は幅5cm、長さ17cm、杭は6×3の太さ

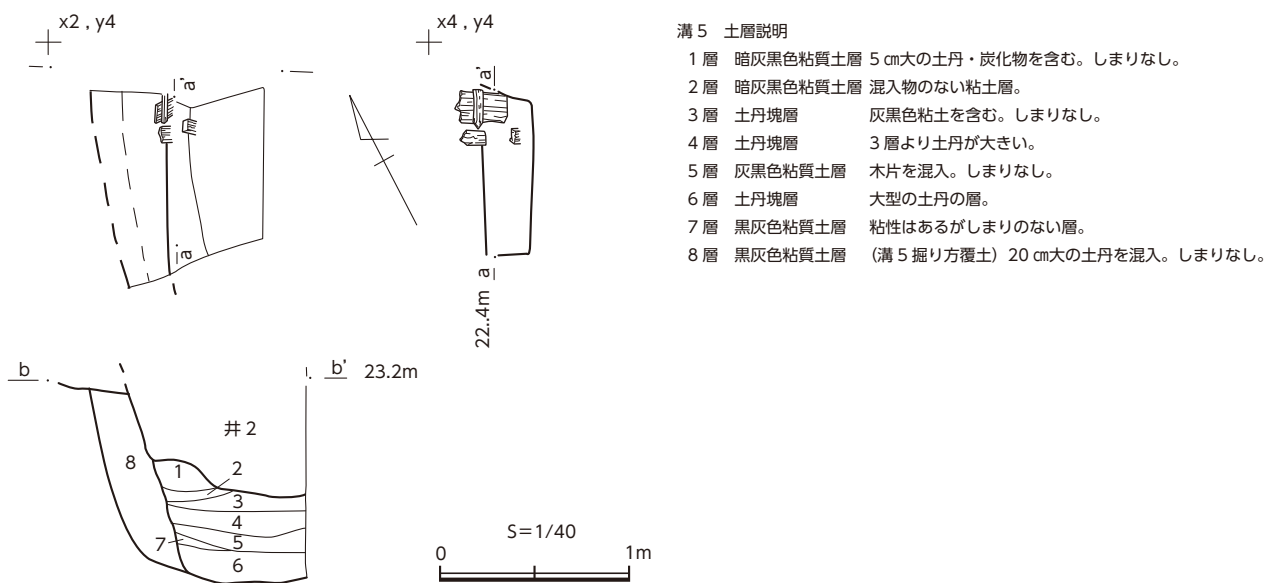


図26 溝5

3cmの長さのものが遺存する。

覆土は上層が灰黒色粘質土で炭化物、5cm大の土丹を含む。下層は大型土丹塊で埋められていた。この溝の南北方向の軸はN-24°-Eである。

溝5出土遺物(図27)

1は常滑窯片口鉢I類である。胎土は淡灰色を呈し僅かに白色粒子を含み精良である。I類の最末期の型式6a型式である。2は鉄製品、釘である。

また、当址からは貝が3点出土している。

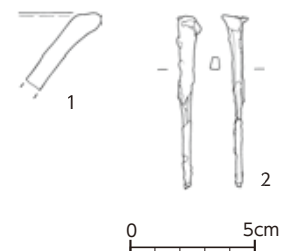


図27 溝5出土遺物

方形土坑1(図28)

調査区南壁際、X3～5・Y4グリッドにおいて海拔23.65mで検出された。当址の大半は調査区外にある。検出された掘り方規模は南北70cm、東西156cm、深さは確認面より10cmを測る。平面形は方形を呈する浅い掘り込である。覆土は黄褐色粘質土で、土丹粒子、炭化物を多く含み、粘性はあるがしまりはない。

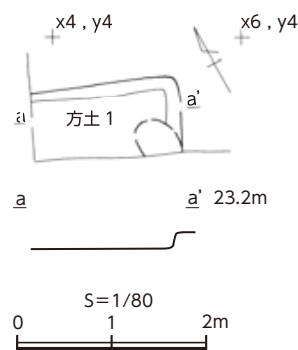


図28 方形土坑1

柱穴(図20)

柱穴は2口検出された。表に示したものが寸法で、規模はほぼ同様となり、関連性をもつ柱穴の可能性も否定できないが2口だけでは不明である。火災を受けて改修した新旧の溝の交代時期、方形土坑を破棄して柱穴を構築して居住空間にした時期と3面には大きな画期があったようである。火災との関連性は不明であるが、少なくとも2時期の変遷をたどっていることは考えられる。

3面柱穴寸法表

柱穴名	規模	深さ	底部の海拔	平面形	備考
Pu	34 × 36	14	23.50	円形	
Pv	40 × 35	26.3	23.39	楕円形	南壁は調査区外

3面出土遺物(図29)

1～18はロクロ成形のかわらけである。1～4は大皿、5～7は中皿、8～17は小皿、18はミニチュアのかわらけである。1、2、5～7、18は胎土が精良土で焼成良好な薄手丸深の器種である。3、4は砂粒が多く混入するが粉質が強く丁寧な作りである。小皿は概ね粉質で比較的精良で丁寧に作られるが、11は砂粒が多い粗胎で作りが雑である。器高が高く体部中央に稜線の入る8、11、12、器高が2cm以下の低い皿タイプと2種類に分類される。4、7、11は灯明皿である。19は瀬戸窯の灰釉洗である(前Ⅲ期)。胎土は灰黄色を呈し若干微砂を含む精良土である。釉調は淡黄緑色、光沢は良好である。器表には微細な貫入が顕著で気孔が多い。20、21は常滑窯の甕と片口鉢Ⅱ類である。共に6a型式である。20の胎土は黄褐色を呈し、長石粒子、泥岩粒子を含み軟質である。縁帯幅は2.4cmを測る。21の胎土は黒褐色を呈し、長石粒子を多く含み硬質である。口縁部は横ナデ、体部は斜め方向のナデ成形である。22～24は瓦質の手焙りで、22、23は輪花型となる。22の胎土は橙色を呈し砂粒を多く含む。内外面は縦方向の磨き調整である。外面体部口縁下に16弁の菊花のスタンプを押印する。内面に煤が付着している。23の胎土は淡桃色を呈し赤褐色粒子、白色粒子を多く含み軟質な粗胎である。内外面共に縦方向の磨き調整である。器表には厚く煤が付着している。24の胎土は淡橙色を呈し赤褐色粒子を多く含む。体部外面は横方向の磨きが顕著で黄橙色に輝き滑らかである。内面は黒く煤けている。底部外面は砂底である。25は瓦器の底部である。瀬戸内東部地域の産である。胎土は白色を呈し黒褐色の胎芯を残す。底部外面は糸切り底である。26、27は北宋銭、26は祥符元寶、27は景祐元寶である。28は硯である。鳴滝(若王子)産で筆舟が付く。ムコウブチに波文を有する。3面は遺物の出土状況から概ね13世紀末葉～14世紀前半に比定される。

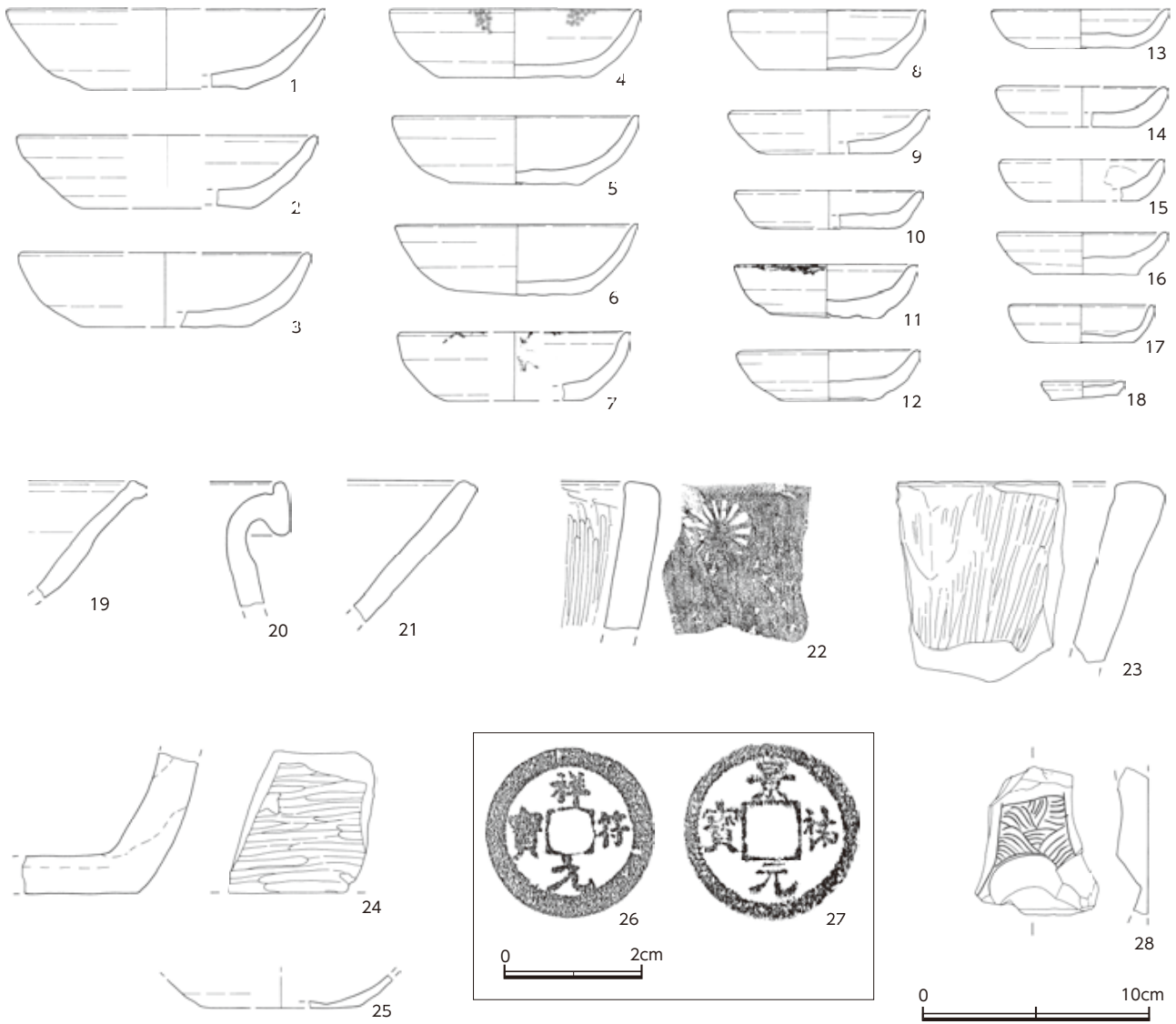


図29 3面出土遺物

最終面出土遺物(図30)

中世の地山である黒色粘土まで掘り下げ時に出土した遺物である。1～3は磁器である。1、2は龍泉窯の青磁製品で、1は鎬蓮弁文碗、2は蓮弁文折縁皿である。3は景德鎮窯の青白磁の輪花型合子の蓋である。1の胎土は灰色を呈し精緻である。焼成不良の為釉は白濁して白緑色を呈する。口唇端部は外反し、体部の鎬蓮弁文は細長い。2の胎土は灰白色を呈し精緻である。釉調は透明な灰緑色、光沢は良好である。3の胎土は灰白色を呈し精緻である。釉調は透明な水青色を呈し光沢は良好である。口縁部は釉を掻き取り無釉とする。内面は露胎である。断面に漆接ぎに使用された黒漆が付着している。4は木製品である。先端部分は欠損しており全長は不明であるが、太さが1cm四方以上あり、食器ではなく調理器具としての菜箸と思われる。13世紀末葉～14世紀中葉に比定される。

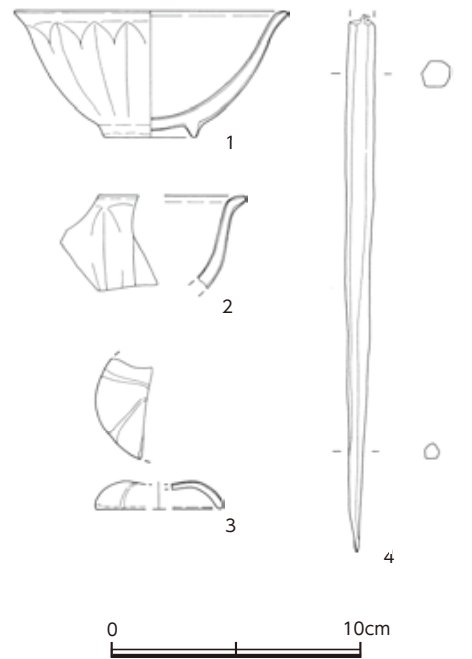


図30 最終面まで出土遺物

第四章 まとめ

今回の調査では中世期の3面の遺構面が検出された。出土遺物から中世1面は15世紀前葉、中世2面は14世紀後半～15世紀初頭、中世3面は13世紀末葉～14世紀前半に比定される。また、3面下から地山までの層位より出土した遺物からこの谷戸が13世紀末葉頃から開発が始まったことが確認された。出土遺物は整理箱4箱で、かわらけが全体の83%を占め、以下常滑(8%)、木製品(3%)、瀬戸(2%)と続き、他に国内搬入陶器、瓦質製品、石製品、金属製品、舶載磁器等が僅かばかり出土している。以下、古い順から各面の様相を述べ考察と反省を加えまとめとしたい。

中世3面

東西溝2条(溝3・溝2)と南北溝1条(溝5)を主体とする。溝3は火災に遭った痕跡があり、それを改築したのが溝2である。この溝群の溝幅は30cm足らずであるにも関わらず、しっかりした木組み護岸施設を有する所謂、都市型の箱型溝である。両溝共に北岸の護岸施設が抜き取られて遺存していなかったために、溝群の北側全体を若干掘りすぎてしまい、遺構面の細部が明確に出来なかったことは反省すべき点である。この溝群は谷戸奥へと続く様相を示しており、土地の区画溝というより谷戸奥からのしぼり水を山麓の平場へと導く流路の類ではないかと想定される。南北に走る溝5は井戸1・2の掘り方による攪乱を受け遺存状態は非常に悪くまた、かなり深いためトレンチによる確認調査となり全体像は把握できなかったが、出土遺物から溝5は谷戸の開発の草創期時の開削となることが確認された。溝3は出土遺物が木製品のみで開削年代を特定出来なかったが、溝2が14世紀前半に比定され、且つ溝2からの出土遺物中には13世紀末葉の遺物が混入しており、それは溝3の遺物が混入したとも考えられ、溝3は流路、溝5は区画溝、或いは側溝として異なった機能を果たしながら並存していた可能性がある。溝3を破棄し溝2に改築時に、同時に溝5は破棄されその地帯一体を埋めて土丹地形により土地を広げたと考えられる。溝2・3からは今回の調査で出土した木製品の97%が確認され、その主体は飲食具の類であった。これらは谷戸奥主体部に居住する住人が溝の中に破棄したと想定される。また、飲食具に混じって人形の形代が出土しており、主体部で祭祀をする宗教的空間があったことを推測させる。また、硯、手焙り等の寺院ならではの遺物が出土していることは更なる首背点になると思われる。また、溝の護岸施設の様相も寺院という経済的背景があったという証左になるのではないだろうか。本調査地点東の谷戸奥は太平寺跡と伝承されており、当寺は14世紀後葉には本格的な伽藍配置になったといわれている。当調査地点が寺院の一角になる可能性もあり、寺域をさらに谷戸開口部方向にと広げるための造成であったことも考えられる。検出遺構からは寺域内であるなら縁辺部の様相の一角を確認したと思われる。

中世2面

3面時と同様な強固な土丹版築により整地されており、このような地形形態から主体者は引き続き有力な寺院関係者である印象を受ける。また、谷戸の排水路と思われる溝は該期には素掘りとなり若干南側に移動し、溝の両側には井戸、土坑、柱穴群が構築され前期より活気が生まれ確実に生活面としての生活臭が増す。しかし、遺構群の軸線は3面時と同方向を示し、土地の活用方法もそのまま前時期を踏襲しており基本線の大枠には変化はないように思われる。貞治二(1363)年四月の『円覚寺文書目録』中に「円覚寺境内絵図」がある。その絵図には山門門前に小家屋が立ち並ぶ様子が描かれている。この境内図の作成時期は元亨3(1323)年から建武2(1335)年といわれており、この間の円覚寺伽藍の寺容を描いたものであるといわれている。この時期は2面の時期よりやや先行するものであるが、寺域の縁辺部とは後世にもおそらくこのような類のものであろうと想定され、当調査地点の様相も似たようなものであると思われる。当

調査地点が太平寺跡であるなら、2面の時期は本格的な伽藍配置になった頃である。

中世1面

土丹地形は依然として強固であり、主体者は依然として有力者で有り続ける様相である。谷戸の流路は本調査地点から移動したようで、全体が建物域となる。また溝4は現在、調査地点の西側を南北に走る南北道路と平行関係にある。今回検出された溝の西側に現在の道路の道筋を踏襲して道路が存在する可能性も考慮され、溝が道路側溝としての機能を有するものであることも考えられる。溝4が道路側溝の可能性を示すなら、道筋が谷戸奥に寄りになり土地の区画が移動して寺域が狭まったと考えられる。この地域の大きな変化の原因は本調査地点からは読み取れない。溝を埋めて平場になった土地に建物を数次に渡り建て替え、その状況が縁辺部から谷戸奥にまで広がっていく様相を呈している。柱穴の掘り方規模は小さく、建物は2面時同様、小家屋程度である。2面時より出土遺物は少ないものの、地形の様相、検出遺構等から2面時同様の勢いがあったことを窺わせる。

第1章でみたようにこの遺跡地は本調査地点が存続している間、宗教的空間地帯で有り続けた。調査地点近辺はこの時期も依然として寺院域として機能していたことが理解されており、その延長上にこの遺跡も位置づけられる。また、喫茶具である瓦質の風炉が出土しており本調査地点近辺に寺院があったことは確実である。当調査地点は寺域の縁辺地の様相か、もしくはこの遺跡地の宗教的空間という環境から派生した一端が発見されたと思われる。

西御門遺跡遺物観察表 単位 cm (復元径) [遺存値]

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考	
	8	1面	土坑1	瀬戸窯 卸皿	底部小片			灰白色/黒色微砂を 含む、気泡がある	灰色		灰釉 刷毛塗り	
	9	1面		かわらけ	(108)	6.4	3.5	明橙色/赤褐色粒が 多く、砂粒・泥岩粒 を含む。やや粉質		ロクロ		
		2		かわらけ	11.0	6.2	3.2	明橙色/赤褐色粒多 く、砂粒・泥岩粒を 含む。やや粉質		ロクロ		
		3		瀬戸窯 卸皿	底部小片			灰白色/黒色微砂を 含む	灰色		灰釉 刷毛塗り	
		4		瓦質 風炉	(26.0)			淡桃色/砂粒・黒砂・ 橙色粒・長石粒含む	明褐灰色	内外横方 向の磨き	頸部高約2.1cm、外 頸に雷文が廻る。口縁 上面、窓部に煤痕有り。 口唇部～頸部に孔あり	
		5	表採	かわらけ	(7.8)	5.0	1.7	白褐色/黒砂・泥岩粒・ 白針を含む		ロクロ		
		6		かわらけ	(7.2)	(5.2)	1.7	白褐色/黒砂・橙色粒・ 白針を含む		ロクロ	灯明皿	
		7		常滑窯 片口鉢Ⅱ類	注口部小片			灰褐色/白色粒子・ 泥岩粒を含む	赤褐色			
12		1	2面	溝1	かわらけ	(12.4)	7.6	3.3	橙色/赤褐色粒・黒砂・ 泥岩粒を含む		ロクロ	
		2		かわらけ	12.6	7.1	3.2	橙色/黒砂・赤褐色粒・ 雲母・白針を含む		ロクロ		
		3		かわらけ	(13.0)	(6.5)	3.5	橙色/黒砂・赤褐色粒・ 泥岩粒を含む		ロクロ		
		4		かわらけ	(12.4)	(6.8)	3.0	橙色/黒砂・赤褐色粒・ 泥岩粒・雲母を含む		ロクロ	灯明皿	
		5		かわらけ	(12.0)	(5.8)	3.8	橙色/黒砂・赤褐色粒・ 泥岩粒・白針を含む		ロクロ		
		6		かわらけ	(11.8)	7.2	3.5	淡橙色/黒砂・褐色粒・ 泥岩粒・白針を含む		ロクロ		
		7		かわらけ	7.8	4.8	1.9	白褐色/黒砂多く泥 岩粒・白針を含む		ロクロ	打ち欠き 灯明皿	
		8		かわらけ	8.0	5.7	1.5	橙色/黒砂・橙色粒・ 泥岩粒・白針を含む		ロクロ	打ち欠き 灯明皿	
		9		かわらけ	(7.0)	(4.9)	1.9	淡橙色/黒砂・褐色粒・ 泥岩粒・白針を含む		ロクロ		
		10		かわらけ	(7.4)	(4.8)	2.1	橙色/赤褐色粒・砂 粒多く白針含む		ロクロ		
		11		かわらけ	(7.2)	(5.0)	1.7	橙色/黒砂・赤褐色粒・ 白針を含む		ロクロ		
		12		かわらけ	(7.6)	(5.0)	2.1	橙色/黒砂・赤褐色粒・ 泥岩塊・白針を含む		ロクロ		
		13		かわらけ	(8.0)	(5.4)	2.2	淡橙色/黒砂・褐色粒・ 泥岩塊・白針を含む		ロクロ		
		14		瀬戸窯 平碗			[4.9]	灰黄色/黒色微砂含 み、やや砂質	薄い黄緑色の 灰釉で透明度 がある		灰釉 浸け掛け	

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
	15			常滑窯 片口鉢Ⅱ類			(10.5)	橙褐色／白色粒多く、 やや砂質	橙色		内面に竹管状で押した 痕が3カ所ある。火鉢 の代用をしたのか内面 全体に火を受けている。 第7型式
	16			滑石製品 スタンプ	4.1	[3.9]	1.3	やや赤みのある銀白 色	銀白色		加工途中で破損
14	1	2面	井戸1	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.6	淡橙色/黒砂・泥岩粒・ 雲母・白針を含む		ロクロ	
	2			銭 天聖元寶	2.4	2.3					初鑄年 1023年 篆書
16	1	2面	井戸2	瀬戸窯 卸皿	口縁部小片			灰色	薄い黄緑色の 灰釉で透明度 がある		釉の剥離が顕著
18	1	2面	土坑3	かわらけ	(7.4)	(4.6)	2.1	橙色/黒砂・赤褐色粒・ 長石粒・白針を含む		ロクロ	
19	1	2面		かわらけ	(13.6)	(8.0)	3.5	橙色/黒砂・赤褐色粒・ 雲母・白針を含む		ロクロ	
	2			かわらけ	(13.4)	(7.0)	4.5	淡橙色/赤褐色粒・ 泥岩粒・白針を含み やや粉質		ロクロ	
	3			かわらけ	(11.0)	(7.2)	3.1	淡橙色/黒砂・橙色粒・ 泥岩粒・白針を含み 粉質		ロクロ	
	4			かわらけ	(7.6)	4.2	2.5	橙色/砂粒多く 橙色 粒・泥岩粒・白針を 含む		ロクロ	灯明皿
	5			かわらけ	6.6	5.0	1.9	橙色/砂粒多く 赤褐 色粒・白針を含む		ロクロ	
	6			かわらけ	(6.6)	4.3	2.0	淡橙色/黒砂・橙色粒・ 雲母・白針を含む。 粉質		ロクロ	灯明皿
	7			かわらけ	(7.8)	(5.6)	2.1	淡橙色/黒砂・赤褐 色粒・泥岩粒・白針 を含みやや粉質		ロクロ	
	8			かわらけ	(8.0)	(5.5)	2.0	橙色/赤褐色粒多く 黒砂・雲母・白針を 含む		ロクロ	
	9			瀬戸窯 卸皿	底部小片			淡黄色/赤褐色粒を 含み、やや砂質	淡黄色		遺存部釉無し
	10			瀬戸窯 卸皿	底部小片			灰色/精良でやや砂 質	薄い黄緑色の 灰釉で透明度 がある		卸目細かく外面に浸け 掛け釉
	11			瀬戸窯 折縁深皿	胴部小片			淡黄色/精良でやや 砂質	薄い灰緑色の 灰釉でやや白 濁		櫛描による施文
	12			研磨痕の ある陶片	5.8	6.5	1.5	灰色/黒色粒・白色 粒を含む	赤褐色		常滑窯饗頸部片転用
	13			研磨痕の ある陶片	4.7	4.5	0.9	胎芯黒褐色/黒色粒・ 白色粒・石粒を含む	赤褐色		常滑窯片口鉢Ⅱ類口縁 部片転用
	14			瓦質 手焙り	鏝部の小片			肌色/黒砂・赤褐色 粒・白色粒を含む	肌色		口縁部に鏝のつく大型 の手焙り。鏝上面に三 つ巴のスタンプ文。顎 下にかえりがつく。

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
	15			鉄製品 釘	[4.7]	0.5	0.4				
2 2	1	3面	溝2	かわらけ	(13.6)	(7.3)	3.3	白褐色/赤褐色粒・ 雲母・白針を含む		ロクロ	
	2			かわらけ	(13.2)	7.5	3.0	淡橙色/黒砂・橙色粒・ 泥岩粒を含む		ロクロ	
	3			かわらけ	12.4	7.2	3.4	橙色/泥岩粒・雲母・ 白針を含む		ロクロ	灯明皿
	4			かわらけ	12.0	8.0	3.0	橙色/雲母・白針を 含む		ロクロ	
	5			かわらけ	11.6	7.6	3.4	橙色/泥岩粒・雲母・ 白針を含む		ロクロ	
	6			かわらけ	(11.4)	(7.3)	3.0	橙色/赤褐色粒・泥 岩粒・雲母・白針を 含む		ロクロ	
	7			かわらけ	11.6	7.2	3.7	橙色/雲母・白針を 含む		ロクロ	
	8			かわらけ	12.2	8.4	3.0	白褐色/泥岩粒・雲母・ 白針を含む		ロクロ	
	9			かわらけ	11.8	7.0	3.1	淡橙色/泥岩粒・雲母・ 白針を含む		ロクロ	灯明皿
	10			かわらけ	(11.2)	(6.0)	2.9	肌色/赤褐色粒・雲母・ 白針を含む		ロクロ	
	11			かわらけ	10.8	6.3	2.9	淡橙色/雲母・白針 を含む		ロクロ	
	12			かわらけ	(11.2)	(6.5)	3.0	白褐色/赤褐色粒・ 雲母を含む		ロクロ	
	13			かわらけ	(10.6)	(5.7)	3.0	淡橙色/雲母を含む		ロクロ	
	14			かわらけ	(9.8)	(5.0)	2.8	白褐色/泥岩粒・雲母・ 白針を含む		ロクロ	灯明皿
	15			かわらけ	7.6	4.7	2.0	褐色/白針を含む		ロクロ	灯明皿
	16			かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.8	淡褐色/雲母・白針 を含む		ロクロ	
	17			かわらけ	(7.0)	(4.1)	1.5	淡褐色/赤褐色粒・ 雲母・白針を含む		ロクロ	
	18			かわらけ	6.4	3.9	2.0	淡褐色/雲母・白針 を含む		ロクロ	
	19			かわらけ	(7.4)	(4.2)	1.7	淡褐色/泥岩粒・白 針含む		ロクロ	
	20			龍泉窯 青磁蓮弁文 折縁鉢	口縁部小片			灰色/黒色粒・白色 粒を含む	不透明な灰緑 色		遺存部全体に貫入
	21			白磁 小皿	口縁部小片			白色/黒色粒子を含 む。精良	薄い透明釉		口兀で内面に雷文
	22			常滑窯甕	口縁部小片			胎芯黒褐色/黒色粒・ 白色粒・石粒を含む	赤褐色		6a型式
	23			常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片			黒褐色/砂粒・黒砂・ 白色粒・長石粒含む	赤褐色		6a型式

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
	24			伊勢系土鍋	口縁部小片			胎土黒褐色/白色粒・黒粒を多く金雲母を含む	灰白色		
	25			土器質 手焙り	口縁部小片			淡橙色/黒砂・白色粒・赤褐色粒を含む	淡橙色		浅鉢型
	26			研磨痕のある滑石片	5.2	2.0	1.4				滑石鍋胴部片転用
	27			銭 開元通寶	2.3	2.3					初鑄年621年 背上月
	28			漆製品 椀		(7.0)					内外面に赤色漆の三つ 巴スタンプ文
	29			漆製品 皿	9.6	8.1	1.3				内面は赤色漆の松・笹・ 波の組み合わせ文。外面 は2ヶ所に波文?
	30			漆製品 皿	(9.6)	6.6	1.4				内面に赤色漆の梅の木 か?
	31			漆製品 皿		(5.4)					内外面に赤色漆の笹文
	32			漆製品 皿	(10.6)	(6.6)	1.3				無文
	33			木製品 円板	[13.5]	[4.7]	0.5				遺存部に孔無し
	34			木製品 折敷	18.6	[11.6]	0.2				経木折敷 小孔有り
2 3	1	3面	溝2	木製品 円板	長径 39.5	短径 38.3	1.0 ~ 1.3				蓋板もしくは底板。平 面に貫通孔、側面に木 釘の残る穴有り。外周 面に側板の跡が残る。 俎板に転用
	2		溝2 裏込め	かわらけ	12.4	6.9	3.5	白褐色/黒色粒・石粒・ 泥岩粒・白針を含む		ロクロ	
	3			かわらけ	(7.8)	5.1	1.7	白褐色/黒色粒・橙 色粒・泥岩粒・白針 を含む		ロクロ	灯明皿
2 4	1	3面	溝3	調度具 盆?	[24.0]	[4.8]	1.0				表面炭化、雲形の削り 加工有り
	2			木製品 形代 人形	10.9	1.0	1.2				烏帽子を被り、先は申 状に削られている
	3			木製品 下駄	[14.5]	[7.5]	[2.5]				連歯下駄
	4			木製品 下駄	[5.0]	[5.7]	[0.6]				連歯下駄
	5			木製品 草履芯	[7.8]	[3.0]	0.2				
	6			木製品 草履芯	[8.5]	[2.4]	0.4				
	7			木製品 草履芯	[14.9]	[3.0]	0.3				
	8			木製品 草履芯	[9.8]	[1.6]	0.4				

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
	9			木製品 建具	[22.0]	2.3	1.2				戸板、部、格子の 部材か
	10			木製品 円板	[22.0]	[4.5]	0.9				遺存部に孔無し
	11			木製品 円板	[21.0]	[4.5]	0.7				遺存部に孔無し。φ 21.0 c mの分まわし 状の切り印が残る
	12			木製品 折敷	18.1	[6.1]	0.2				経木折敷 小孔有り
	13			木製品 折敷	17.9	[7.2]	0.2				経木折敷 小孔有り
	14			木製品 折敷	18.5	[5.0]	0.1				経木折敷
2 5	15	3面	溝3	木製品 箸	[22.7]	0.9	0.7				箸としては太くて長 い。菜箸か
	16			木製品 箸	[27.4]	0.9	0.8				箸としては太くて長 い。菜箸か
	17			木製品 箸	[13.2]	0.7	0.5				
	18			木製品 箸	[16.1]	0.8	0.7				
	19			木製品 箸	[17.5]	0.5	0.4				
	20			木製品 箸	[18.4]	0.5	0.6				
	21			木製品 箸	[18.7]	0.4	0.5				
	22			木製品 箸	19.0	0.7	0.4				
	23			木製品 箸	[19.2]	0.7	0.6				
	24			木製品 箸	[19.5]	0.7	0.5				
	25			木製品 箸	[19.8]	0.7	0.4				
	26			木製品 箸	20.2	0.5	0.4				
	27			木製品 箸	[20.9]	0.5	0.6				
	28			木製品 箸	[21.0]	0.7	0.4				
	29			木製品 箸	[21.2]	0.8	0.4				
	30			木製品 箸	21.3	0.7	0.4				
	31			木製品 箸	22.1	0.6	0.5				
	32			木製品 箸	[22.4]	0.7	0.8				

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
27	1	3面	溝5	常滑窯 片口鉢1類	口縁部小片			灰色/白色粒含む。 精良	灰色	口縁部は やや外に 延びる	6a型式
	2			鉄製品 釘	6.8	0.3	0.5				
29	1	3面		かわらけ	(138)	(6.8)	3.5	白褐色/黒砂・・雲 母を含む		ロクロ	
	2			かわらけ	(128)	(7.3)	3.2	橙色/黒砂・赤褐色粒・ 雲母を含む		ロクロ	
	3			かわらけ	(124)	(7.6)	3.3	白褐色/黒砂・泥岩粒・ 白針を含む		ロクロ	
	4			かわらけ	(108)	(6.6)	3.0	淡橙色/黒砂・赤褐 色粒・白針を含む		ロクロ	灯明皿
	5			かわらけ	10.6	5.4	2.9	白褐色/黒砂・泥岩粒・ 雲母を含む		ロクロ	
	6			かわらけ	10.4	6.1	3.1	白褐色/黒砂・雲母・ 白針を含む		ロクロ	
	7			かわらけ	(9.6)	(5.8)	3.0	淡橙色/黒砂・赤褐 色粒・雲母・白針を 含む		ロクロ	灯明皿
	8			かわらけ	(8.4)	5.9	2.6	淡橙色/黒砂・赤褐 色粒・白針を含む		ロクロ	遺存部は二次被熱か断 面も黒色
	9			かわらけ	(8.4)	(6.3)	1.9	白褐色/黒砂・泥岩粒・ 雲母を含む		ロクロ	
	10			かわらけ	(8.0)	(6.2)	(1.8)	淡橙色/黒砂・赤褐 色粒・泥岩粒・白針 を含む		ロクロ	
	11			かわらけ	7.8	5.0	2.3	淡橙色/黒砂・赤褐 色粒・泥岩粒・白針 を含む		ロクロ	灯明皿
	12			かわらけ	(7.6)	(4.6)	2.2	淡橙色/黒砂・泥岩粒・ 雲母を含む		ロクロ	
	13			かわらけ	(7.6)	(4.6)	1.7	淡褐色/黒砂・赤褐 色粒が多く雲母を含 む		ロクロ	器表は灰白色
	14			かわらけ	(7.2)	(4.8)	1.8	淡橙色/黒砂・泥岩粒・ 雲母を含む		ロクロ	
	15			かわらけ	(7.0)	(4.7)	1.9	淡橙色/黒砂・赤褐 色粒・白針を含む		ロクロ	
	16			かわらけ	(7.4)	4.5	1.8	淡橙色/黒砂・泥岩粒・ 白針を含む		ロクロ	
	17			かわらけ	(6.2)	(4.6)	1.7	橙色/黒砂・赤褐色粒・ 雲母を含む		ロクロ	
	18			かわらけ	(3.6)	(3.0)	0.8	淡橙色/砂砂・橙色粒・ 泥岩粒・白針を含む		ロクロ	ミニかわらけ
	19			瀬戸窯洗	口縁部小片			灰黄色/微砂含む。 やや砂質で精良	薄い黄緑色の 灰釉で透明度 がある	口唇部中 央浅い窪 み、体部 下半横へ ラ削り	遺存部内面は全釉。外 面は浸け掛けで無釉の 部分あり

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
	20			常滑窯甗	口縁部小片			黄褐色／砂粒・赤褐色粒・白色粒・長石粒含む	赤褐色		6a型式
	21			常滑窯片口鉢Ⅱ類	口縁部小片			黒褐色／白色粒多く、黒砂・長石粒含む	赤褐色	口縁部上面に軽い沈線有り	6a型式
	22			瓦質手焙り	口縁部小片			橙色／赤褐色粒多く黒色粒・白色粒を含む	淡橙色	内外面縦磨きあり	輪花型。外側面上に菊花文スタンプ
	23			瓦質手焙り	口縁部小片			淡桃色／赤褐色粒多く黒色粒・白色粒を含む	暗灰色	内外面縦磨きあり	輪花型
	24			瓦質手焙り	底部部小片			淡橙色／赤褐色粒多く黒色粒・白色粒を含む	内面は暗灰色、外面は黄橙色	内面横へラ撫で	底部は厚く砂底
	25			瓦器		(7.0)		胎芯黒褐色／精良	灰白色		外底部は糸切り
	26			銭祥符元寶	2.5	2.5					初鑄年 1008年
	27			銭景祐元寶	2.6	2.5					初鑄年 1034年 真書
	28			石製品硯	海部小片						黒色粘板岩 鳴滝産(若王子石)。四周欠損。筆舟がつくタイプか
30	1	最終面まで		龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗	(10.7)	(3.8)	5.0	灰色一部赤橙色／精良	白濁した白緑色	口縁端部が外反	細長い鎬蓮弁文。生焼けの為か軸変している
	2			龍泉窯青磁蓮弁文折縁皿	口縁部小片			白色に近い灰白色／精良	透明な灰緑色	口縁端部が外反	外側面に鎬蓮弁文
	3			青白磁合子蓋	(5.0)		(1.0)	灰白色／精良	透明な水青色	輪花型	口縁部釉削り取り。内面無釉。補修の為の黒漆が残る
	4			木製品箸	[21.5]	1.1	1.0				箸としては太い。菜箸か

出土遺物点数表

種目	かわらけ 大	かわらけ 中	かわらけ 小	ミニかわらけ	手づくね	常滑 甕	常滑 片口鉢 Ⅰ類	常滑 片口鉢 Ⅱ類	常滑 壺
実測遺物	23	13	31	1	0	4	0	4	0
実測不可遺物	766	123	146	1	4	84	5	4	2
合計	789	136	177	2	4	88	5	8	2
	83%					8%			

種目	瀬戸	瀬戸 壺類	瀬戸 皿類	瀬戸 天目茶碗	瀬戸 平碗	瀬戸 折縁皿	瀬戸 おろし皿	瀬戸 行平	瀬戸 瓶類	瀬戸 入子	瀬戸 仏華瓶	瀬戸 緑釉	瀬戸 不明品	木製品
実測遺物	1	1	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	41
実測不可遺物	1	3	1	1	2	1	2	0	1	1	1	1	1	0
合計	2	4	1	1	2	2	5	0	1	1	1	1	1	41
	2%													3%

種目	白かわらけ	瓦器	瓦質風炉	瓦質 香炉	研磨製品	手焙り	伊勢系 土鍋	青磁	青白磁合子	白磁皿	滑石 鍋	滑石製品	石製品 硯	鉄製品 釘	金属製品 銭	スラゲ	古代	獣骨	貝
実測遺物	0	2	1	0	3	6	1	3	1	0	0	2	2	1	4	0	0	0	0
実測不可遺物	3	1	0	1	0	9	1	1	1	1	2	0	2	2	0	205g	1	2	3
合計	3	3	1	1	3	15	2	4	2	1	2	2	4	3	4	205g	1	2	3
	4%																		

貝種目	アカニシ	ハマグリ	キサゴ
	1	1	1



▲ A. 北方より調査区を望む



▲ B. 表土掘削前 (北西から)

▼ C. 表土掘削後の調査区 (南から)





◀ A. 1面東半 (北から)



◀ B. 1面西半 (南から)

▼ C. 1面P9出土埋納かわらけ (南から)



▼ D. 1面覆土出土瓦質風炉 (南東から)





◀ A. 2面東半 (南から)



◀ B. 2面西半 (北から)

2面井戸1・2 (南から) .C ▶



図版4



◀ A. 3面東半 (北から)



◀ B. 3面西半 (南から)

▼ C. 3面溝2・3 (西から)



▼ D. 3面溝2・3近景 (西から)





▲ A. 3面溝2・3南岸東側木組み護岸施設（北から）



▲ B. 同上近景（北から）



▲ A. 3面溝2・3南岸西側木組み護岸施設（北から）



▲ B. 同上近景（北から）



▲ A. 3面溝5 (東から)



▲ B. 調査区西壁土層

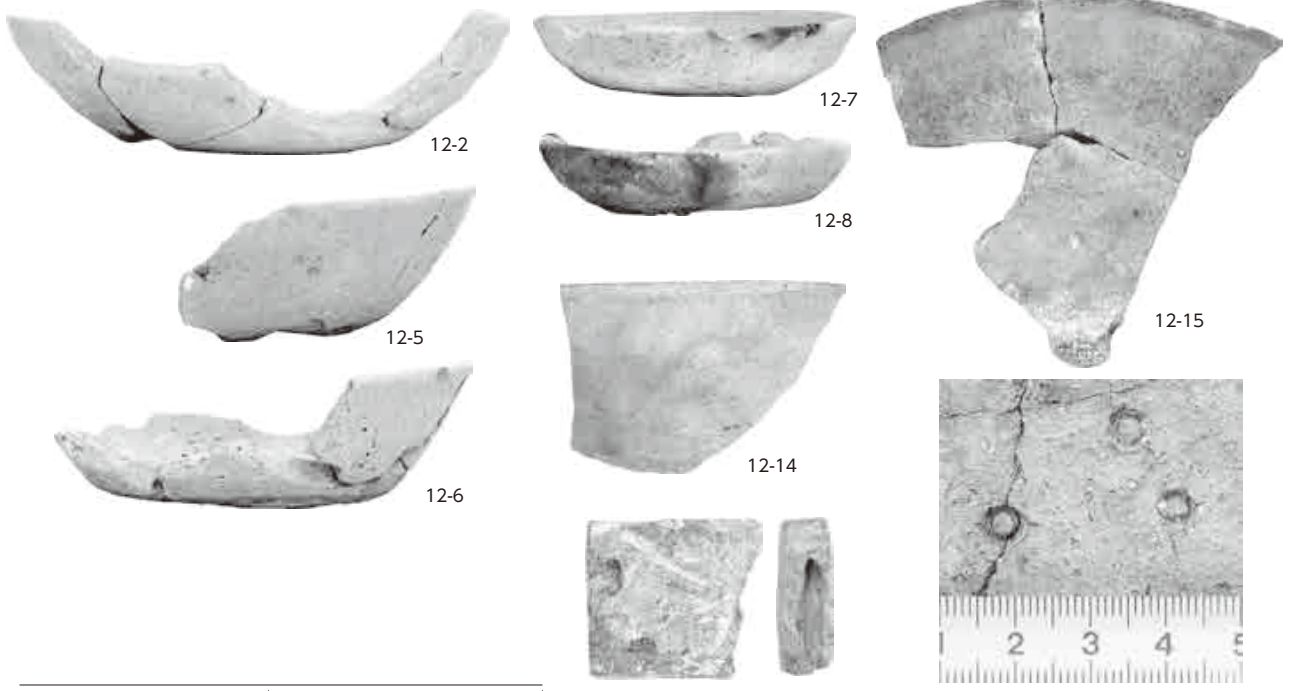
图版 8

土坑 1

1 面



溝 1

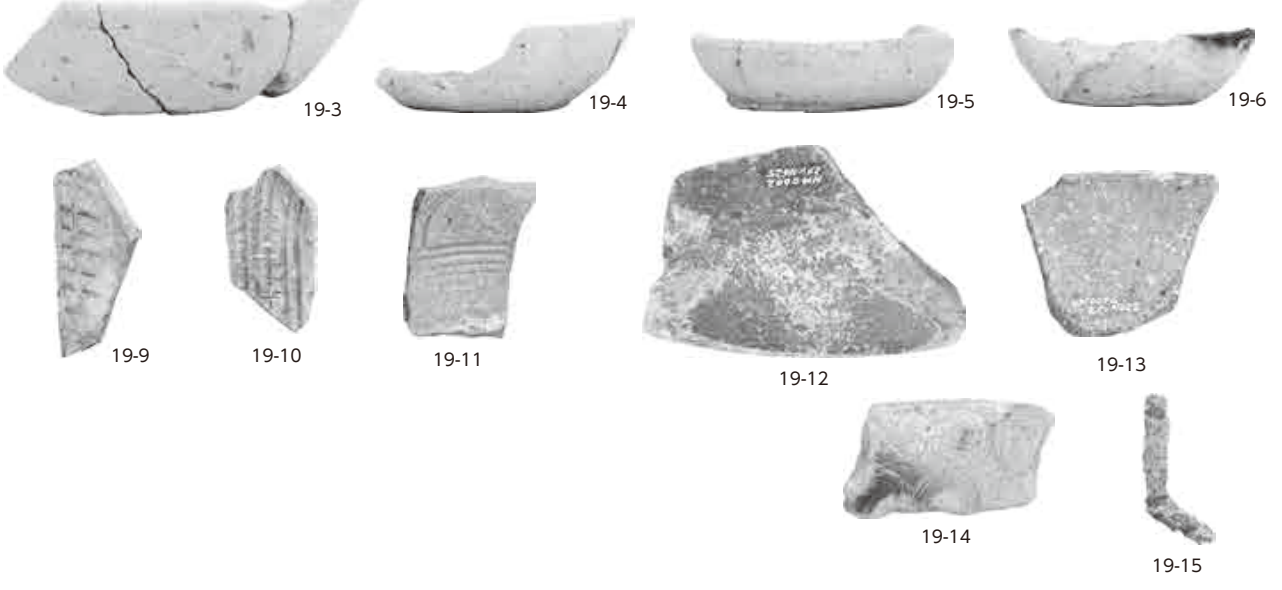


井戸 2

土坑 3



2 面



溝2



22-3



22-9



22-16



22-4



22-11



22-17



22-5



22-14



22-21



22-7



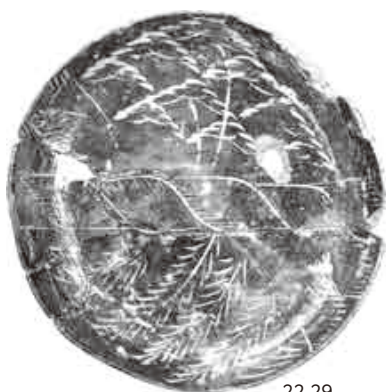
22-15



22-22



22-28

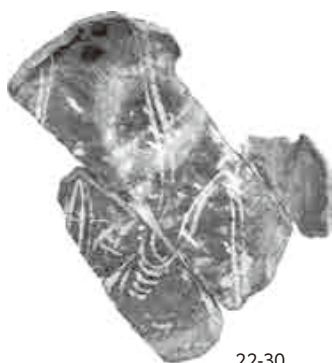


22-29

溝2 裏込め



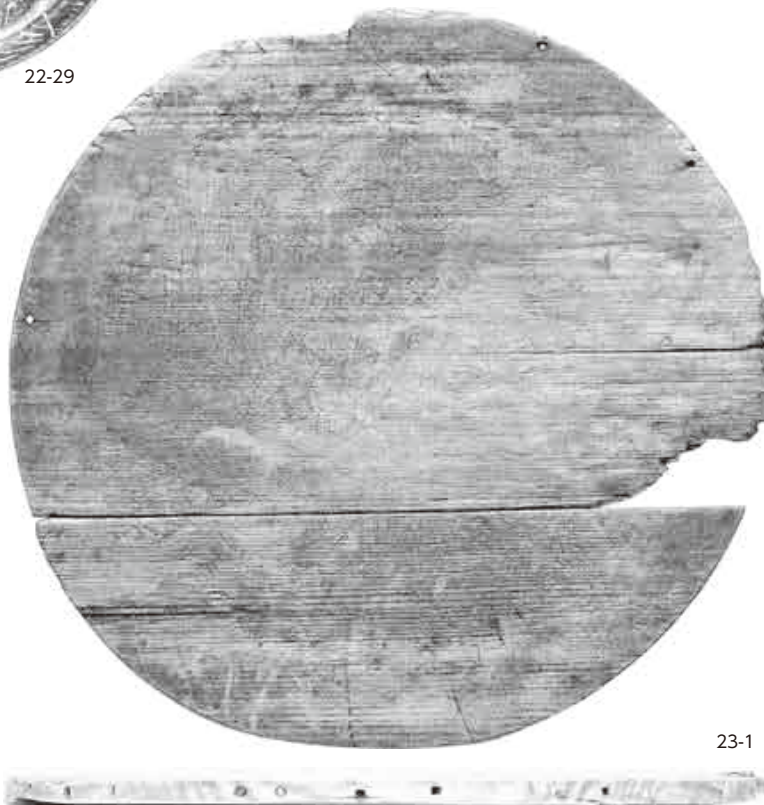
23-2



22-30



22-31



23-1

図版 10

溝 3



24-1

24-9



24-2



24-4



24-11

溝 5



27-2

3面



29-5



29-19



29-6



29-20



29-11



29-13



29-16



29-22



29-28



29-18

最終面まで

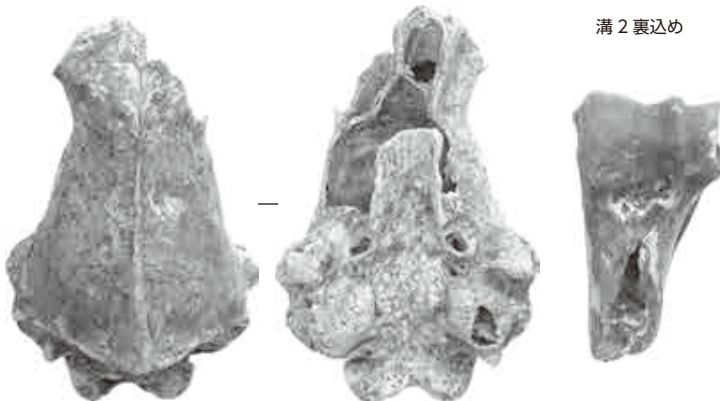


30-1



30-3

溝 2 裏込め



溝 5



今小路西遺跡

由比ガ浜一丁目2 1 3番1 2

例 言

1. 本報は今小路西遺跡（鎌倉市No.201）の内、由比ガ浜一丁目213番12地点における埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査期間は以下の通りである。
平成19年3月12日～平成19年3月30日
3. 現地調査体制は次の通りである。
調 査 員 熊谷満
調査補助員 三ツ橋正夫、伊藤博邦
調査参加者 (鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告に関する資料整理は以下の体制で行った。
担 当 者 降矢順子
調 査 員 伊藤博邦、加藤千尋、三浦恵
5. 本報告の執筆は、調査に関った熊谷満の資料提供を受けて降矢順子と齋木秀雄が分担した。なお、検出面の区分、遺構の帰属は調査を担当した熊谷に順じた。
6. 本書に使用した遺構、遺物図版の縮尺は以下の通りである。
遺構全体図 1/400
個別遺構 1/30
遺構図の水糸高は、海拔を示す。
遺物実測は1/3
7. 出土品、図面などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目次

本文目次

第一章 調査の概観	232
第1節 調査地点の位置と歴史環境	
第2節 周辺の調査	
第3節 調査軸の設定	
第4節 堆積基本土層	
第二章 検出された遺構と遺物	237
第1節 1面検出の遺構と遺物	
第2節 2面検出の遺構と遺物	
第3節 3面検出の遺構と遺物	
第4節 4面検出の遺構と遺物	
第5節 5面検出の遺構と遺物	
第6節 出土遺物の分析について	
第三章 まとめ	250

挿図目次

図1 遺跡範囲図	232	図9 2面遺構出土遺物	243
図2 調査地点と周辺の遺跡図	233	図10 3面遺構全体図	244
図3 調査区配置図	234	図11 3面検出遺構	245
図4 堆積土層図	235	図12 3面遺構出土遺物	245
図5 1面遺構全体図	238	図13 4面遺構全体図	246
図6 1面検出遺構	239	図14 5面遺構全体図	247
図7 1面遺構出土遺物	240	図15 5面検出遺構	248
図8 2面遺構全体図	242		

図版目次

図版1	255	図版4	258
1. 1面全景(西から)		1. 東壁土層断面(西から)	
2. 1面全景(北から)		2. 北壁土層断面(南から)	
3. 1面遺構9(西から)		3. 南壁土層断面(北から)	
図版2	256	図版5	259
1. 2面全景(北から)		出土遺物(1)	
2. 2面b(上方)と5面(南から)		図版6	260
3. 2面遺構13(南から)		出土遺物(2)	
図版3	257		
1. 4面全景(北から)			
2. 5面全景(北から)			
3. 5面遺構34(北から)			

第一章 遺跡の概観

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は、鎌倉の中心を南北に走る若宮大路の下馬交差点から長谷観音、大仏を経て藤沢方面に通じる道路（県道鎌倉・葉山線）の北側、下馬交差点から長谷観音のほぼ中間に位置する。本調査地点は、今小路西遺跡（遺跡No.201）の範囲内に含まれ、調査地の標高は9.8m前後を測る。

調査地点周辺は中世において「浜地又は前浜」と呼称されていた地域の一部であったと考えられる。「浜地」は街中の「屋地」と異なり、御家人等の屋敷地がなく、明確な区割りのない場所であったと思われる。「前浜」の名前の由来は不明であるが、若宮大路の浜ノ大鳥居の前の浜である名称であったからであるとも考えられる。前浜と呼ばれる地域は、東は滑川西岸、西は稲瀬川、北は六地藏辺りまでであったらしい。『吾妻鏡』等の文献によれば、この他にも「甘縄」「甘縄魚町」などの地名が本遺跡周辺の地名として記されている。甘縄と呼ばれた地域は遺跡の北西約390mの山裾に現存する甘縄神社付近一帯から鎌倉市立御成小学校辺りまでを含んでいたらしい。

甘縄神社はこの地域では古い社の一つである。『相州鎌倉郡神興山甘縄寺神明宮縁起略』によれば、和銅三年（710）八月に行基が草創し、染屋時忠が山上に神明宮、麓に神興山円徳寺を建立した。この後、源頼義が相模守となり、当社に祈祷して八幡太郎義家を甘縄の地に生んだとされている。甘縄周辺には甘縄神社の他に長谷寺（736年創建）、高德院（創建不明）、光則寺（1271年創建）の寺院が現存しており、この他に万寿寺、長楽寺などの寺院もあったことが『鎌倉廃寺事典』に記されている。また、甘縄の地には多くの御家人が居住していたことが『鎌倉市史—総説編一』に記されている。これによれば、甘縄神社近くに安達一族の屋敷があり、他にも多くの御家人の屋敷、別宅などがあったとされている。

遺跡周辺は古くから鎌倉に入る交通の要所であった。古くは古東海道が稲村ヶ崎の先端から現在の坂ノ下に抜け、調査地点周辺から現在の材木座にある元八幡宮付近から小坪・逗子へ抜けていたと考えられている。鎌倉に入る7本の道路（鎌倉七口）のうち、大仏、極楽寺の切通しの2本の道路は調査地点西方で合流して六地藏方面に抜けていた。

中世以前では、調査地点周辺に古東海道の道筋が近くを通り、鎌倉時代より前からある甘縄神社、御霊神社などが近くにあった。また、調査地点の南東の砂丘地帯は、下向原古墳群があったと言い伝えられているが、現在は残っていない。この付近の采女塚古墳から出土したという人物埴輪は知られている。ゆえにこの地は、中世以前にも生活が営まれていたことがわかる。

第2節 周辺の調査

今小路西遺跡範囲内では、鎌倉群衙跡や中世の大型武家屋敷などが検出された御成小学校校庭の調査が良く知られている（地点1）この関連遺跡は鎌倉中央図書館近くでも確認されている（地点2）。由比ガ浜地域にあたる調査地点周辺では、近年多くの調査が実施されるようになり、調査の

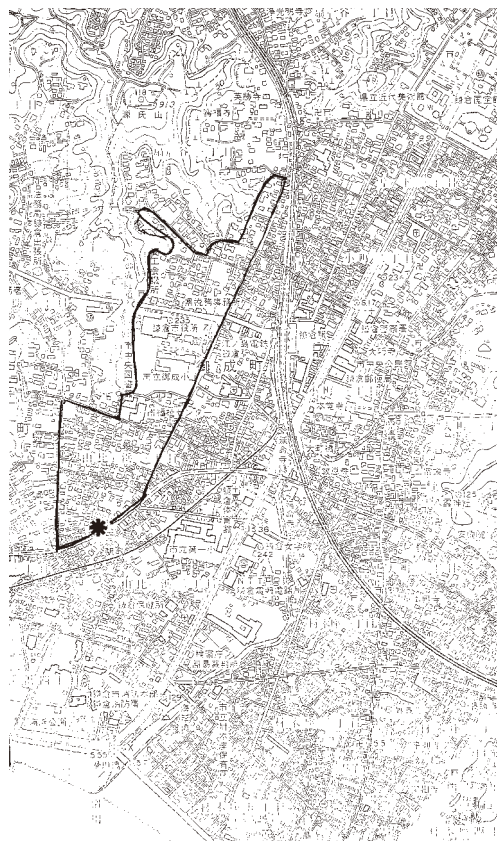


図1 遺跡範囲図 S=1/10000



図2 調査地点と周辺の遺跡図

S=1/2500

成果が明らかにされつつある。中世以前では、由比ヶ浜中世集団墓地遺跡で多くの竪穴住居址が検出され、墨書土器、緑釉陶器などの遺物も出土している（地点3）。また、長谷小路周辺遺跡では土壇墓内から仰臥伸展葬が検出され、そのうち1体には鉄鏃、刀子などが副葬されていた。土壇墓は出土遺物から見て弥生時代から10世紀までの年代が考えられている（地点4）。また、中世遺物に混じって出土する古代遺物も多く、由比ヶ浜地域に多くの生活痕跡が残されていることが明らかになっている。

中世では方形竪穴建物を中心として、礎石建物、掘立柱建物、井戸址、土坑、土壇墓などが検出されている。

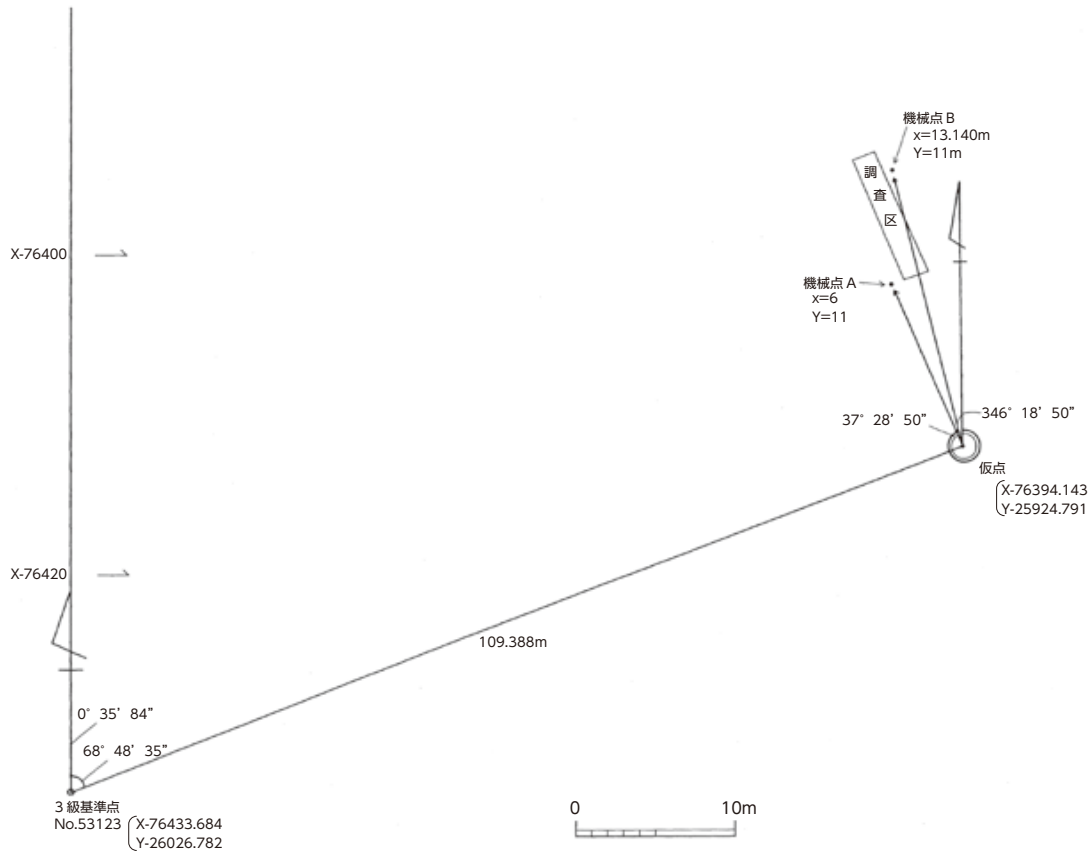


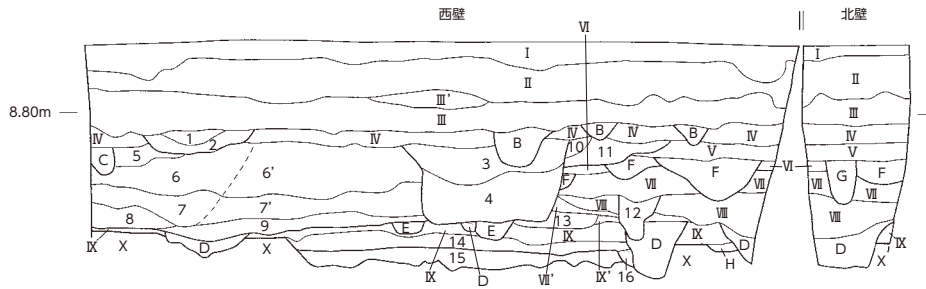
図3 調査区配置図

調査地点の西側では濃密な中世遺構が確認され、井戸覆土から銅銭の鋳型が出土して注目を集めた(地点5)。このほか地点6では道路が確認され、地点7～15では方形竪穴建物、井戸、土坑などが数多く確認されている。埋葬遺構は県道の北側で少なく、南側で多くなる傾向が認められる。地点2の南側は旧砂丘上に位置しているが、地域により性格の差があるようだ。

遺跡周辺の調査は近年になり増加する傾向にあり、これからも多くの新しい事実、知見が収集できることと思われる。

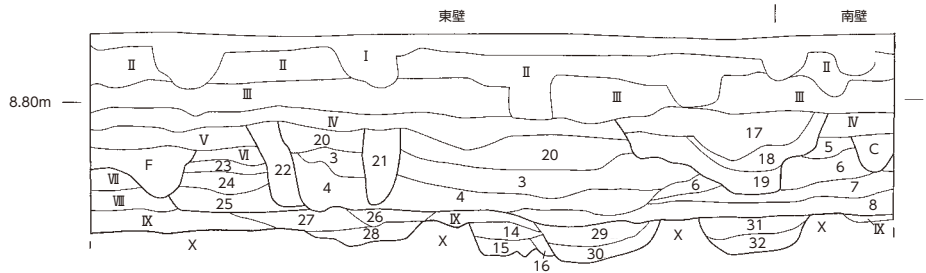
(主な調査報告書)

- 地点1 河野真知郎他『今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書』1990年
- 地点2 河野真知郎・宮田眞他『今小路西遺跡』
- 地点3 大河内勉他『由比ガ浜中世集団墓地遺跡 - 由比ガ浜四丁目136番地点 - 』1997年
- 地点4 宗台秀明他『長谷小路周辺遺跡 - 由比ガ浜三丁目258番1地点 - 』1995年。土壙墓にマウンド等は確認できなかった。副葬品は死者の左下肢骨上から出土。
- 地点5 宗台秀明他『今小路西遺跡 - 由比ガ浜一丁目213番3地点 - 』1993年
- 地点6 熊谷満『今小路西遺跡 - 由比ガ浜一丁目151番1地点 - 』2011年3月 (有)鎌倉遺跡調査会
- 地点8 降矢順子他『今小路西遺跡 - 由比ガ浜一丁目197番2外地点 - 』
- 地点12 齋木秀雄『由比ガ浜三丁目194番25外遺跡調査報告』1990年
- 地点15 齋木秀雄他『長谷小路南遺跡』
- 地点7、地点9、地点10は未報告。



西壁セクション土層

I	暗褐色土	表土。填圧を受けて強固に締まる。	1	暗褐色土	Bタイプ覆土。遺構10覆土
II	暗茶褐色砂質土	近世～近代の耕作土。かわらけ粒を微量に含む。	2	暗褐色土	①層に近似。土丹小ブロックを多く含む。遺構10覆土。
III	暗褐色土	土丹粒・小ブロックをやや多く含む。炭化物を少量含む。遺物包含層。	3	暗褐色土	土丹粒・小ブロックをやや多く含む。貝粒を少量含む。遺構13(方竪)覆土。
III'	暗褐色土	土丹粒を微量に含む。締まりあり。	4	暗褐色土	土丹粒・小ブロックを微量含む。貝粒を少量含む。砂性を帯びる。遺構13(方竪)覆土。
IV	暗褐色土	暗灰色弱粘質土混入し、やや灰色味がかかる。土丹粒・小ブロックを少量含む。1面構成土。	5	暗褐色土	土丹粒・小ブロックをやや多く含む。貝粒を少量含む。
V	暗灰褐色弱粘質土	土丹粒・炭化物を微量に含む。若干砂性を帯びる。締まりあり。2面構成土。	6	暗褐色土	土丹粒・貝粒を少量含む。砂性を帯びる。締まりあり。
VI	暗灰褐色弱粘質土	混入物をほとんど含まず、土丹粒をわずかに含む。若干砂性を帯びる。締まりあり。3面構成土。	6'	暗褐色土	⑥に近似
VII	暗褐色砂質土	貝粒やや多く含む。炭化物少量含む。締まりあり。	7	暗褐色土	土丹粒・貝粒を微量含む。締まりあり。
VIII	黄褐色砂	やや粗い砂を主体とし、暗褐色砂混入。炭化物をやや多く含む。締まりあり。4面構成土。	7'	暗褐色土	⑦に近似
VIII'	黄褐色砂	VIII層に近似。色調やや明るい。	8	暗褐色土	土丹粒を微量含む。締まりあり。
IX	暗茶褐色砂質土	暗褐色中砂混入。炭化物を部分的にやや多く含む。締まりあり。中世基盤層か。	9	暗灰色弱粘質土	貝粒混入。炭化物少量含む。
IX'	暗茶褐色砂質土	IX層に近似。色調やや明るい。	10	暗褐色土	土丹粒を多く含む。
X	暗茶褐色砂質土	古代基盤層。腐食土質。締まりあり。	11	暗褐色土	土丹粒を少量含む。若干粘性を帯びる。
			12	暗褐色砂質土	黄褐色砂混入。貝類少量含む。ピット覆土。
			13	黄褐色砂	上位に土丹粒をやや多く含む。締まりあり。遺構の覆土か。
			14	暗茶褐色砂質土	地山に似た腐食土質の土。炭化物を微量に含む。締まりやや弱い。遺構34(竪穴住居?)覆土。
			15	暗茶褐色砂質土	地山に似た腐食土質の土。明褐色砂質土混入。締まりやや弱い。遺構34(竪穴住居?)覆土。
			16	暗茶褐色砂質土	⑬に近似。遺構34(竪穴住居?)覆土。



東壁セクション土層

17	暗褐色土	拳大～人頭大の土丹塊を多く含む。遺構11覆土。
18	暗褐色土	土丹粒を少量含む。遺構11覆土。
19	暗褐色土	土丹粒・小ブロックを多く含む。遺構11覆土。
20	暗褐色土	土丹粒・貝粒を少量含む。若干砂性を帯びる。遺構13(方竪)覆土。
21	暗褐色土	土丹粒を少量含む。締まりやや弱い。ピット覆土。
22	暗褐色土	土丹粒を少量含む。若干砂性を帯びる。ピット覆土。
23	暗褐色粘質土	貝粒をわずかに含む。粘性強い。締まりあり。遺構29(方竪?)覆土。
24	暗灰色粘質土	暗褐色砂質土混入。遺構29(方竪?)覆土。
25	暗褐色砂質土	貝砂混入。炭化物を少量含む。遺構29(方竪?)覆土。
26	暗褐色砂質土	IX層に近似。
27	暗褐色砂質土	IX層に近似。
28	暗褐色砂質土	地山に似た腐食土質の土。締まりやや弱い。遺構35覆土。
29	灰褐色砂質土	貝砂混入。砂性強い。締まり弱い。遺構20覆土。
30	暗褐色砂質土	貝砂混入。腐食土少量混入。遺構20覆土。
31	暗褐色砂質土	地山に似た腐食土質の土。炭化物を少量含む。遺構22覆土。
32	灰褐色砂質土	貝砂混入。砂性強い。締まり弱い。遺構22覆土。

図4 堆積土層図

第3節 調査軸の設定

調査で使用した測量軸は、鎌倉市第3級基準点から移動して設定した。調査の区画は1m方眼で、南北方向にx、東西方向にyで、西～東に数値が増える。南北方向は真北を示し、調査区のx6・y11は日本測量地系値でx-76384000、y-2529000である。

第4節 堆積基本土層

本調査地点における堆積土層は、砂丘帯後背地に堆積した暗褐色腐植砂泥層上に積み増した埋没土が主である。暗褐色腐植砂泥層からは古代(奈良・平安時代)の土師器、須恵器などの破片が出土している。この堆積土は、長谷小路周辺遺跡では古代遺構、遺物などが検出される黒褐色粘質土と同様に、海浜砂丘後背地の乾陸化過程でつくられた腐植土層と考えられる。乾陸化過程の腐植土の堆積は、土色から数時期にわたっており、その時間幅には多少の地域差があると思われるものの、時代はおおよそ古墳時代初頭～10世紀代に及ぶものと考えられる。11世紀以降の古代末の遺構・遺物はこの腐植土層中には見られず、10世紀に相当する堆積土層の上には中世の文化層が堆積する。近接する遺跡においては、砂丘後背湿地腐植土の上に中世以前の風成砂層である黄白色砂質土の堆積層の中より、中世前半代の手づくねかわらけなどが出土している。

第二章 検出された遺構と遺物

今回の調査面積は、トレンチ状と狭小範囲であったにも関わらず、部分的ではあるが古代の遺構面の調査を行なうことができた。また、中世の遺物包含層からも古代の土器小片が数多く出土しているが、実測できるものはほとんどなく、その大半が土師器甕で、若干ではあるが須恵器なども出土している。年代観はおよそ8世紀後半～10世紀前半にかけてのものと思われる。古代遺構は竪穴住居址1基、土坑2基、ピット2口、中世遺構は方形竪穴址1基、方形土坑1基、土坑9基、ピット19口である。実測遺物は遺構出土のものも含め、主に常滑小甕やかかわらけが占める。以下、各検出遺構と出土遺物について記す。

1～2面掘り下げ時の出土遺物

図7の1～2は瀬戸窯製品。1、2は卸皿口縁部～底部にかけて、3は白磁玉縁碗口縁部、4は瓦質香炉口縁部～脚部であり、口縁部に小孔が一周巡りその上部と下部に菊文スタンプ文様が全体に施されている。5は常滑窯片口鉢口縁部(Ⅱ類)。6、7は糸切りかわらけ皿。6は小皿、7は薄手タイプの小皿である。

第1節 1面検出の遺構と遺物

遺構2(土坑)

調査区の北側の西壁際で検出された。長径85cm、短径48cm、確認面からの深さ15cmを測る。平面は楕円形、断面はゆるやかな丸みを持ち立ち上がる。西側は円形状のピットを切っている。主軸方向はN-37°-W方向を示す。底面の海拔は8.63mを測る。

出土遺物は、糸切りかわらけ大皿2点、手づくねかわらけ皿1点、軽石1点、古代甕片2点などが出土しているが、図化できるものはなかった。

遺構7(土坑)

調査区中央よりやや北側で検出された。長径45cm、短径40cm、確認面からの深さ16cmを測る。平面形は隅丸方形、断面は丸みを帯びゆるやかに立ち上がる。主軸方位はN-3°-W方向を示す。底面の海拔は8.57mを測る。

出土遺物は糸切りかわらけ大皿が1点のみである。

遺構8(土坑)

調査区中央よりやや北側で検出された。長径60cm、短径(55)cm、確認面からの深さ40cmを測る。平面形は円形を呈すると思われるが、西側部分は調査区外に延びる。断面はU字形を呈する。底面の海拔は8.50mを測る。

図化できる出土遺物はない。

遺構9(土坑)

調査区ほぼ中央付近で検出された。長径19cm、短径98cm、確認面からの深さ38cmを測る。平面形は楕円形で、断面はゆるやかな丸みを持ち立ち上がる。主軸方位はN-25°-W方向を示す。底面の海拔は8.51mを測る。

出土遺物は、青磁鎚蓮弁文碗(龍泉窯系)1点、糸切りかわらけ大皿680g、小皿20g、常滑窯製品10点、常滑捏鉢1点、瀬戸窯製品1点、伊勢系土鍋1点、瓦質火鉢1点、滑石スタンプ1点などが出土している。

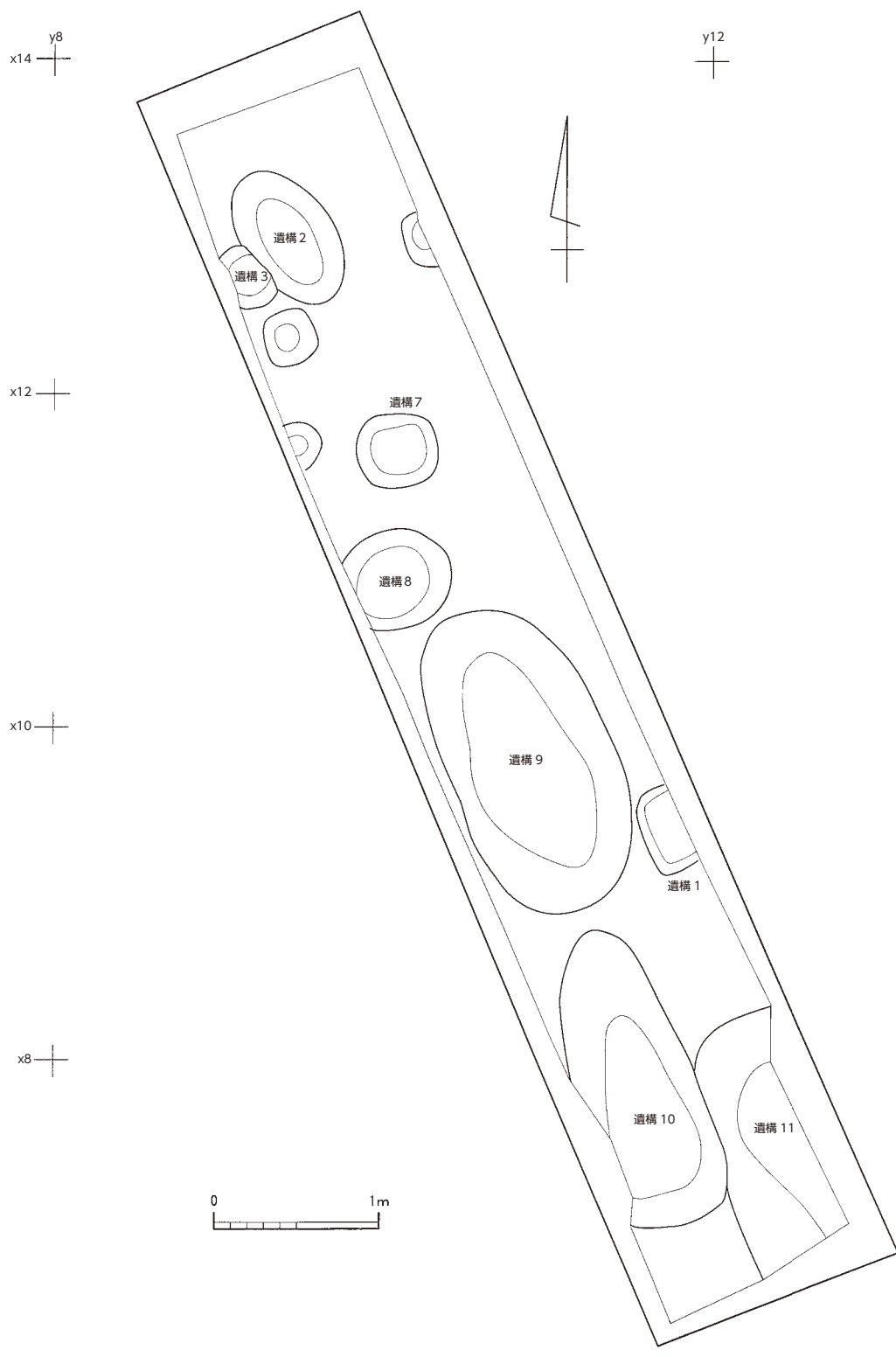


图5 1面遺構全体図

図7-9は瓦質火鉢口縁部であり、口縁部に菊文が施されている。10は青磁櫛劃文皿(同安窯系)1点、11と12は瀬戸窯製品であり、11は褐釉壺胴部、12は折縁鉢体部下位~底部、13は常滑窯片口鉢口縁部(Ⅱ類)、14は糸切りかわらけ薄手タイプ中皿、15は滑石スタンプで撫子文様が施され櫛差し部分の穿孔径は約1cmを測る。

遺構10(土坑)

調査区南の西側で検出された。遺構11を切っている。長径180cm、短径65cm、確認面からの深さは32cmを測る。平面形は楕円形、断面は方形状を呈する。底面の海拔は8.56cmを測る。主軸方位はN-18°

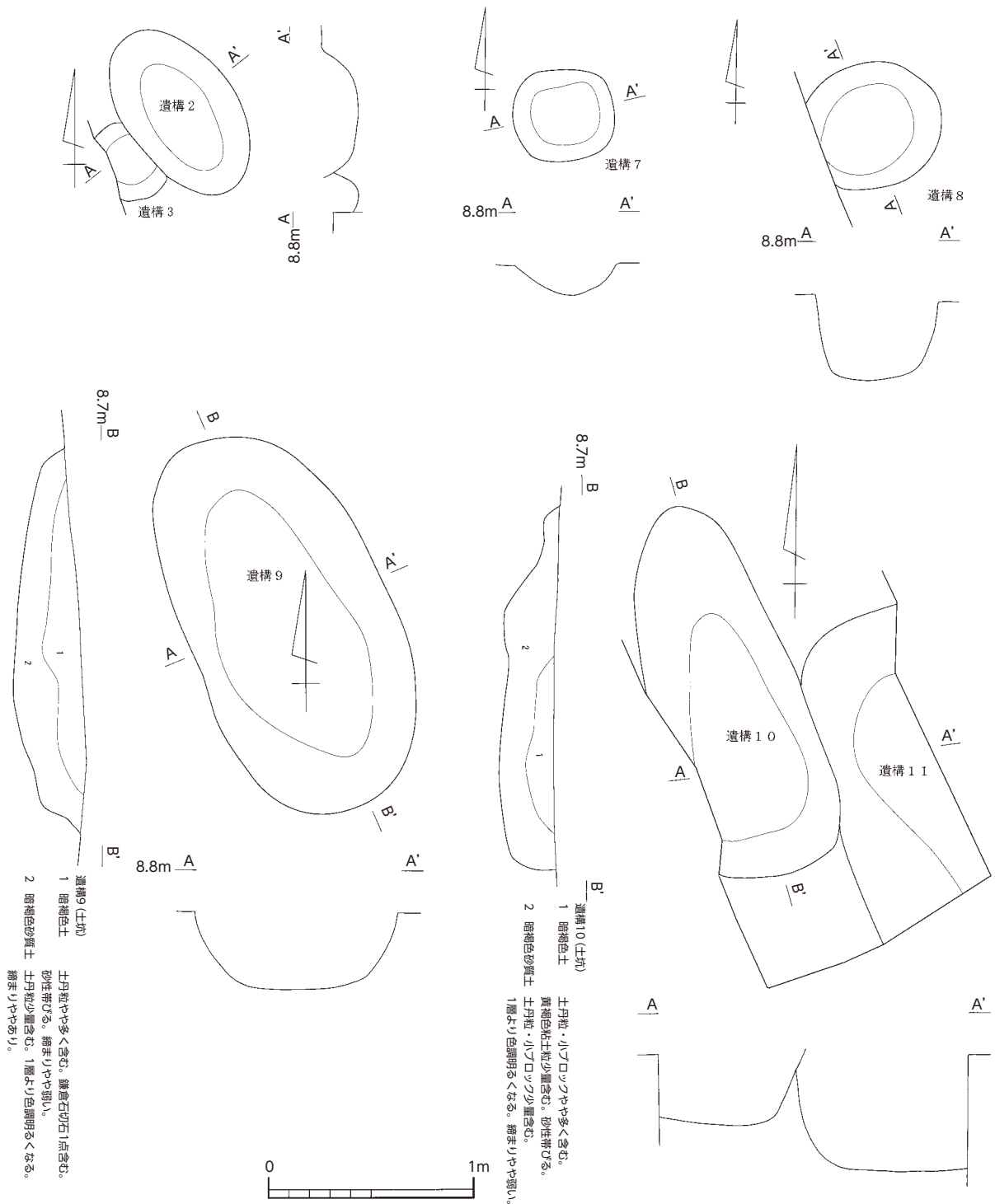


図6 1面検出遺構

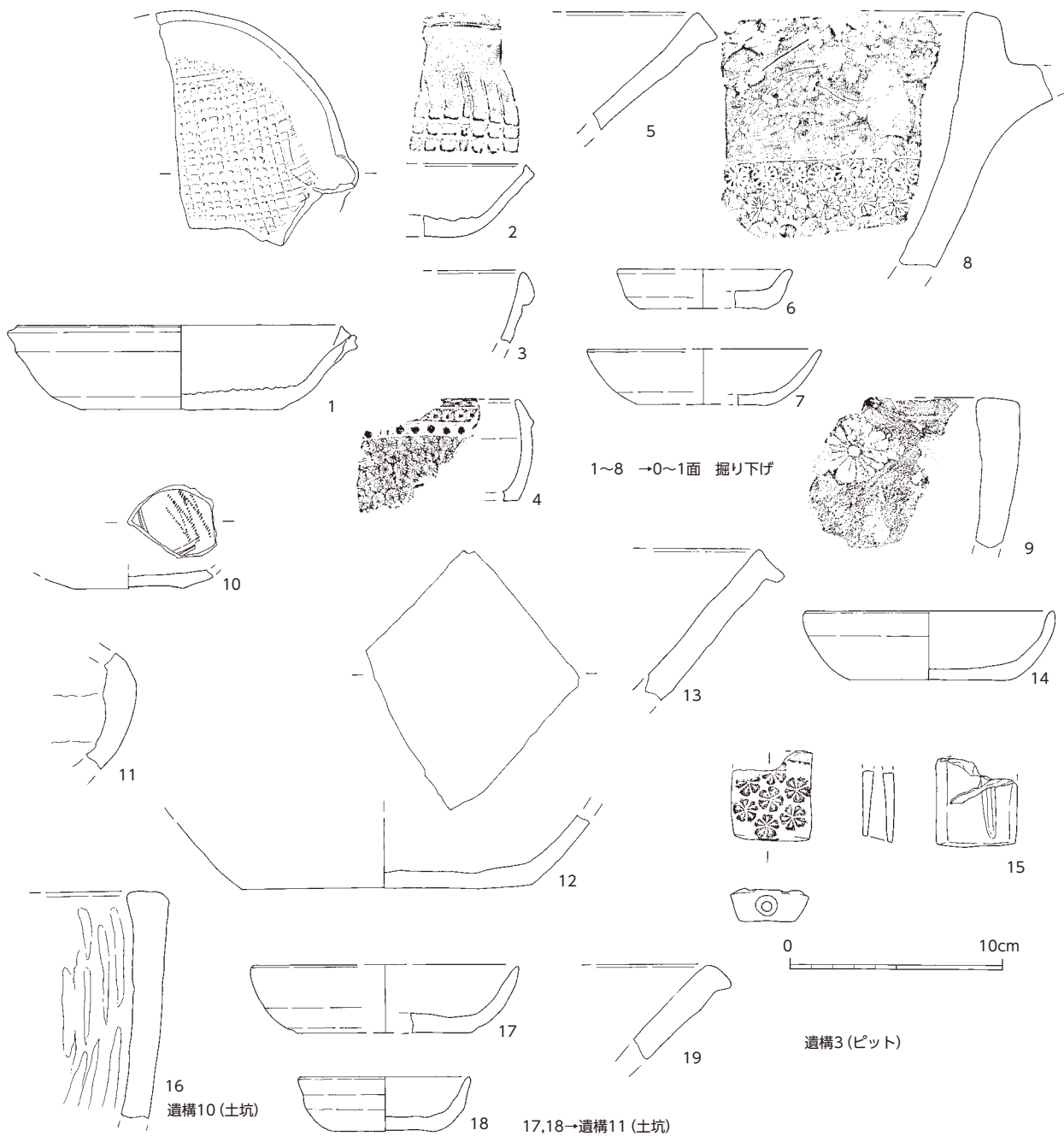


図7 1面遺構出土遺物

-W方向を示す。

出土遺物は、白磁口兀皿1点、常滑窯製品1点、瀬戸窯製品2点、かわらけ糸切り大皿390 g、小皿1点、手づくねかわらけ大皿40 g、小皿1点、古手タイプ1点が出土している。図7-16は瓦質火鉢口縁部～胴部であり、外面の剥離が著しい。

遺構11 (土坑)

調査区南の東側で検出された。遺構10に切られ、南側が調査区外に延びる。長径145cm、短径50cm、確認面からの深さ56cmを測る。平面形は楕円形、断面はU字形を呈する。底面の海拔は8.56mを測る。主軸方位N-18° -W方向を示す。

出土遺物は、常滑窯製品5点、盤1点、土器質火鉢2点、瀬戸窯卸皿1点、直縁大皿1点、糸切りわら

け大皿110g、小皿1点、薄手タイプ小皿1点、古代88点、坏13点、須恵器5点、礫1点などが出土している。図7-17、18は糸切りかわらけ皿であり、17は大皿、18は小皿である。

遺構3

調査区北の西側で検出された。遺構2に切られている。長径95cm、短径(20)cm、確認面からの深さは15cmを測る。平面形は円形を呈する。底面の海拔は8.48mを測る。図7-19は常滑窯片口鉢(Ⅱ類)口縁部である。

第2節 2面検出の遺構と遺物

2面検出の遺構と遺物では、全体図に提示していない遺構20・21・27とその出土遺物について説明を加えている。これらは3面から5面に調査者が配置した遺構であるが、2面に属するのが妥当と考えて本節で説明を加えた。しかし、遺構の配置はあえてそのままにした。曖昧になってしまった点は反省している。なお、図9-42に示した常滑窯無頸壺は2面から3面にかけて掘り進んだ時の出土である。

遺構13

本址は調査区の中央より南側で確認され、ほとんどが調査区外に延びる。全体の規模は把握できなかったが確認時で南北(5.4)m、東西(1.5)mで、壁高は62cmを測る。西側部分に根太痕と思われる痕跡あり、南西部に礎石と思われる伊豆石が一石検出された。床面はほぼ平らである。主軸方位はN-36°-W方向を示す。底面の海拔は7.6mを測る。

出土遺物は、糸切りかわらけ大皿6,400g、小皿570g、薄手タイプ大皿25g、同小皿100g、手づくねかわらけ大皿10g、青磁4点、白磁4点、青白磁2点、瀬戸窯製品9点、常滑窯製品8点、渥美窯製品1点、魚住窯片口鉢1点、伊勢系土鍋1点、火鉢4点、瓦質香炉1点、罌釜6点、骨製品1点、鉄製品5点、銅銭4点、瓦2点などが出土している。

図9-20は瀬戸窯卸皿口縁部～体部(中期Ⅰ)、21～25は常滑窯製品で21は壺胴部、22・23は播鉢口縁部～体部、24・25は甕口縁部～頸部(6b形式)、26～28は片口鉢口縁部(Ⅱ類)、29は山茶碗窯系片口鉢口縁部、30は罌釜口縁部、31は瀬戸窯卸皿底部。32・33は糸切りかわらけ小皿で、33は薄手タイプ、34は瓦質火鉢口縁部～胴部、35は磨石で石材は安山岩である。36～39は銅銭である。36は淳化元寶(北宋・初鑄年990)、37は天口通寶、38は紹聖元寶(北宋・初鑄年1094)、39は元豐通寶(北宋・初鑄年1078)である。

遺構20

調査区の中央下位東で検出された。東・南側部分が調査区外に延びる。平面形は長径(70)cm、短径(25)cm、確認面からの深さ30cmを測る。平面形は楕円形を呈すると思われる。断面はU字形を呈すると思われる。底面の海拔は7.40mを測る。

出土遺物は図9-40の古代小甕胴下部～底部である。

遺構21

調査区の南側で検出された。遺構20を切っている。平面形は楕円形を呈し、長径148cm、短径78cm、確認面からの深さ31cmを測る。断面形はU字形を呈する。底面の海拔は7.45m、主軸方位はN-30°-W方向を示す。

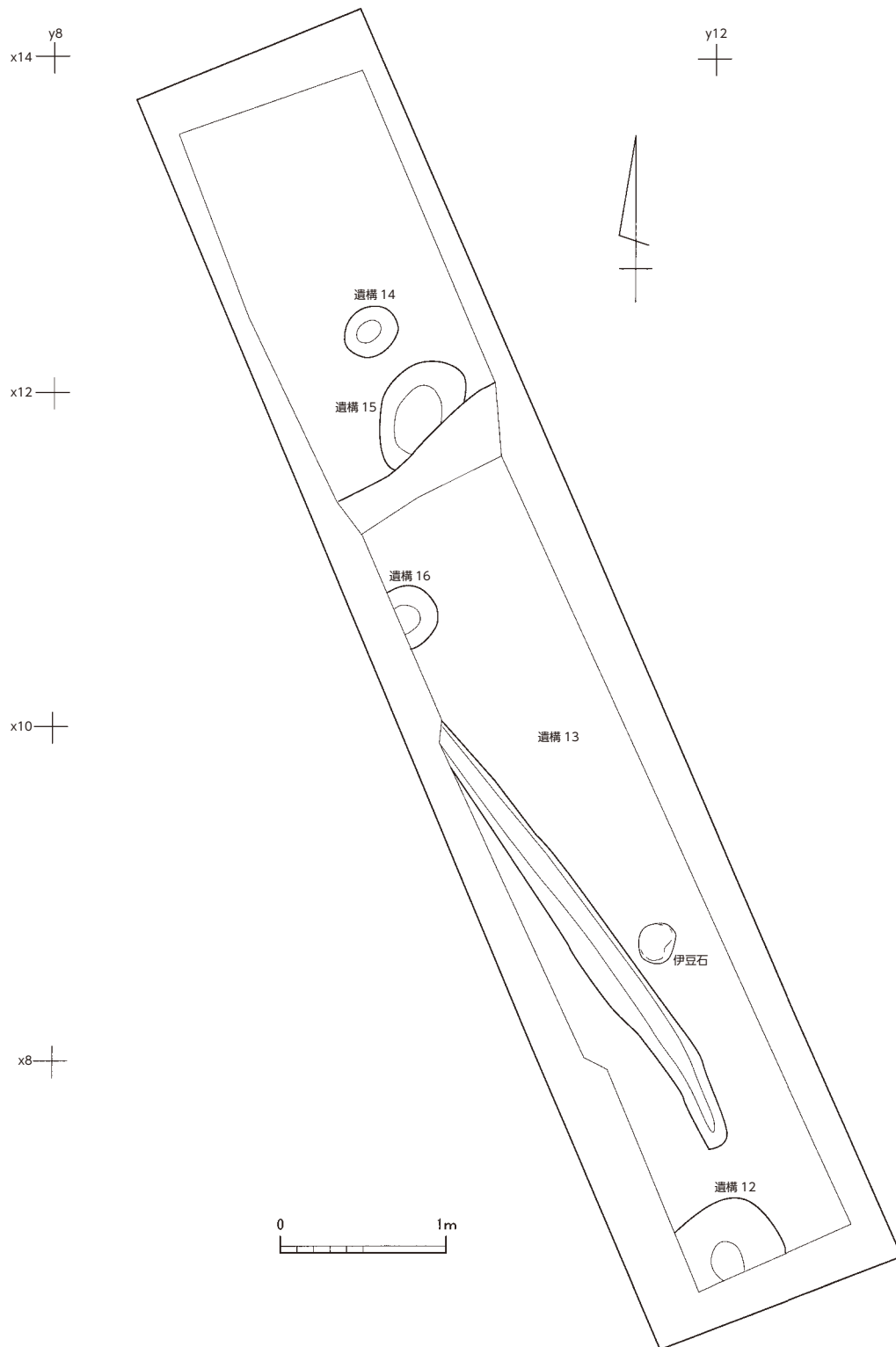


図8 2面遺構全体図

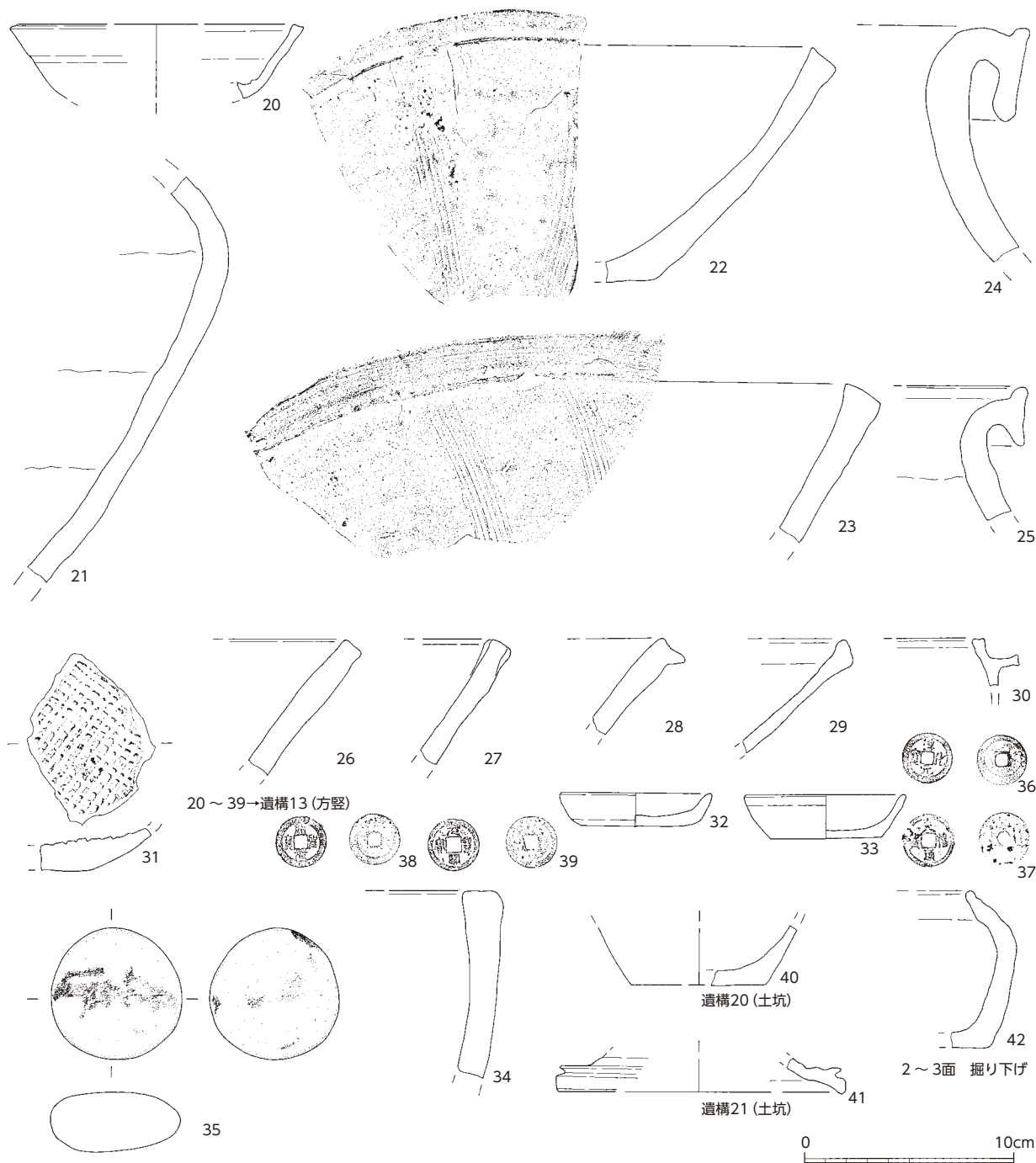


図9 2面遺構出土遺物

出土遺物は瀬戸窯製品2点、須恵器1点、火打石1点などが出土している。図9-41は須恵器の蓋である。

遺構27

調査区北側の東で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径45cm、短径38cm、確認面からの深さ30cmを測る。断面は皿形を呈する。底面の海拔は7.85mを測る。主軸方位はN-82°-E方向を示す。

遺物は図12-43の白磁口兀皿、44の瀬戸窯山茶碗、45・46のかわらけ皿が出土している。白磁口兀皿は底面外周を意図的に打ち欠いたと思われる。かわらけ皿の46は手づくね成形の皿である。

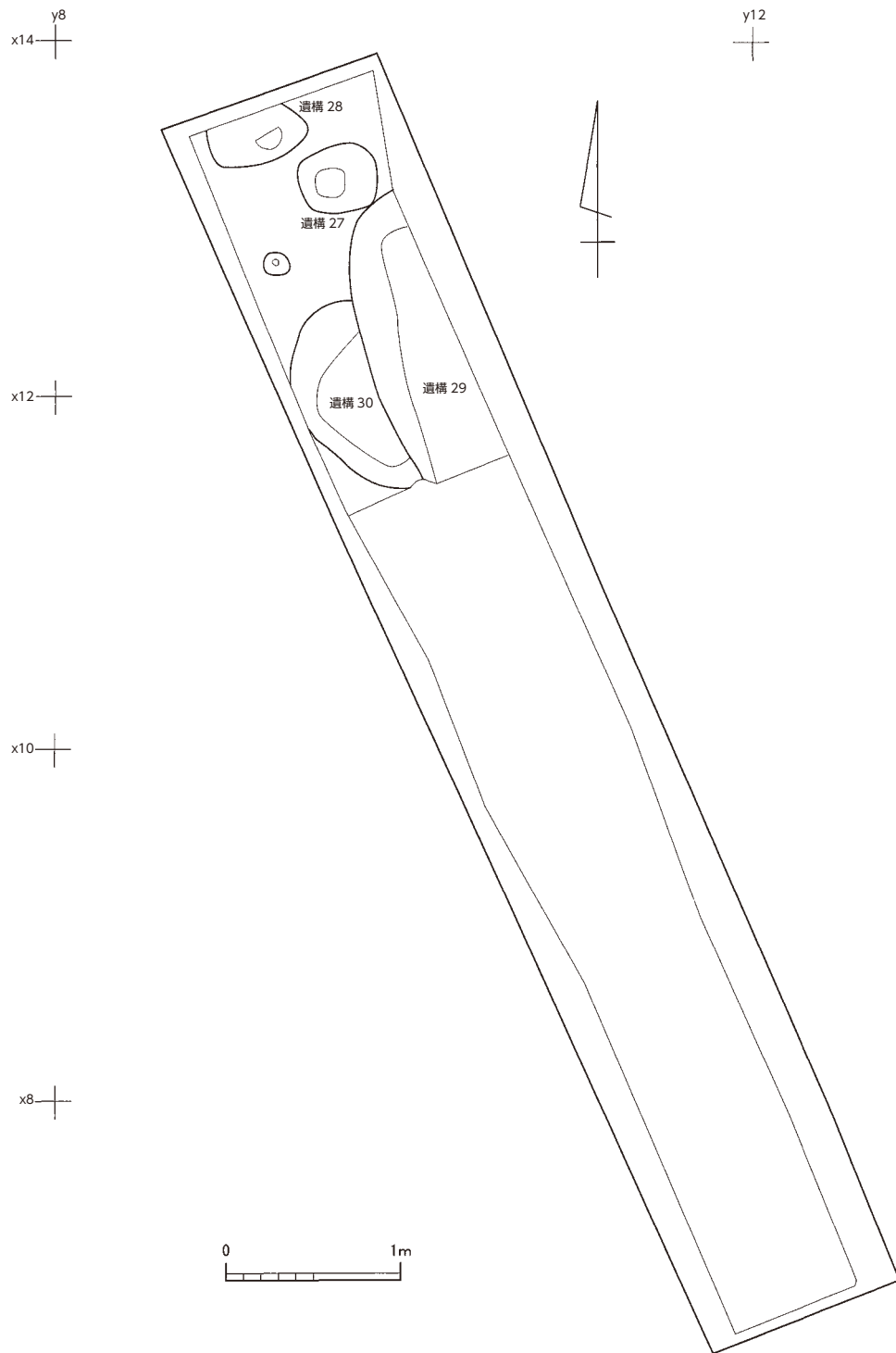


図10 3面遺構全体図

第三節 3面検出の遺構と遺物

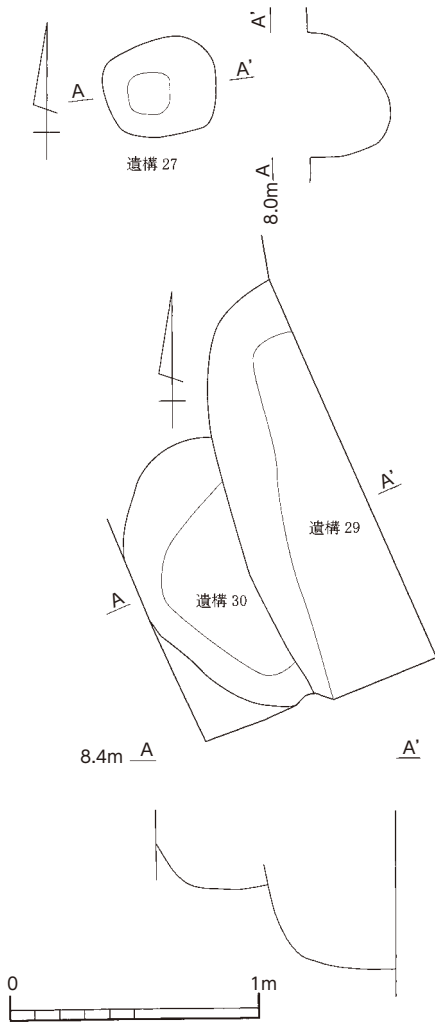


図11 3面検出遺構

遺構29

調査区の北側、東で検出された。遺構30を切っている。平面形は楕円形を呈するものと思われる。確認規模は長径(170)cm、短径(55)cm、確認面からの深さ28cmを測る。断面はU字形を呈する。底面の海拔は7,75mを測る。主軸方位はN-21°-W方向を示す。

出土遺物は糸切りかわらけ大皿1,180g、同小皿70g、薄手タイプ大皿10g、同小皿10g、白磁2点、常滑窯製品4点、青磁2点、硯1点などが出土している。図12-47・48は白磁口兀皿、49はコースター、50～56は糸切りかわらけ皿である。53は薄手タイプ小皿、54は中皿、55・56は大皿である。

遺構30

調査区の東のやや西寄りで検出された。遺構29に切られている。平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。確認規模は長径110cm、短径(40)cm、確認面からの深さ26cmを測る。壁は緩やかに丸味をもって立ち上がる。底面レベルは8.15mを測る。主軸方位はN-46°-W方向を示す。

出土遺物は糸切りかわらけ大皿130g、同小皿5g、常滑窯製品3点、瀬戸窯製品1点、火鉢1点などである。図12-57は瓦質火鉢口縁部～胴部である。

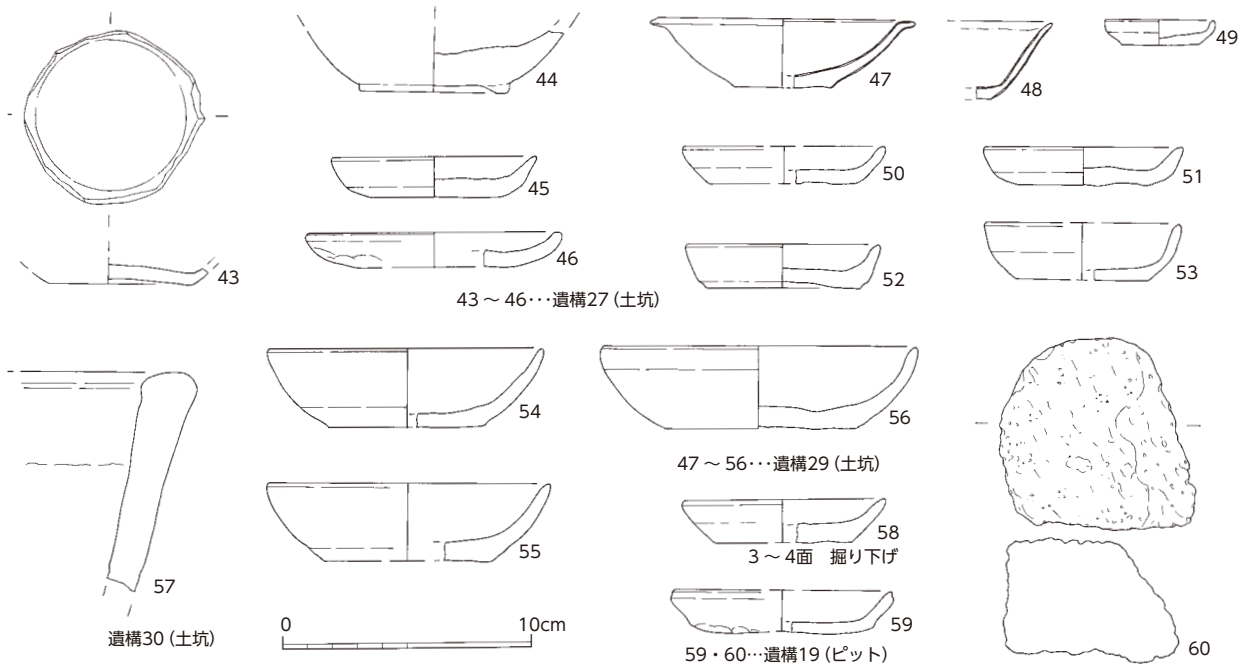


図12 3面遺構出土遺物

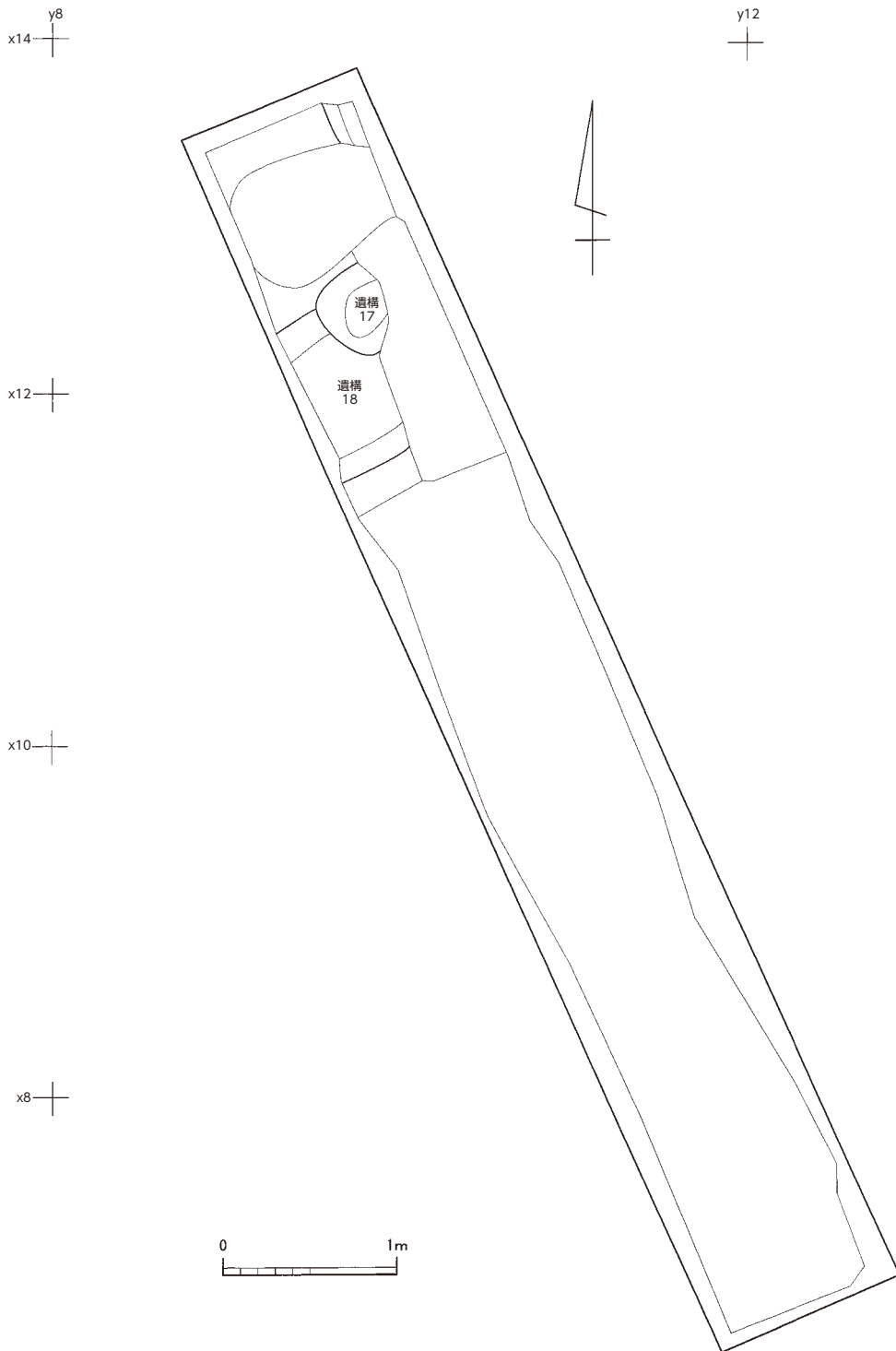
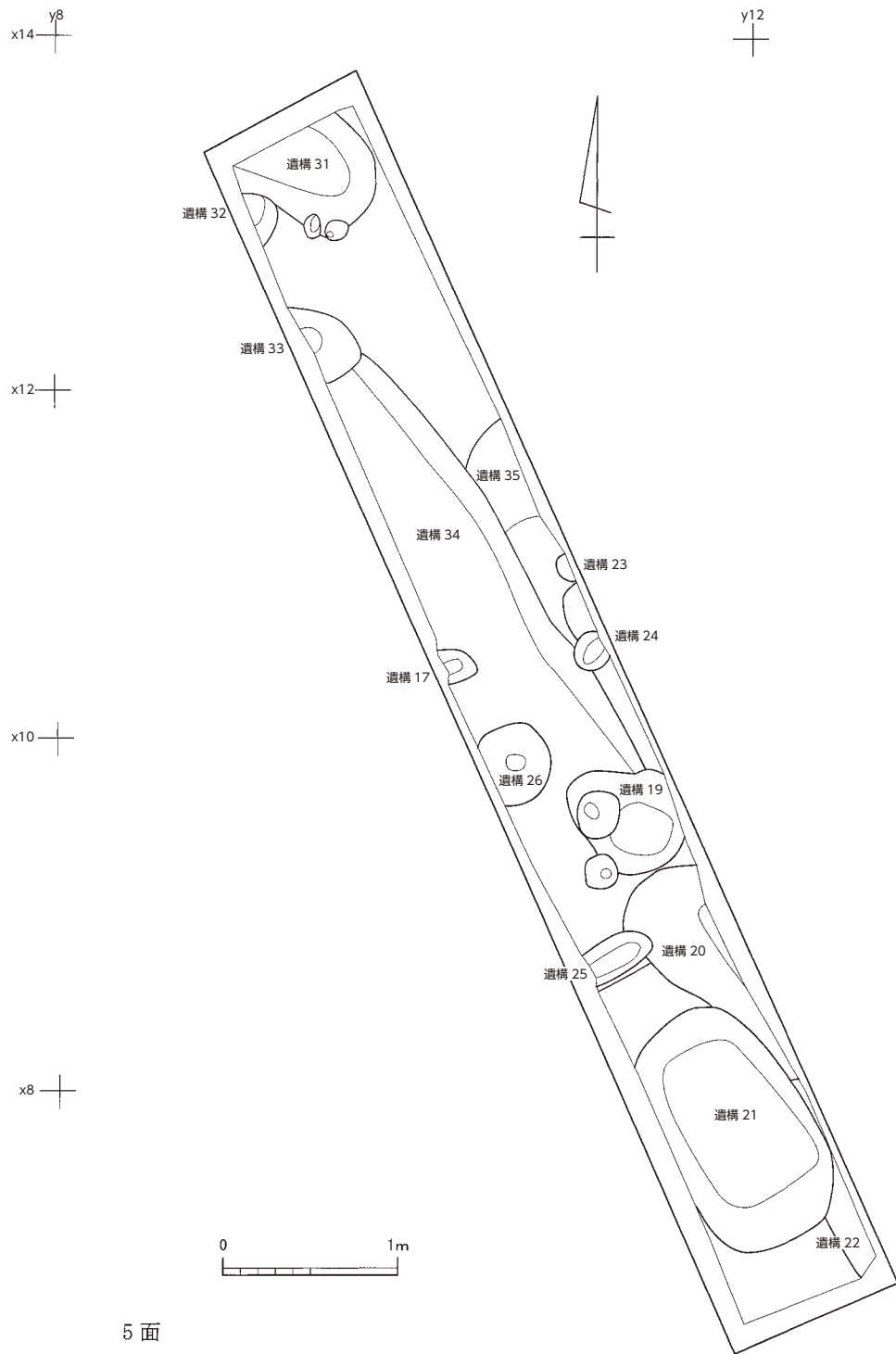


図13 4面遺構全体図



5面

図14 5面遺構全体図

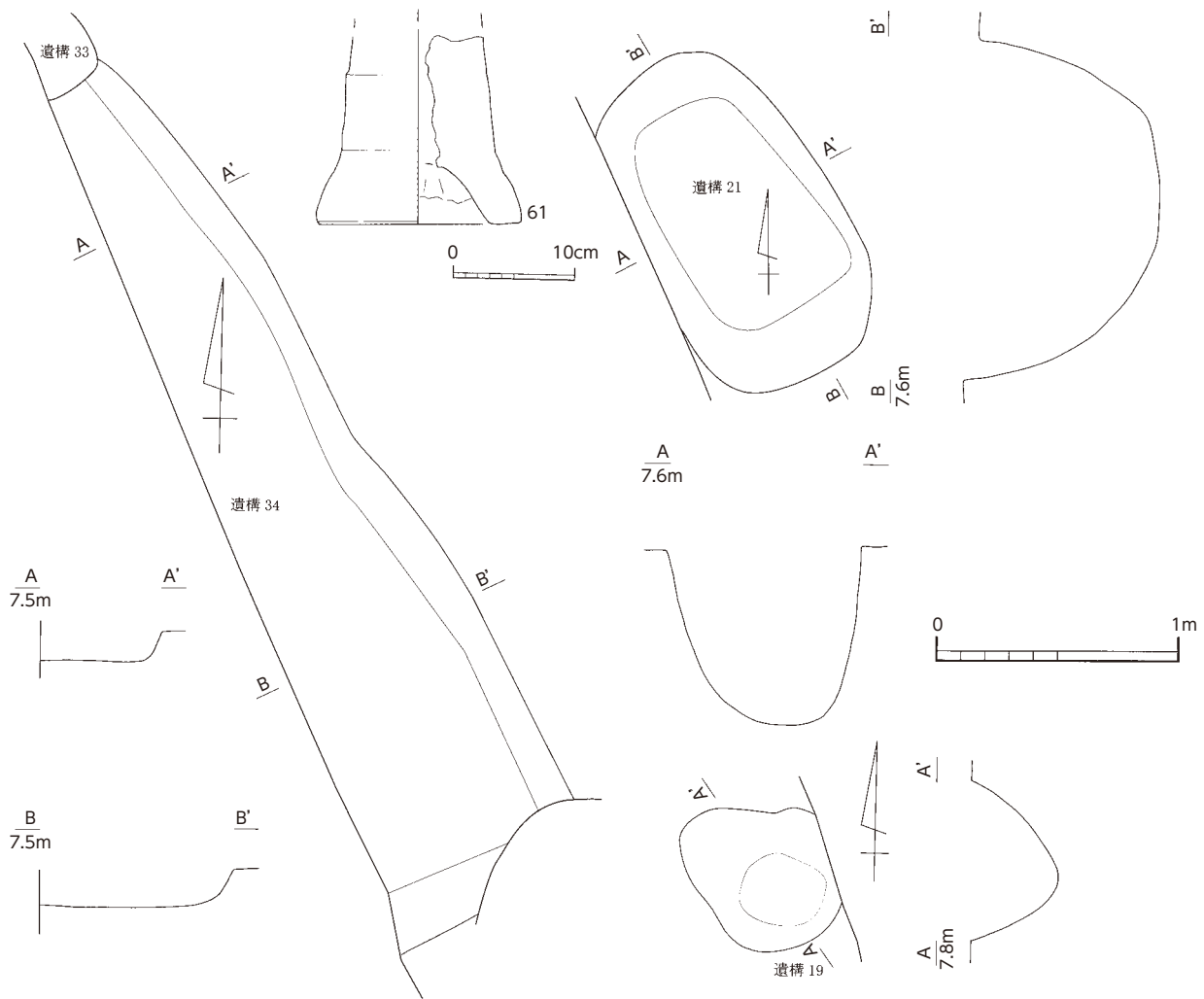


図15 5面検出遺構

第4節 4面検出の遺構と遺物

部分的な検出にとどまった。3面の遺構にほとんどが壊され、図示できる出土遺物も検出できなかった。部分的に確認できたのは、土坑とピットと思われる。

4面を調査中に出土した遺物は、糸切りかわらけ大皿100g、同小皿10g、手づくねかわらけ小皿10g、古手糸切りかわらけ小皿10g、常滑窯製品3点、壁土などが出土している。図12～58のかわらけ皿は3面から4面にかけて出土している。

第5節 5面検出の遺構と遺物

遺構34

本址は調査区の北側寄りで検出された。全体の様相がつかめないため、平面形などは明確ではない。確認規模は長径(4.25)m、短径(0.8)m、確認面からの深さ31cmを測る。床面は平坦であるが付帯施設などは検出されなかった。調査者の所見は、方形竪穴建物であり、本報告でもそれに倣う。底面の海拔レベルは7.10mを測る。主軸方位は、部分的な検出のためはっきりした方向はつかめないが、およそN-38°-W方向を示すものと思われる。

出土遺物は、図示できない小片の中世遺物に混じって、土師器甕47点、高坏1点、坏4点(内赤彩を施

したもの1点)、須恵器坏6点(内身の部分4点、蓋の部分2点)などが出土している。圧倒的に中世の遺物が少ない。個々の遺物出土状況は、実際の現地調査に参加していないので明らかではないが、本址の掘り込み壁に若干くびれている箇所があるので、偶然竪穴住居址と方形竪穴建物の壁ラインが一致し中世遺構として掘ってしまったか、本址を埋める際に竪穴住居址を壊している可能性が高い。

図15-61は高坏あるいは燭台の脚部であり底面より出土している。

遺構33

調査区の北側で検出され、遺構34を切っている。平面形は楕円形と思われる。確認規模は長径(60)cm、短径(23)cm、確認面からの深さ35cmを測る。壁は緩やかな丸味をもって立ち上がる。底面レベルは6.95mを測る。

遺構19

調査区の南寄りで検出された。おにぎり型の平面形を呈する土坑で、部分的に東の調査区外に延びている。確認規模は長径(96)cm、短径70cm、確認面からの深さ50cm、底面レベル7.0mを測る。

図12-59のかわらけ皿と60の軽石が出土している。59のかわらけ皿は手づくね成形の小皿である。

第6節 出土遺物の分析について

出土した遺物の構成表についてはすべての遺物破片数を示した。個体数の大まかな目安を考え、接合できる破片に関しては、接合後の破片を1点としてカウントした。

破片数の多いかわらけについては重量で計測した。また、個体数の多い常滑窯の甕、火鉢の類は実際の個体数より破片数が多くなるため、構成の比率が全体の個体数バランスを示すものとは言い切れない。だが、常滑の構成点数(137点)という数値は突出しており、その性格を顕著に示している。さらにかわらけに関しては、重量の比率で比較したほうが数値的な紛れが少ないものと考え、層位・器形別に分類した。

第三章 まとめ

狭くトレンチ状の調査ではあるが、調査で得られた成果をもとに若干のまとめを行ないたい。ここでのまとめは調査者が意図したことと異なる可能性もあるが、出土遺物と図示された遺構から導いたまとめと考えていただきたい。

周辺の特徴

本地点で検出した遺構や遺物のみで、調査地点の性格を論じることは無謀であるため、これまでの周辺の調査結果などをもとに、本地点近くの特徴を考えたい。なお、調査地点の番号は本報告の図2ものを使用している。

本地点周辺では地点7から地点8を通過して、県道鎌倉・葉山線の北側に平行する道路（吉屋信子記念館前の道路）を結ぶラインが、およその浜地の限界と考えている。堆積土層ではこのラインの北側は中世の基盤層が暗褐色粘土層で南側は黄褐色の砂質土になる。この違いが所謂屋地と浜地であろう。浜地の北限ライン辺りが大仏・極楽寺の切通しを越えて鎌倉中心部に向かう道路のラインと考えているが、これについては、ここでは細かく触れない。中心的な街路は推測されるが、周辺の状況はまだ確認されていない。

由比ガ浜地域の浜地では、地点14～地点15、鎌倉文学館入口周辺で弥生時代～古墳時代前期、奈良・平安時代の竪穴住居址や土器が多く確認されている。このうち、9世紀末～10世紀前半の遺物が多い傾向も確認されている。こうした、土器の出土は本地点を越えて六地藏周辺まで広がりが確認できる。地点1で確認されている鎌倉群衛との関係も強いと推測できる。

中世では、由比ガ浜地域に限ると、13世紀前半の年代をもつ京都系の手づくねかわらけ皿や貿易陶磁器は極めて限定的な地点でしか確認されていない。これが、浜地の開発が（全面的に行なわれるのは）13世紀中頃以降という説の根拠になっている。しかし、本地点から六地藏にかけての調査では手づくねかわらけ皿が、数は多くないが、出土している。今後、調査資料の増加に即して、浜地内での開発時期や性格について考察を加えていく必要がある。

調査地点の年代

中世の出土遺物には手づくねかわらけ皿と白磁玉縁碗片、同安窯青磁皿片が含まれている。これらの遺物は12世紀末から13世紀初めにかけての年代が与えられている。甘縄に近い浜地という立地から早い段階で開発が始まった可能性がある。最も新しい遺物は、近世を除けば、14世紀段階である。

これらのことから、本地点で検出された遺構は13世紀前半の早い段階から14世紀にかけて年代を考えておきたい。

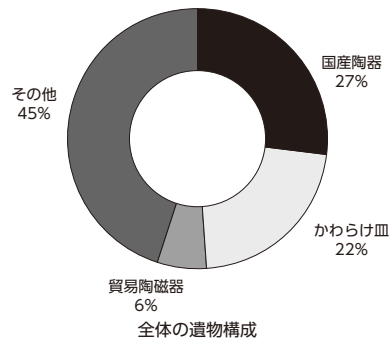
今小路西遺跡 遺物観察表

図版	No.	遺構	種別	口径	底径	器高	備考
7	1	0～1面 掘り下げ	瀬戸卸皿	15.0	9.5	3.9	中期Ⅱ
7	2	0～1面 掘り下げ	瀬戸卸皿	—	—	3.4	
7	3	0～1面 掘り下げ	白磁玉縁碗	—	—	[4.2]	I期
7	4	0～1面 掘り下げ	瓦質香炉	—	—	4.7	
7	5	0～1面 掘り下げ	常滑片口鉢	—	—	[5.3]	Ⅱ類
7	6	0～1面 掘り下げ	かわらけ皿	(8.0)	(6.0)	1.8	糸切り スノコ痕
7	7	0～1面 掘り下げ	かわらけ皿	(10.9)	(6.3)	2.6	糸切り スノコ痕
7	8	0～1面 掘り下げ	瓦質火鉢	—	—	[12.0]	
7	9	0～1面 掘り下げ	瓦質火鉢	—	—	[6.0]	
7	10	1面 遺構9(土坑)	青磁櫛劃皿	—	(5.0)	[0.8]	同安窠櫛劃文
7	11	1面 遺構9(土坑)	瀬戸壺	—	—	[4.4]	褐釉
7	12	1面 遺構9(土坑)	瀬戸折縁鉢	—	[13.4]	[3.3]	灰釉
7	13	1面 遺構9(土坑)	常滑片口鉢	—	—	[7.0]	Ⅱ類
7	14	1面 遺構9(土坑)	かわらけ皿	(11.6)	(7.5)	3.2	糸切り スノコ痕
7	15	1面 遺構9(土坑)	滑石スタンプ	3.8	3.8	1.4	
7	16	1面 遺構10(土坑)	瓦質火鉢	—	—	[10.5]	
7	17	1面 遺構11(土坑)	かわらけ皿	7.9	4.7	2.5	糸切り スノコ痕
7	18	1面 遺構11(土坑)	かわらけ皿	(12.4)	(8.4)	3.2	糸切り スノコ痕
7	19	1面 遺構3(ピット)	常滑片口鉢	—	—	[4.4]	Ⅱ類
9	20	2面 遺構13(方竪)	瀬戸卸皿	(14.0)	—	[3.5]	中期Ⅰ
9	21	2面 遺構13(方竪)	常滑壺	—	—	[19.3]	
9	22	2面 遺構13(方竪)	常滑搦鉢	—	—	[10.8]	Ⅱ類
9	23	2面 遺構13(方竪)	常滑摺鉢	—	—	11.0	Ⅱ類
9	24	2面 遺構13(方竪)	常滑甕	—	—	[6.4]	6b形式
9	25	2面 遺構13(方竪)	常滑甕	—	—	[7.2]	
9	26	2面 遺構13(方竪)	常滑片口鉢	—	—	[6.5]	Ⅱ類
9	27	2面 遺構13(方竪)	常滑片口鉢	—	—	[6.0]	Ⅱ類
9	28	2面 遺構13(方竪)	常滑片口鉢	—	—	[4.5]	Ⅱ類
9	29	2面 遺構13(方竪)	山茶碗窠片口鉢	—	—	[5.4]	
9	30	2面 遺構13(方竪)	鍔釜	—	—	[2.3]	
9	31	2面 遺構13(方竪)	瀬戸卸皿	—	—	[1.9]	
9	32	2面 遺構13(方竪)	かわらけ皿	7.2	5.1	1.6	糸切り スノコ痕
9	33	2面 遺構13(方竪)	かわらけ皿	7.5	5.2	2.1	糸切り スノコ痕
9	34	2面 遺構13(方竪)	瓦質火鉢	—	—	[9.0]	輪花型
9	35	2面 遺構13(方竪)	磨石	6.2	6.2	—	中央部分に煤付着
9	36	2面 遺構13(方竪)	銅銭	2.4	2.4		淳化元寶
9	37	2面 遺構13(方竪)	銅銭	2.4	2.5		天口通寶
9	38	2面 遺構13(方竪)	銅銭	2.4	2.4		紹聖元寶
9	39	2面 遺構13(方竪)	銅銭	2.5	2.4		元豊通寶
9	40	2面 遺構20(土坑)	古代小型壺	—	(6.4)	[2.8]	
9	41	2面 遺構21(土坑)	須恵器蓋	—	(13.8)	[1.9]	Ⅱ類
9	42	2～3面 掘り下げ	常滑無頸壺	—	—	7.4	
12	43	2面 遺構27(土坑)	白磁口兀皿	—	5.8	[0.8]	打ち欠き
12	44	2面 遺構27(土坑)	瀬戸山茶碗	—	6.0	[2.4]	
12	45	2面 遺構27(土坑)	かわらけ皿	8.0	5.0	1.6	糸切り スノコ痕
12	46	2面 遺構27(土坑)	かわらけ皿	(10.0)	—	[1.4]	手づくね
12	47	3面 遺構29	白磁口兀皿	(9.5)	(4.0)	2.7	
12	48	3面 遺構29	白磁口兀皿	—	—	[3.1]	
12	49	3面 遺構29	コースター	4.3	3.0	1.0	糸切り スノコ痕
12	50	3面 遺構29	かわらけ皿	(8.0)	(6.0)	1.5	糸切り スノコ痕
12	51	3面 遺構29	かわらけ皿	(7.8)	5.0	1.5	糸切り スノコ痕
12	52	3面 遺構29	かわらけ皿	7.2	6.2	1.7	糸切り スノコ痕
12	53	3面 遺構29	かわらけ皿	(7.8)	(5.1)	2.2	糸切り スノコ痕
12	54	3面 遺構29	かわらけ皿	(11.4)	(6.6)	3.1	糸切り スノコ痕
12	55	3面 遺構29	かわらけ皿	(10.9)	(6.3)	3.1	糸切り スノコ痕
12	56	3面 遺構29	かわらけ皿	12.5	7.5	3.2	糸切り スノコ痕
12	57	3面 遺構30(土坑)	瓦質火鉢	—	—	[8.8]	
12	58	3～4面 掘り下げ	かわらけ皿	(8.0)	(5.4)	1.7	糸切り スノコ痕
12	59	5面 遺構19(ピット)	かわらけ皿	8.7	—	1.6	手づくね
12	60	5面 遺構19(ピット)	軽石	7.5	7.1	—	
15	61	5面 遺構34 最下層	高坏脚	—	(8.4)	[8.0]	

出土遺物構成

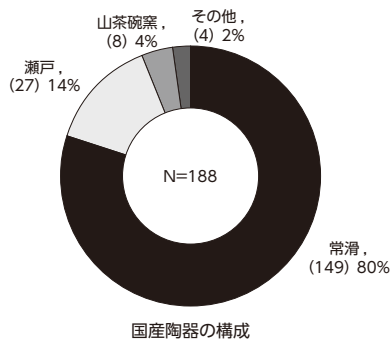
<全体の構成>

出土遺物の構成は、国産陶器27%、かわらけ皿22%、貿易陶磁器6%、その他の遺物が45%である。



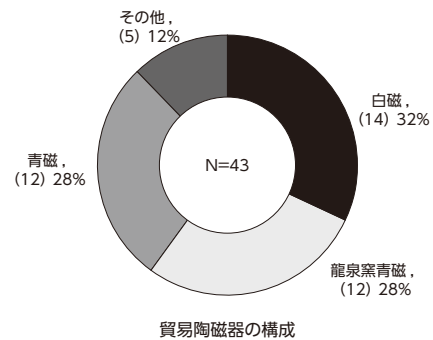
<国産陶器>

国産陶器は188点出土。常滑(149点)80%、瀬戸(27点)14%、山茶碗窯(8点)4%、その他(4点)2%。その他には、渥美、魚住(各2点)が含まれる。



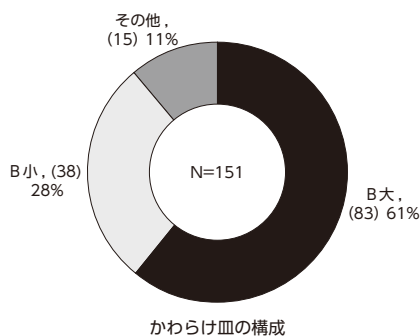
<貿易陶磁器>

貿易陶磁器は43点出土。白磁(14点)32%、龍泉窯青磁(12点)28%、青磁(12点)28%、その他(5点)12%。その他には、青白磁(3点)、同安窯(2点)が含まれる。



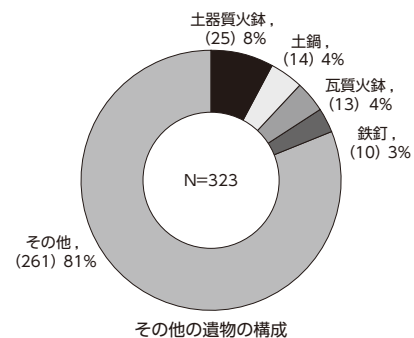
<かわらけ皿>

かわらけ皿は151点分出土。B大(83点)61%、B小(38点)28%、その他(15点)11%。その他には、C大(3点)、C小、D大、D小(各4点)が含まれる。グラフには含めていないが、C中(20g)、E大、E小(各10g)も出土している。



<その他の遺物>

その他の遺物は323点出土。土器質火鉢(25点)8%、土鍋(14点)4%、瓦質火鉢(13点)4%、鉄釘(10点)3%、その他(261点)81%。その他には、古代土器、ウマなどの獣骨、銅銭など261点が含まれる。



出土かわらけ構成 (重量) ※単位はg (グラム)

種別	A大	A中	A小	B大	B中	B小	C大	C中	C小	D大	D小	E大	E小	コースター	合計
出土位置															
～1面	—	—	—	1,590	—	1,210	40	—	18	—	—	—	—	—	2,858
1面	—	—	—	1,250	—	40	—	—	5	60	15	10	—	—	1,380
1～2面	—	—	—	1,170	—	328	—	20	—	—	—	—	—	—	1,518
2面	—	—	—	6,715	—	595	25	—	100	37	—	—	—	—	7,472
2～3面	—	—	—	750	—	20	—	—	—	—	—	—	—	—	770
3面	—	—	—	1,570	—	85	10	—	10	—	—	—	—	—	1,675
3～4面	—	—	—	100	—	10	—	—	—	—	—	—	—	—	110
4～4面下	—	—	—	70	—	—	—	—	—	20	10	—	10	—	110
5面	—	—	—	—	—	5	—	—	—	41	10	—	—	—	56
合計	—	—	—	13,215	—	2,293	75	20	133	158	35	10	10	—	15,949

※かわらけ分類について

先頭のアルフアベットは成形・器形を呈し、Aを胎土粉質で口縁部外反するロクロ糸切り成形、Bをそれ以外のロクロ糸切り成形、Cを焼成良好な薄手造りのロクロ糸切り成形、Dを手づくね成形、Eを初期かわらけに見られるロクロ低回転糸切り・静止糸切り成形で器表面をナデ調整しないタイプとした。後部の漢字は器種を示し、大皿を大、中皿を中、小皿を小とした。コースターは器壁の極端に低い極小型かわらけを示す。

面別かわらけタイプ比率

種別	Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ	Dタイプ	Eタイプ	コースター	合計
出土位置							
～1面	0.000%	97.971%	2.029%	0.000%	0.000%	0.000%	100.000%
1面	0.000%	93.478%	0.362%	5.435%	0.725%	0.000%	100.000%
1～2面	0.000%	98.682%	1.318%	0.000%	0.000%	0.000%	100.000%
2面	0.000%	97.832%	1.673%	0.495%	0.000%	0.000%	100.000%
2～3面	0.000%	100.000%	0.000%	0.000%	0.000%	0.000%	100.000%
3面	0.000%	98.806%	1.194%	0.000%	0.000%	0.000%	100.000%
3～4面	0.000%	100.000%	0.000%	0.000%	0.000%	0.000%	100.000%
4～4面下	0.000%	63.636%	0.000%	27.273%	9.091%	0.000%	100.000%
5面	0.000%	8.929%	0.000%	91.071%	0.000%	0.000%	100.000%
合計	0.000%	97.235%	1.430%	1.210%	0.125%	0.000%	100.000%



1. 1面全景
(西から)



2. 1面全景
(北から)



3. 1面遺構9
(西から)



1. 2面全景
(北から)



2. 2面b (上方) と
5面 (南から)



3. 2面遺構 13
(南から)



1. 4面全景
(北から)



2. 5面全景
(北から)



3. 5面遺構34
(北から)



1. 東壁土層断面
(西から)



2. 北壁土層断面
(南から)



3. 南壁土層断面
(北から)



图7-12



图7-11

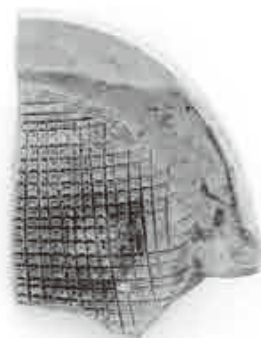


图7-1



图7-10



图7-13



图7-3



图7-8



图7-4

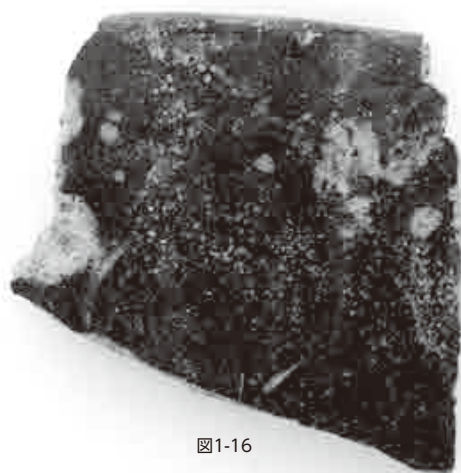


图1-16



图7-5



图7-9



图9-42



图9-41 (内)



(外)



图15-61

出土遺物 (1)



图7-18

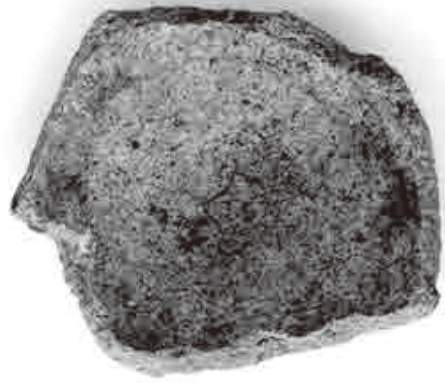


图12-44



图12-51



图12-56



图12-48 (内)

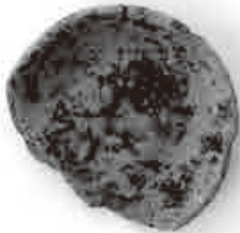


图12-52



图12-49



(外)

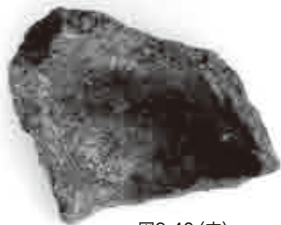


图9-40 (内)



图12-47 (内)



(外)



(外)

出土遺物 (2)